

名古屋大学高等教育研究センター
質保証を担う中核教職員能力開発拠点 II

2023 年度
総合報告書

名古屋大学高等教育研究センター
質保証を担う中核教職員能力開発拠点Ⅱ

2023年度 総合報告書

2024年3月

はじめに

名古屋大学高等教育研究センター（以下、本センターと略す）は、特定部局に属さない学内共同教育研究施設として平成 10（1998）年 4 月に創設されました。設立当初より、高等教育機関の質の向上に取り組み、高等教育研究の一大拠点となることを目標に掲げ、多様な教育改善・教育支援のニーズに応えるべく、学内外の教職員との協働による種々の研究会、実践的な教材や教育プログラムの開発、FD・SD に関連するセミナー・ワークショップなど、着実にその活動を発展させてきました。

平成 22（2010）年には、文部科学省より教育関係共同利用拠点「FD・SD 教育改善支援拠点」の認定を受け、平成 26（2014）年度まで同拠点としての活動を行いました。特に「FD・SD コンソーシアム名古屋」を中心的に牽引し、中部地域を中心として広く大学の教育・学生支援、教職員の自発的な教育改善への貢献に取り組んできました。その間に築いてきたフォーラム開催などの活動は、この地域の複数の大学で組織した新たな枠組みの中で継続されています。

平成 28（2016）年 4 月には本学に教育基盤連携本部が組織されました。国際的にも様々な分野においてリーダーシップを発揮できる「勇気ある知識人」を育成するため、入学前から卒業・修了に至るまで一貫した教育改革を総合的に実施する部局です。同本部にはアドミッション部門と高等教育システム開発部門の 2 つの部門が設けられています。本センターの専任教員 4 名は高等教育システム開発部門に移動し、センターを兼務して活動しています。高等教育システム開発部門では入学から卒業・修了までの学生データを総合的に分析検証する教学 IR システムの構築、国内外の優れた質保証実践に関する調査分析、そして、国際的なベンチマーキングを視野に入れた学生調査の開発実施を行っています。

平成 29（2017）年 8 月、本センターは文部科学省より教育関係共同利用拠点の認定を受け、「質保証を担う中核的教職員能力開発拠点」として再び拠点としての活動を行っています。本事業は、地域および全国各地の高等教育機関と連携し、内部質保証システムを担う教職員の能力向上を支援するための研修や教材を提供することを目指すものです。特に、質保証分野において体系的な能力開発プログラムを提供し、地域の教職員が連携体制を構築するための拠点として活動を行っています。高等教育システム開発部門としての取り組みを通して得られた成果なども反映しながら本拠点としての活動を続けています。そして、令和 3（2021）年には、さらに 3 年間拠点としての活動の延長が認められました。

令和 2（2020）年 4 月 1 日に国立大学法人東海国立大学機構が設立され、名古屋大学と岐阜大学は共通の 1 法人傘下の大学として運営されています。この機構は日本での初めて

の大学運営方式であり、その動向は全国的にも大いに注目を集め、本学の歴史上重要なターニングポイントとなっています。機構では、「勇気をもってともに未来をつくる」を教育の共通理念として掲げ、学生が身につけるべき新たな力を「考え抜く力」「進める力」「伝える力」と位置付け、これらの力を育成するための取り組みを進めています。新法人では両大学に共通した教育システムを発足させ、シナジー効果が出るよう教育機能を強化させる仕組みと運営が強く求められています。本センターの教員は、東海国立大学機構に機構直轄事業として設置された、教育基盤統括本部（アカデミック・セントラル）の主要メンバーとして、インストラクショナルデザインチームや QTA・GSI トレーニングセンターに所属して重要な役割を担っています。

令和 2（2020）年度には新型コロナウイルスが世界的に感染拡大し、大きな被害を与えるとともに、様々な活動が大きな制約を受けました。その影響は、令和 4（2022）年度まで続きました。この間、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受けて、センターにおいては講演会をオンラインで開催するなどして活動しました。オンライン講演会では、遠隔地からの参加者が大幅に増加するという利点が明らかになる一方で、対面での交流が制限されることによって新たな活動が阻害されるという欠点が見られました。

令和 5（2023）年度には、社会生活が本格的にウィズコロナに移行したことから、対面での活動を活発化させました。一方で、コロナ感染拡大期間にオンライン講習会の利点も明らかとなったことから、対面とオンラインのハイブリッドでの活動も増やしています。そして、令和 5（2023）年度にはセンター創設 25 周年を迎えました。それを記念して、令和 5 年 9 月 1 日に名古屋大学野依記念学術交流館において 25 周年記念国際シンポジウムを開催しました。内外からの 4 件の招待講演、パネルディスカッションを開催しました。多数の参加者からいただいたご意見は、今後のセンター活動に生かして参ります。

本報告は、令和 5（2023）年度における高等教育研究センターの活動の全体像として、拠点が同年度に取り組んできた活動をまとめたものです。本センターならびに拠点の活動をご理解いただき、今後の取り組みについてご指導、ご支援を賜りましたら幸いに存じます。

令和 6（2024）年 3 月

名古屋大学高等教育研究センター長 北 栄輔

※本報告書においては、敬称を略して表記している箇所があります。

目次

はじめに	1
目次	3
第 I 部 組織概要	6
1. 高等教育研究センターについて	6
1.1 沿革	6
1.2 高等教育研究センター規程	7
1.3 高等教育研究センター運営委員会規程	9
1.4 人員体制	12
2. 拠点事業について	14
2.1 拠点の概要	14
2.2 拠点における取り組み	15
2.2.1 取り組みの背景と目的	15
2.2.2 重点的に取り組む課題	15
2.2.3 分野別の取り組み計画	15
2.2.4 拠点体制図	17
2.3 拠点運営委員会	18
2.3.1 規程	18
2.3.2 委員名簿	21
2.3.3 委員会開催状況	21
2.4 拠点専門委員会	22
2.4.1 委員名簿	22
2.4.2 開催状況	22
2.4.3 その他	22
第 II 部 令和 5 年度の拠点活動実績	23
1. 組織的研修の開催	23

1.1 招聘セミナー・客員教授セミナー	23
1.2 大学教育改革フォーラム in 東海 2024	35
1.3 その他の主催・共催セミナー	41
2. 講師派遣	82
2.1 学外講師派遣	82
2.2 学内講師派遣	86
3. 教材制作	89
4. 情報提供	90
4.1 情報配信サービス	90
4.2 定期刊行物	91
4.3 オンラインサービス	94
5. 拠点間交流	98
6. 研究会運営	99
6.1 アカデミックスキルズ教育研究会	99
6.2 学生アシスタント養成研究会	100
6.3 教務系 SD 研究会	102
6.4 経済学教育研究会	106
6.5 高大社接続研究会	108
6.6 大学 IR×DX 研究会	110
6.7 名古屋哲学教育研究会	112
6.8 物理学講義実験研究会	114
6.9 マネジメント人材育成研究会	116
7. 研究開発	119
7.1 学術論文	119
7.2 その他執筆	121
7.3 講演発表	122
7.4 国際交流	125
8. 研究プロジェクト	127
9. 受賞・メディア取材など	129

APPENDIX 拠点外令和 5 年度活動実績 130

A.1 教育	130
--------	-----

A.1.1	正課	130
A.1.2	名古屋大学学生論文コンテストの企画運営	132
A.2	学内研修の企画運営	135
A.2.1	東海国立大学機構新任教員研修プログラム	135
A.2.2	学内向け研修	138
A.2.3	大学教員準備講座	142
A.2.4	名古屋大学教員のためのメンタリングプログラム	143
A.2.5	名古屋大学教員のための教育研修プログラム	146
A.2.6	個別の授業改善支援（名古屋大学教職員対象）	148
A.3	学内貢献	150
A.3.1	学内委員・室員等の委嘱	150
A.3.2	学内活動への協力	151
A.4	社会貢献	152
A.4.1	学会等における活動	152
A.4.2	社会における活動	152
A.5	組織運営	153
A.5.1	高等教育研究センター運営委員会委員名簿	153
A.5.2	高等教育研究センター運営委員会開催状況	153
A.5.3	高等教育研究センター会議開催状況	153
A.6	令和5年度基盤的経費	155

第 I 部 組織概要

1. 高等教育研究センターについて

1.1 沿革

名古屋大学高等教育研究センターは、平成 10（1998）年 4 月 9 日に学内共同教育研究施設として設置されました。「国際的な視野のもとに高等教育の発展に戦略的に貢献すること」をミッションとして掲げ、研究開発の成果をふまえた知見の提供や問題解決への参画を行ってきています。

平成 22（2010）年には、文部科学省より教育関係共同利用拠点「FD・SD 教育改善支援拠点」の認定を受け、平成 26（2014）年度まで同拠点としての活動を開始しました。特に「FD・SD コンソーシアム名古屋」を中心的に牽引し、中部地域を中心とした大学の教育・学生支援、教職員の自発的な教育改善への貢献に取り組んできました。その間に築いてきたフォーラム開催などの活動は、この地域の複数の大学で組織した新たな枠組みの中で継続されています。

平成 28（2016）年 4 月には本学に教育基盤連携本部が組織されました。国際的にも様々な分野においてリーダーシップを発揮できる「勇気ある知識人」を育成するため、入学前から卒業・修了に至るまで一貫した教育改革を総合的に実施する部局です。同本部にはアドミッション部門と高等教育システム開発部門の 2 つの部門が設けられており、本センターの教員 4 名は高等教育システム開発部門の教員としても活動しています。高等教育システム開発部門では教育の内部質保証システムの構築が一つの大きな柱となっており、本センターの高等教育システムの開発・改善の活動とシナジー効果を生み出せるよう、鋭意取り組んでいるところです。

平成 29（2017）年 8 月、本センターは文部科学省より教育関係共同利用拠点の認定を受け、「質保証を担う中核教職員能力開発拠点」として再び拠点としての活動を行うこととなりました。本事業は、地域および全国各地の高等教育機関と連携し、内部質保証システムを担う教職員の能力向上を支援するための研修や教材を提供することを目指すものです。特に、質保証分野において体系的な能力開発プログラムを提供し、地域の教職員が連携体制を構築するための拠点として活動を行う予定です。高等教育システム開発部門としての取り組みを通して得られた成果なども反映しながら、本拠点としての活動を行っています。

1.2 高等教育研究センター規程

◎名古屋大学高等教育研究センター規程

(平成 16 年 4 月 1 日規程第 195 号)

改正 平成 18 年 2 月 27 日規程 第 69 号

平成 22 年 7 月 20 日規程 第 13 号

平成 27 年 5 月 7 日規程 第 6 号

平成 29 年 9 月 12 日規程 第 54 号

平成 31 年 3 月 29 日規程 第 143 号

(目的)

第 1 条 名古屋大学高等教育研究センター（以下「センター」という。）は、国内外の研究者の協力を得て、学部及び大学院における教育・研究活動との連携の下に、高度教育に関する研究・調査を行い、高等教育の質的向上に資することを目的とする。

2 センターは、教育関係共同利用拠点として、センターにおける教育・研究上支障のない場合に、他の大学の利用に供することができる。

(職員)

第 2 条 センターに、センター長その他必要な職員を置く。

(運営委員会)

第 3 条 センターに、センターの運営に関する事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

(評価委員会)

第 4 条 センターに、センターの研究活動及び運営全般に関して学外者の立場から助言及び評価を得るため、評価委員会を置くことができる。

2 評価委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

(質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会)

第5条 センターに、教育関係共同利用拠点としての利用及び運営に関する重要事項について審議するため、質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会（以下「拠点運営委員会」という。）を置く。

2 拠点運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

（雑則）

第6条 この規程の定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、総長が定める。

附則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附則（平成18年2月27日規程第69号）

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

附則（平成22年7月20日規程第13号）

この規程は、平成22年7月20日から施行し、平成22年6月10日から適用する。

附則（平成27年5月7日規程第6号）

この規程は、平成27年5月7日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附則（平成29年9月12日規程第54号）

この規程は、平成29年9月12日から施行し、平成29年8月16日から適用する。

附則（平成31年3月29日規程第143号）

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

1.3 高等教育研究センター運営委員会規程

◎名古屋大学高等教育研究センター運営委員会規程

(平成 16 年 4 月 1 日規程第 197 号)

改正 平成 18 年 2 月 27 日規程 第 69 号

平成 19 年 3 月 28 日規程 第 106 号

平成 24 年 3 月 29 日規程 第 105 号

平成 29 年 3 月 30 日規程 第 136 号

平成 31 年 3 月 29 日規程 第 143 号

(趣旨)

第 1 条 名古屋大学高等教育研究センター規程(平成 16 年度規程第 195 号)第 3 条第 2 項の規定に基づく名古屋大学高等教育研究センター(以下「センター」という。)の運営委員会に関する事項は、この規程の定めるところによる。

(審議事項等)

第 2 条 運営委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- 一 センターの将来計画及びその評価に関する事項
- 二 センターの管理運営の基本方針に関する事項
- 三 センターの教員人事に関する事項
- 四 センターの予算及び施設等に関する事項
- 五 その他センターの運営に関する事項

(組織)

第 3 条 運営委員会は、次に掲げる運営委員をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 大学院人文学研究科，大学院教育発達科学研究科，大学院法学研究科及び大学院経済学研究科の教授，准教授又は講師のうちから 2 名
- 三 大学院情報学研究科，大学院理学研究科，大学院医学系研究科，大学院工学研究科及び大学院生命農学研究科の教授，准教授又は講師のうちから 2 名
- 四 大学院国際開発研究科，大学院多元数理科学研究科，大学院環境学研究科及び大学院創薬科学研究科の教授，准教授又は講師のうちから 1 名
- 五 教養教育院長

六 センターの教授及び准教授

七 その他本学の大学教員で運営委員会が適当と認めた者

2 前項第2号から第4号まで及び第7号の運営委員は、総長が任命する。

(任期)

第4条 前条第2項の運営委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前項の運営委員に欠員が生じたときは、その都度補充する。この場合における運営委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 運営委員会に、委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。ただし、委員長に事故がある場合は、あらかじめ委員長が指名した運営委員が議長となる。

(定足数)

第6条 運営委員会は、運営委員の過半数の出席により成立し、議事は、出席者の過半数によって決する。

2 前項の規定にかかわらず、センター長候補者の選考及び教員人事に関する議事を審議する運営委員会は、運営委員の3分の2以上の出席により成立し、当該議事は、出席者の3分の2以上をもって決する。ただし、客員教授及び客員准教授に係る教員人事を審議する場合は、過半数の出席により成立するものとする。

(雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、運営委員会に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附則（平成18年2月27日規程第69号）

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

附則（平成 19 年 3 月 28 日規程第 106 号）
この規程は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 24 年 3 月 29 日規程第 105 号）
この規程は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 29 年 3 月 30 日規程第 136 号）
この規程は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 31 年 3 月 29 日規程第 143 号）
この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

1.4 人員体制

◎センター長（兼任）

教授 北 栄輔 情報学、機械工学、計算科学
（大学院情報学研究科）

◎専任教員

教授 加藤 真紀 高等教育学、国際人口移動、知識創造
准教授 安部 有紀子 高等教育マネジメント、学生支援
准教授 安田 淳一郎 高等教育学、学習評価、物理教育研究（2023年10月着任）
助教 齋藤 芳子 科学技術社会論、科学技術政策

◎特任教員等

特任准教授 松本 みゆき 産業・組織心理学、キャリア発達論
特任准教授 和嶋 雄一郎 IR、知識工学、認知科学
特任助教 竹永 啓悟 高等教育論
拠点研究員 東岡 達也 高等教育論

◎客員教員

・海外客員教員

2024.1～2024.2 Choi, Seung-hyun（韓国 忠北大学校）

・国内客員教員

2023.4～2023.7 朴澤 泰男（国立教育政策研究所）

2023.8～2023.11 黒田 一雄（早稲田大学）

2023.12～2024.3 栗田 佳代子（東京大学）

◎アシスタント

岡田 久樹子 事務員

谷口 千佳 事務員

飯田 洋子 拠点事務補佐員

内藤 龍之介 事務補佐員

森 和大 事務補佐員

林 昌幸 事務補佐員 (2024年3月より)

2. 拠点事業について

2.1 拠点の概要

高等教育研究センターではこれまで、名古屋大学内のみならず全国の大学の教育の質向上を支援するため、情報収集、ツール開発、セミナー・教材の提供、相談業務などを行ってきました。

こうした実績が評価され、高等教育研究センターは平成 29（2017）年 8 月に文部科学大臣から教育関係共同利用拠点として令和 3（2021）年度まで 5 年間の認定を受けることとなりました。平成 22～26（2010～2014）年度の認定に続き、2 度目の認定となります。

今日の状況に鑑み、本拠点では、内部質保証システムの強化と高等教育の現代的課題に関する体系的な能力開発プログラムの提供を行うこととしています。そのため、「キャリア段階別」「専門的職員の分野別に関する内容」の SD および「基礎的・共通的」FD を中心に、全国調査でも課題となっている、IR に基づく教学マネジメントに関する SD、および、マネジメント能力向上 SD に重点をおいた研修を提供しています。また、全国の大学で重点課題となっている、アクティブラーニングを推進する FD ワークショップにも取り組んでいます。これまでに蓄積した知見と、本事業の中で得られた成果を、全国の高等教育機関に利用しやすいように提供することを心がけています。

令和 3（2021）年 7 月には文部科学省より教育関係共同利用拠点の再認定を受け、令和 7（2025）年 3 月 31 日まで拠点の活動を継続することになりました。

2.2 拠点における取り組み

2.2.1 取り組みの背景と目的

今日の質保証においては、内部質保証システムの構築がその中心的取り組みであり、教育プログラムの一貫性とエビデンスベースの評価、IR 機能等の検証システムの構築がとりわけ重要です。特に、これらの推進を担う教職員は、内部質保証システムにおいて重要な役割を果たすことが期待されています。

各大学で内部質保証システムの機能を果たす部門の設置などが進む一方、そうした教職員に対するその能力開発の機会や教職員同士の連携体制の構築は、十分とはいえません。大学教職員のキャリアが多様化する中、質保証の中核を担う教職員の多様な研修ニーズに応える教材と研修機会の提供は喫緊の課題であり、本拠点はこの課題解決に資することを目指します。

2.2.2 重点的に取り組む課題

SD に関しては、職員としての基礎的・共通的な SD、キャリア段階別の SD、専門的職員の分野別 SD のいずれにおいても、十分に提供されていないことが、文部科学省の調査でも指摘されています。これをふまえて、IR に基づく教学マネジメントに関する SD やマネジメント能力向上 SD に重点をおいた研修の開発と提供を進めます。

また、同調査ではアクティブラーニングを推進する FD ワークショップも不十分であると指摘されています。アクティブラーニングを単に活動型の授業とはとらえず、問いのつくり方、授業における発問活用、試験や課題における良問の作成などに重点をおいた研修の開発と提供を進めます。

2.2.3 分野別の取り組み計画

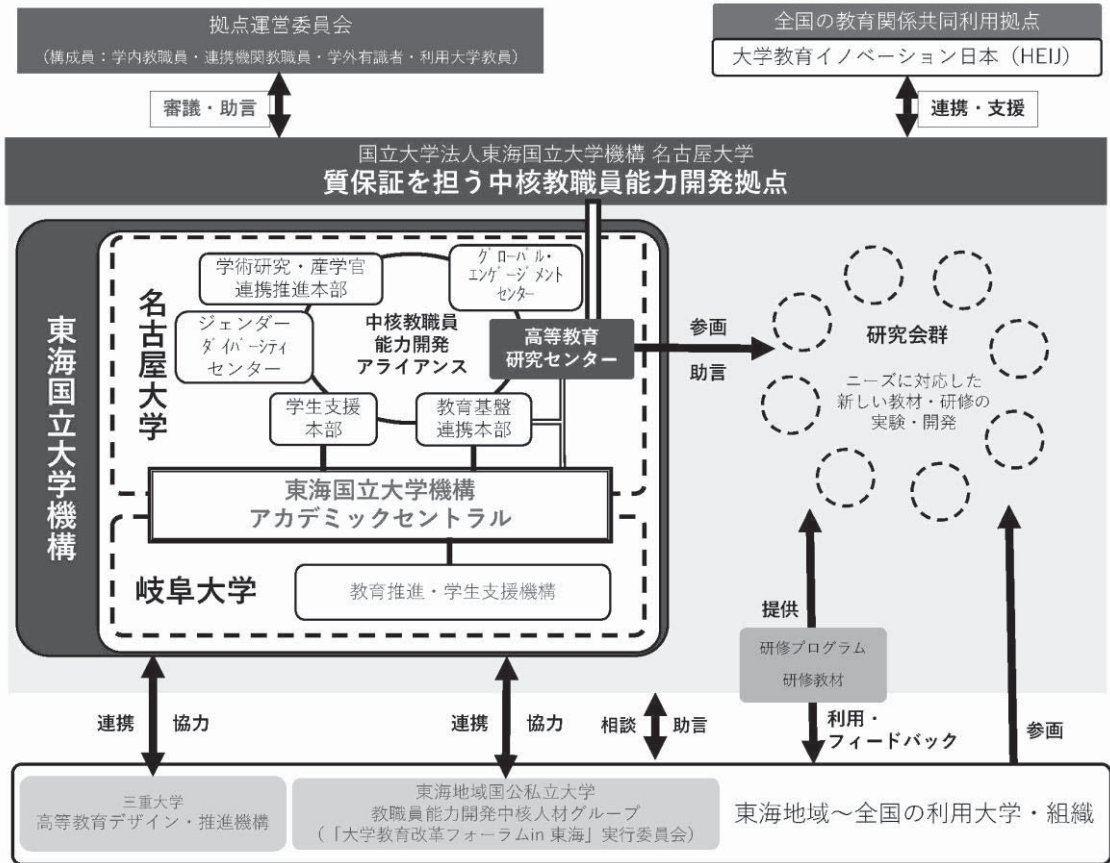
本拠点では、プログラム開発研究会を通じて、変化する個別ニーズに対応する研修と教材の開発を進める点が特徴です。さまざまな専門分野の教職員の協力を得て、各大学のニーズに適合し、より効果的な教職員の能力開発の実現を目指します。

研修プログラムの開発や提供にあたっては、名古屋大学内での協働体制の下、高等教育研究センターを中心に、教育基盤連携本部、高等教育研究センター、学術研究・産学官連携推進本部、国際機構（現：グローバル・エンゲージメントセンター）、学生支援センター（現：

学生支援本部)、男女共同参画センター(現:ジェンダーダイバーシティセンター)が連携して取り組みます。また、東海地域を中心に、学外の教職員の協力と参画を得ながら進めます。こうした連携体制により、次のような分野でプログラムの提供を進める見込みです。

FD	
教員として必須の基礎的・共通的な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究倫理 ・アクティブラーニング ・英語による授業
学問分野別に関する内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究倫理講座 ・哲学教育 ・物理学教育
プレ FD に関する内容	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教員準備講座 ・大学教員準備講座(実務家教員向け)
FD 担当者に必要な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・FD 委員長、FD 委員支援
SD	
職員として必須の基礎的・共通的な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・教務職員支援
キャリア段階別に必要な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・管理職向けマネジメント研修
専門的職員の分野別の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・IR 分野 ・アドミッション分野 ・学生支援分野 ・留学生支援分野 ・研究支援分野 ・ダイバシティマネジメント分野

2.2.4 拠点体制図



2.3 拠点運営委員会

2.3.1 規程

◎名古屋大学高等教育研究センター質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会規程
(平成 29 年 9 月 12 日規程第 55 号)

改正 平成 31 年 3 月 29 日規程 第 143 号

令和 2 年 4 月 1 日名大規程 第 7 号

(趣旨)

第 1 条 名古屋大学高等教育研究センター規程(平成 16 年度規程第 195 号)第 5 条第 2 項の規定に基づく名古屋大学高等教育研究センター(以下「センター」という。)の質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会(以下「拠点運営委員会」という。)に関する事項は、この規程の定めるところによる。

(審議事項)

第 2 条 拠点運営委員会は、センターの教育関係共同利用拠点としての利用及び運営に関する重要事項について審議する。

(組織)

第 3 条 拠点運営委員会は、次に掲げる拠点運営委員をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 センターの教授 1 名
- 三 教育推進部長又は学生支援監
- 四 名古屋大学以外の学識経験者 5 名以上
- 五 その他センター長が必要と認めた者

2 前項第 4 号の拠点運営委員の数は、全委員の 2 分の 1 以上とする。

3 第 1 項第 4 号及び第 5 号の拠点運営委員は、センター長の推薦により、総長が任命又は委嘱する。

4 前項の推薦を行う場合において、センター長は、センター運営委員会の議を経るものとする。

(任期)

第4条 前条第3項の拠点運営委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前項の拠点運営委員に欠員が生じたときは、その都度補充する。この場合における拠点運営委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 拠点運営委員会に委員長を置き、第3条第1項第1号の拠点運営委員をもって充てる。

2 委員長は、拠点運営委員会を招集し、その議長となる。ただし、委員長に事故がある場合は、あらかじめ委員長が指名した拠点運営委員が議長となる。

(定足数)

第6条 拠点運営委員会は、拠点運営委員の過半数の出席により成立し、議事は、出席者の過半数によって決する。

(意見の聴取)

第7条 拠点運営委員会が必要と認めたときは、拠点運営委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第8条 拠点運営委員会が必要と認めたときは、専門委員会を置くことができる。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、拠点運営委員会に関し必要な事項は、拠点運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附則

この規程は、平成29年9月12日から施行し、平成29年8月16日から適用する。

附則（平成31年3月29日規程第143号）

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

附則（令和２年４月１日名大規程第７号）
この規程は、令和２年４月１日から施行する。

2.3.2 委員名簿

委員長	北 栄輔	高等教育研究センター センター長
委員	大津 史子	名城大学薬学部 教授
委員	大塚 知津子	瀬木学園 理事長／愛知みずほ大学・短期大学 学長
委員	近田 政博	神戸大学大学教育推進機構大学教育研究センター 教授
委員	松下 佳代	京都大学大学院教育学研究科 教授
委員	飯吉 弘子	大阪公立大学 学長補佐／国際基幹教育機構高等教育研究開発センター センター長／教授
委員	加藤 真紀	高等教育研究センター 教授
委員	佐久間 淳一	学生支援本部 本部長
委員	鎌澤 かおり	教育推進部 部長

2.3.3 委員会開催状況

	日程	主な議題
第7回	2023年6月13日 Teams オンライン会議	令和4年度活動報告、令和5年度活動計画

2.4 拠点専門委員会

2.4.1 委員名簿

委員長	北 栄輔	高等教育研究センター センター長
委員	加藤 真紀	高等教育研究センター 教授
委員	安部 有紀子	高等教育研究センター 准教授
委員	安田 淳一郎	高等教育研究センター 准教授 (2023 年 10 月より)
委員	松本 みゆき	高等教育研究センター 特任准教授
委員	和嶋 雄一郎	高等教育研究センター 特任准教授
委員	齋藤 芳子	高等教育研究センター 助教
委員	竹永 啓悟	高等教育研究センター 特任助教
委員	東岡 達也	高等教育研究センター 研究員

2.4.2 開催状況

	日程	主な議題
第 40 回	2023 年 4 月 28 日	前期活動計画
第 41 回	2023 年 5 月 26 日	運営委員会の準備
第 42 回	2023 年 9 月 27 日	進捗の確認
第 43 回	2023 年 10 月 19 日	後期活動計画
第 44 回	2024 年 1 月 19 日	進捗の確認
第 45 回	2024 年 3 月 8 日	次年度計画と年度報告書確認

2.4.3 その他

高等教育研究センター会議及び高等教育システム開発部門会議を月に 1 度開催しており、拠点事業を含む各種業務について審議報告を行っている。

今年度の開催状況は巻末の Appendix を参照。

第 II 部 令和 5 年度の拠点活動実績

1. 組織的研修の開催

1.1 招聘セミナー・客員教授セミナー

○第 111 回客員教授セミナー

「少子社会日本の高等教育機会－大学進学・選択行動の地域的差異から考える－」

講 師：朴澤 泰男（国立教育政策研究所高等教育研究部 総括研究官）

日 時：2023 年 7 月 20 日（木）14:00～16:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概 要：大都市圏と地方では、高校生の大学進学・選択行動はどう異なるのか。日本の高等教育機会のあり方を考える上で、そのことが持つ意味とは何か。一見、大きな違いに見える大都市圏と地方に共通した進路選択の構造はあるのか。本セミナーでは、公的統計や、高校生の進路に関する調査データの分析を通して、「進学する側」「大学を選ぶ側」の論理と、その地域ごとの文脈を読み解くことをねらいとします。

講演要旨：

現代日本における高校生の大学進学・選択行動の地域的差異を検討し、少子社会の高等教育機会をめぐる政策課題について、一つの見方を示すための議論を行った。

大学進学率は都道府県間に違いがあるが、その地域分布は近年、3 大都市圏で最も高く、より遠方になるほど概ね低くなっている。進学率は、県間差そのもの（だけ）が重要というより、その背後で起きていること、「その地域で顕著に見られる行動選択」の違い（構造）が重要である。大学進学・選択については、日本の中に「3つの世界」があると言えるほど地域的差異が顕著なため、「大都市圏」（1 都 2 府 5 県）、「地方 A」（24 県）、「地方 B」（北海道、東北、九州・沖縄の 15 道県）の 3 つの地域類型を仮に設けて議論を進めた。

県間差の「背後で起きていること」とは端的に、「大学進学希望の有無が両親年収に左右される傾向」が地方 B ほど強いことである。高校生の進路を保護者に尋ねた調査を分析すると、子が男子の場合、年収による大学進学希望の差は大都市圏<地方 A<地方 B となっている。一方、年収による差は中 3 成績の低い方が、また男子より女子の方が大きい。大都市圏では、低年収・低成績でも進学をせざるを得ない状況もあると見られる。

また、『学校基本調査』の調査票情報の分析結果によれば、大都市圏に偏在する入学難易度の高い私立大学への進学が多さが、大都市圏>地方 A>地方 B の順となることが、大学進学率全体の同様の差も生じさせていることが分かる。進学先の地域については、「地元志向」の大都市圏、「大都市圏志向」の地方 A、「(自県を含む)近県志向」の地方 B という違いがある。この違いは、進学のコストだけでなく、リターンの構造の相違によっても説明がつく可能性のあることが、大学教育投資の私的內部収益率の県間比較から明らかになる。

18 歳人口の中では、大都市圏在住者の比重が増す趨勢がある。大学進学のコストでの「少子社会」の一つの意味は、地方の 18 歳が「少数者」になっていることだと言えよう。地方在住者は、進学費用だけに着目すれば、大都市圏と非対称な関係に置かれている。「大都市圏なら進学している成績」でも進学しない、「本来の学力」で入学できるより低い難易度へ進学するといった状況があるとすれば、公平性だけでなく効率性の観点からも問題がある。他方、大都市圏在住者にも、(域内進学が主流となる構造に起因する)理科学進学のコストの困難など特有の不自由が存在し、地方振興策への潜在的不満も大きいと見られる。

高校生の大学進学・選択行動は、地域的差異が大きいものの、大都市圏も地方も費用は小さく、利益は大きくなるよう進路選択を行うと解釈できる点では共通の構造を持つ。少子社会日本の高等教育機会のあり方を考える上で、「大都市圏の不自由」、「地方の不利益」をともに踏まえることが重要と考えられる。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/10/>

○第 209 回招聘セミナー／名古屋哲学教育研究会セミナー

「専門職養成における哲学教育の実践」

講師：久保田 祐歌（関西福祉科学大学社会福祉学部 教授）

本田 康二郎（金沢医科大学一般教育機構 准教授）

日時：2023 年 10 月 27 日（金）15:00～17:00

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ

共催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概要：本セミナーでは、まず久保田氏から、社会福祉専門職を目指す学生に対する哲学教育について、ご報告いただきます。とくに、社会福祉専門職に必要とされる批判的思考の定義とこれを育成するための方法として検討している内容をご説明いただきます。

続いて本田氏から、「倫理的直観を他者に説明するために学ぶ倫理理論」の実践をご報告いただきます。工学倫理の教育手法を医療倫理教育に応用するとどのような講義になるの

か、インフォームド・コンセントの実施に規範倫理をいかに活用するのかを中心にご説明いただきます。

お二方のご報告ののち、ご来場の皆様も交えて専門職養成における哲学教育についてディスカッションしたいと思います。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/18/>

○第 210 回招聘セミナー

「大学設置基準改正をどのように捉え、活かすかー教職協働による SD の可能性ー」

講 師：宮林 常崇（東京都立大学 理系管理課長〔学務課長兼務〕／

公立大学協会 事務局参与）

日 時：2023 年 11 月 2 日（木）15:00～17:00

開催方法：Zoom ウェビナー

概 要：名古屋大学高等教育研究センター教務系 SD 研究会では、昨年 10 月の大学設置基準改正を大学の現場でどのように捉えているかを調査するため、全国 8 か所で 4 か月にわたり大規模なヒアリングを実施した。具体的には、①制度改正を理解するための研修会、②改正事項を自大学に落とし込むためのワークショップ、③ヒアリング（アンケート調査）を組み合わせたもので、これを単独大学の教職員合同や、複数大学の職員のみといったいくつかのパターンで実施した。その結果、本改正を理解するために前提となる知識・理解が不足している事項や教育改善に活かすための様々な障壁などが明らかになった。また、教職員の協働で SD を実施することによる効果も見えてきた。

このセミナーでは、本改正がそれぞれの現場でどのように捉えられているか、教育改善に活かすためにはどのような方法が考えられるかを報告するとともに、教職協働の SD の可能性について参加者と議論したい。

講演要旨：

令和 4（2022）年 10 月 1 日に施行された大学設置基準等改正により、単位の計算方法をはじめ多くの教務事項について大学の裁量が拡大しました。一方で、学内規程の整備や更なる情報公開も必要になりました。そして、これらの対応方法については、各大学がそれぞれの実情を踏まえて主体的に判断することが求められています。

教務事務にかかるさまざまな研修を提供してきた名古屋大学高等教育研究センター教務系 SD 研究会としては、この改正にいち早くキャッチアップする必要がありましたし、そのためには各大学の実情を踏まえることが重要でした。そこで、この改正を大学の現場でどの

ように捉えているか、教育改善に活かすためにはどのような方法が考えられるかを調査するため、コロナ禍の収束が見えつつあった昨冬以降に全国各地を巡り、大規模なヒアリングを実施しました。具体的には、①制度改正を理解するための研修会、②改正事項を自大学に落とし込むためのワークショップ、③ヒアリング(アンケート調査)を組み合わせたもので、これを単独大学の教職員合同や、複数大学の職員のみといったいくつかのパターンで実施しました。参加者には情報秘匿を、本研究会が利用する際には情報を一般化することを、約束事項としました。

このヒアリングを経て、法令や制度改革を理解し実務に活かすためには、単に知識を学ぶことにとどまらず、組織内の情報共有・共通認識や組織内での議論が必要であることが明らかになりました。また、その際の障壁としては、日常のコミュニケーション不足が多く指摘されました。言い換えると、現場の課題は、学外でのSDや既存のSDを充実させること以上に、学内の「場づくり」と、目の前のマネジメントであることとなります。また、本改正の対応には教職協働が必要な場面が多くあるなか、SDそのものも教職協働とすることが有効であることも見えてきました。たとえば、3つのポリシー(AP、CP、DP)・カリキュラム・授業の関係や、授業外学修時間の実質化、成績評価、TAを含めた教育の質向上に資する教員ニーズなどについて、ともに考えることです。

政策を自大学の文脈に落とし込むことについて他者に任せるのか、教職員が力を合わせ、自分たちで意味づけし社会へ説明するのか。はたまた、解釈のギリギリセーフを狙うのか、裁量を生かして新しい教育を狙うのか。本改正は、「ゲームチェンジャー」が誕生するまたとない機会として、活用できるように思われます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/20/>

○第211回招聘セミナー／第5回学生支援担当者講習会

「障害のある学生の大学移行を考える－高大接続と大1ギャップの支援－」

講師：工藤 晋平（名古屋大学学生支援本部アビリティ支援センター 准教授）

日時：2024年1月31日（水）13:00～15:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共催：名古屋大学学生支援本部

概要：大学は高校までとは教育・学修の体制・環境が大きく異なります。それは障害のある学生にとって入学直後から大きな障壁となって、「大1ギャップ」が生まれるかもしれません。学生支援、合理的配慮、発達障害のある学生の父母の会などの経験を通して、入学

直後の諸手続き、履修環境の変化への適応、支援の利用などにどのような困難が見出されるかをお話し、合わせてこの観点から、望まれる高大接続について考えたいと思います。

講演要旨：

発達障害の学生を中心に、大学に入学することで直面する困難、高校と大学のギャップ（大1ギャップ）に関して、最近考えていること、および今後の課題について講演を行った。初めに、そのような問題意識を持つに至った学生との経験について報告し、ついで、障害（disability）が固定されたものではなく、個人と環境の相互作用の中で生じる状態として考えられることを押さえた上で、高校と大学とではこの環境が異なるために、異なる障壁を前にした異なる障害像が生まれることを取り上げた。

高校生活では、「教室」を中心として情報が集まり、同級生からの助けが得られ、担任という窓口にもアクセスができる。学習は教科書に沿ってほぼ一本道で進み、問題集で理解を深められる。こうした環境が大学では失われることに注目し、足下が不安定なまま入学に際して多くの資料を読み、履修の仕組みを理解し、履修登録を行い、さらにネットワークや学生ポータルへの接続、そのためのパソコンやスマホの2段階認証アプリの設定、生協や保険の加入、英語の試験、クラスの集まりをこなすことを取り上げた。

その結果、情報の取りこぼし、理解不足による履修計画のつまずき、必要な手続きの失敗、混乱や挫折といったことが大学入学直後から始まってしまう。「教室」機能をどのように設定するか、高校から大学という構造の異なる環境への移行をどのように支えるか、といった点から対策を検討し、履修相談会による入り口の支援、ウェブサイト等での情報発信、初期のタスクフローの視覚化、入学前の大学生活体験といった試みが求められることを挙げた。また、高校までの支援計画等の共有の他に、高校までに自分で枠組みを作る練習やメール連絡の練習があると良いこと、大学ではゆっくりとしたスタートが求められることも議論した。
<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/31/>

○第212回招聘セミナー

「ジェンダード・イノベーションー性差分析による科学技術の発展と多様性の確保ー」

講師：佐々木 成江（お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所 特任教授）

日時：2024年2月8日（木）13:00～15:00（オンライン）、15:30～17:00（対面）

開催方法：オンライン（Zoom ウェビナー）と対面（機構教職員対象）

対面会場：名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

定員：オンライン 100名、対面 20名

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概 要：これまでの研究や開発は、男性を対象や基準とすることが多く、女性の方に不利益が生じがちでした。そのような中、科学技術分野における研究や開発のデザインに、性差分析を積極的に組み込むことでイノベーションにつなげる『ジェンダード・イノベーション』という新しいアプローチが広がっています。本セミナーでは、具体的な実例を挙げながらジェンダード・イノベーションズとはなにか、また国内外の取り組み状況について紹介し、ジェンダード・イノベーションが拓く未来について考えていきます。

講演要旨：

科学技術分野には様々なジェンダーギャップが存在します。女性研究者の少なさについては、日本を含めた主要国において女性研究者の数を増やすために組織改革も含めた様々な取り組みが行われています。一方、近年欧米を中心に研究や開発の内容自体に存在するジェンダーギャップを見直す動きとして、『ジェンダード・イノベーション』という新しいアプローチが広がっています。

ジェンダード・イノベーションとは、性差に基づくという意味の「ジェンダード」と知的創造と技術革新を意味する「イノベーション」を組み合わせた造語です。これまでの研究や開発の多くは、男性を対象や基準として進められることが多く、女性の方に不利益が生じがちでした。しかし、それをネガティブにとらえるのではなく、むしろポジティブに捉え、科学・技術分野における研究や開発のプロセスに、積極的に性差分析を組み込んでいくことで、イノベーションと発見を実現するという概念です。

性差分析では、生物学的な性（セックス）と性別役割分担といった社会・文化的な性（ジェンダー）の両視点からの分析が必要となります。また最近では、性差分析だけではなく、トランスジェンダーなどの性自認、年齢、障がい、人種、民族、地域性、経済的状况などとの交差性も考慮して分析することも重要視されています。

ジェンダード・イノベーションは、科学・医学・工学・AI・農業・交通・都市・環境など様々な分野でその力を発揮します。また、性差を考慮した科学技術の促進は、新たな医療・製品・サービス・市場の創造と包摂的で公正な社会の実現にもつながります。

欧米の研究資金配分機関や学術雑誌では、生物や医学分野において性差への考慮を要件にする動きが出てきています。また、日本でも第5次男女共同参画基本計画に「これまでの男性の視点で行われてきた研究・開発プロセスを見直し、男女の心身の違いやニーズを踏まえ、性差を考慮した研究・技術開発を求める。」という文言が入り、今後の進展が期待されます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/33/>

○第 112 回客員教授セミナー

「着想と実行の乖離－韓国教育政策から消えた気候危機の議論－」

講 師：Choi, Seung-hyun（韓国 忠北大学校教育学科 准教授）

日 時：2024 年 2 月 15 日（木）14:00～16:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概 要：韓国教育省が発表した「2022 年改訂カリキュラム」において、公共参加型カリキュラムとして議論されていた生態系移行教育が削除され、その代わりに環境の持続可能な発展教育が導入されました。この結果、全国の教員養成大学における気候危機に関連する政策が行き詰まりました。本セミナーは、2023 年 10 月に全国の国公立の教育大学学部長を対象とした文書である「教員養成大学改善計画（2023）」に焦点を当て、政府の気候危機に対する無関心を批判的に読み解くことを目的とします。この計画からは、高等教育政策における矛盾を浮き彫りにするだけでなく、AI (artificial intelligence) 教育や SW (software) 教育の強化を優先課題と位置づけながら、現代の課題であるエコロジカル・シチズンシップ（環境に対する市民の権利、義務、責任）の育成を顧みないことが分かります。

講演要旨：

韓国の教育部は 2024 年上半期のうちに教員養成大学改善案を発表する見込みである。教員養成大学の大学院拡充事業に代わって推進されるこのプロジェクトは、複数のコンピテンシーを備えた教員の養成に焦点を合わせている。人口減少による地方大学の危機を打開できるような教員を養成するために、全国の教員養成大学に自主的な改革を要請するものである。しかしながらこのプロジェクトは、経済発展を前面に押し出すあまり、前政権が重視していた生態学的な変革を促す教育を見落としているという批判に直面している。本セミナーでは、これら教育に取って代わり推進されている、環境の持続可能教育が見逃している側面を、生態系哲学における側面と教育政策における側面から検証する。

本セミナーでは、生態系哲学の側面においては次の点に着目する。

- (1) 人新世での惑星の限界が生態的限界を生み出していることを直視し、経済と社会の両方を緑化するような内包関係を志向しなければならない。
- (2) 人新世における議論が指摘する惑星の限界は、成長中心主義と同時に脱成長主義も要求する。
- (3) 生態系危機の原因が人間であることを直視し、人間以外の存在を含む環境政策が求められる。

(4) 創意的な実験を伴う未来志向的な教育活動を追求することが原則であり、T. モートンの生態系哲学とガンジー学校の生態系教育の実践例を紹介する。

また、教育政策の側面では、経済論理ではなく教育ニーズに基づいた教員需給および大学統合政策に切り替えなければならないであろう。以上の議論を通じて、教員養成大学改善案で生態学的な変革を促す教育がどのように補完されるべきかを検証する。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/35/>

○第 213 回招聘セミナー／大学 IR×DX 研究会第 2 回セミナー

「持続可能な事務業務のデジタル化－組織で定義する DX－」

講 師：一丸 直人（三重大学国際・情報学部 DX・情報チーム）

日 時：2024 年 2 月 16 日（金）14:00～16:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概 要：昨今、「DX 化」や「DX を進める」といった言葉が、バズワードのように飛び交っています。しかし、DX という言葉は「曖昧」で「人により概念が違う」ことが多いのではないのでしょうか。従来のデジタル化や IT 化とは、なにが違うのか？

本講演では、三重大学の事務で行ってきた「持続可能性を意識したデジタル業務改善」の取組や事例を紹介すると共に、その先にある「DX とはなにか」や「なにを変えていくことができるのか」についても考えていきたいと思えます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/39/>

○第 214 回招聘セミナー／大学 IR×DX 研究会第 3 回セミナー

「卒業時の学習成果をどのように評価するか－効果的な実践を目指して－」

講 師：竹中 喜一（近畿大学 IR・教育支援センター 准教授）

日 時：2024 年 2 月 22 日（木）15:00～17:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概 要：課程を通じた学生の学習成果の把握にあたり、各大学はさまざまな調査・測定を行っていますが、それらの効果的な実践に向けて課題をもつ大学も少なくありません。本セミナーでは、そうした課題解決のヒントの提示を目的として、ディプロマ・ポリシーの到達度、卒業論文や卒業研究の評価方法を中心に、現在の動向と具体例を説明します。講演者が

実践する「卒業論文ルーブリック」作成支援事例や、竹中喜一編（2023）『シリーズ大学教育の質保証 2 学習成果の評価』の内容等を取り扱います。

講演要旨：

卒業時の学習成果を評価する趣旨は、カリキュラムを実施した総合的な結果として、学生が何をどれだけできるようになったのかを把握し、改善と説明責任の遂行につなげるところにある。

学習成果を評価する方法は直接評価と間接評価に大別されるが、双方の方法は相補的な関係にあるため、基本的には双方の方法を組み合わせる。直接評価の方法には、卒業試験、卒業論文等がある。卒業論文等により総合的な能力を評価する際に、ルーブリックを用いる大学がある。ルーブリックは教員による評価だけでなく学生の自己評価ツールとしても活用できるが、運用にあたってはさまざまな課題に直面する。基本的な課題解決の方向性は、ルーブリックを活用する関係者間のキャリブレーションである。試行運用や解釈の共有を繰り返しながら、実情にある程度合ったルーブリックに練り上げていく。

また、近年ディプロマ・ポリシー（DP）の到達度を評価する方法論も検討されている。従来主流であったのは、卒業時のアンケートで DP の達成度を学生に自己評価してもらう方法である。より詳細に尋ねるのであれば、学生に対するインタビューも有効であろう。最近では授業科目の成績評価と DP の達成度を関連づけ、その結果を学修ポートフォリオに可視化する大学もある。この方法を実施するには、DP を細分化した上で、各授業科目の到達目標と DP を紐づけることが前提となる。

ところで、学習成果の評価を効果的に実践するためには、評価結果をもって教職員が改善を検討するだけでなく、学生に評価結果をフィードバックするアプローチも検討すべきであろう。学習の振り返りや目標設定といった活動につなげることは、学習成果の向上にもつながる。また、予めアセスメントプランで評価結果の活用方法を定めたり、他大学の分析の切り口を参照したりすることも、効果的な実践につながるかもしれない。

いずれにしても、学習成果の評価が改善に結びつくには、改善にかかる利害関係者に評価結果を共有し、その結果に基づく対話の場が必要となる。個々の授業科目の改善、カリキュラム全体の見直し、学習支援の充実など、改善のアプローチはさまざまに唯一解はないので、その都度最適解を関係者間の対話を通じて決めていくことになる。評価結果を共有し対話する場づくりをどのように行うかも、学習成果の評価が効果的な実践につながるポイントになるだろう。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/38/>

○第 113 回客員教授セミナー

「FD プログラムとしてのティーチング・ポートフォリオとその派生ツールの意義とこれから」

講 師：栗田 佳代子（東京大学大学総合教育研究センター 副センター長／教授）

日 時：2024 年 2 月 29 日（木）14:00～16:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概 要：ティーチング・ポートフォリオは、欧米では教育業績評価資料として定着しているが、日本では大学教員自身のリフレクションを導き、自らの気づきによる活動の改善を促す FD プログラムとして普及しつつある。本講演では、ティーチング・ポートフォリオだけでなくティーチング・ステートメントや TP チャートなど派生を含めた統合的な意義づけと整理を行い、FD プログラムとしての活用について展望する。

講演要旨：

本セミナーでは、教育者としての振り返りと成長に焦点を当て、ショーンの省察的実践家モデル（Reflection in Action と Reflection on Action）、コルブの経験学習モデル、そしてコルトハーヘンの ALACT モデルをその理論的裏付けとして紹介しました。これらのモデルは、教育者が自身の実践を振り返り、経験から学び、理論と実践を結びつけることを通じて、より効果的な教育を行っていくことを促しますが、これまで、その具体的な方法については不足しているという現状がありました。

ティーチング・ポートフォリオ（TP）は、その点、振り返りを無理なく進められる方法の一つということができます。TP とは、教育者が自らの教育活動について振り返り、記述し、根拠資料によって裏付けた文書で、その構成要素は、教育責任、教育理念、教育方針・方法、成果・評価です。TP の作成目的は、教育改善と教育業績の可視化にあり、欧米ではすでに広く普及しており、日本でも普及の途上にあるといえます。

また、TP チャートは、教育活動の俯瞰と振り返りを行い、授業改善につなげる目的で使用される A3 判のワークシートです。TP 作成の体験ツールとして開発され、短時間に作成することが可能です。ティーチング・ステートメント（TS）は、教え方の信念と実践について記述された、目的を持った、省察的な文書であり、ここでは TP の要約として位置付けます。これは教育者の個人的な物語を含み、教育と学習のプロセスに関する信念とそれをするように実践しているかの具体的な例が記載されます。この三者は、組織への導入の目的や規模、振り返りの深さなどで使い分けることが望ましいといえます。

今後、教員の業績評価の整備が進み、多角的な業績評価、特に教育業績の評価が重要視されるようになっていくでしょう。TP、TP チャート、TS は、組織の目的に応じた導入が求められており、形だけの導入は避けるべきです。目的を明確にし、教育の質を向上させることが重要です。また、学習ポートフォリオの概念も重要であり、教育者だけでなく、学習者自身も自己反省を通じて学習プロセスに積極的に関与することが推奨されます。これらの取り組みを通じて、教育活動の質が向上し、教育者と学習者の両方が成長することが期待されます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/40/>

○第 215 回招聘セミナー／第 6 回学生支援担当者講習会

「大学の危機における学生対応－加害学生への相談実践から－」

講 師：今江 秀和（広島市立大学国際学部 准教授）

日 時：2024 年 3 月 8 日（金）13:00～15:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共 催：名古屋大学学生支援本部

概 要：大学生が会う危機にはさまざまなものがあり、その中には事件や事故の加害者になることも含まれる。学生が加害者になるということは、大学にとっても、加害者となった学生にとっても重大な危機であり、その対応をどうするかは大きな問題となる。学生相談領域では、その対応の難しさもしばしば話題にのぼるものの、研究や報告は少ない。今回は、学生相談機関での相談実践を中心に大学の危機とその対応について考えてみたい。

講演要旨：

大学における加害学生への対応について、学生相談機関での相談実践を中心に講演を行った。加害学生への対応の話に先立ち、まず大学生が加害者になる事態にどのようなものがあるかについて述べ、ついで最近の大学生の犯罪について触れた。

「加害学生は学生支援の対象か？」という問いについて、大学における教育が学生の全人的な成長を目指すものであることを考えれば、大学に籍がある加害学生は支援の対象であるという演者の考えを述べた。

加害学生の支援の目的を、新たな被害者を出さないこと、加害学生が社会で安定して生活していけるようになることとし、そのために必要なこととして、①自分の犯したことを認識すること、②自分の特徴、傾向を理解すること、③同じようなことを起こさないよう防止できる力を身につけること、④被害者に対する共感性を養うことを挙げ、解説した。そして、

加害学生の支援を担う者は、教員、職員、カウンセラーなど加害学生に関わるすべての人とした。

学生相談領域における加害学生の先行研究が少ないことに触れたあと、事件の加害学生の事例を提示し、事件の加害学生の中には、自分の行為や問題に対する認識が乏しかったり、動機づけの乏しい学生がいること、その対応として大学が加害学生にカウンセリングを義務づける義務的カウンセリングが行われることがあることを説明した。また逆転移の問題についても議論した。ついで事故の加害学生の事例を提示し、事故加害者への対応の必要性と留意点、逆転移について取り上げた。

最後に、事件の加害学生、事故の加害学生のいずれの対応においても重要と思われることとして、①再び同じことを繰り返さないよう支援すること、②信頼関係の構築、③加害学生の話に耳を傾けること、④アセスメント、⑤発達の視点（生育歴、発達の特性）、⑥逆転移に注意を払うこと、⑦学内の連携、⑧相談窓口等の情報や知識を持つことを挙げ、まとめした。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/43/>

1.2 大学教育改革フォーラム in 東海 2024

大学教育について、近隣の大学関係者が一緒に議論し、連携、連帯を深め、もっと質の高い大学教育をこの地区に実現することを目指して、大学教育改革フォーラム in 東海を企画した。

日 時：2024年3月2日（土）10:00～18:00

開催方法：対面および一部ハイブリッド

対面会場：名古屋大学東山キャンパスアジア法交流館

参加費：無料

主 催：大学教育改革フォーラム in 東海 2024 実行委員会

名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

U R L：<https://sites.google.com/view/tokaiforum2024/>

プログラム：

- 10:00～11:30 基調講演「極私的の大学評価論：岐路にたつ『大学評価』」
戸田山 和久氏（大学改革支援・学位授与機構 教授／研究開発部長）
- 11:45～12:30 ポスターセッション
- 12:30～13:30 休憩
- 13:30～15:00 分科会第Ⅰ部
- 13:15～15:00 高等教育ライジングリサーチフォーラム
- 15:15～16:45 分科会第Ⅱ部
- 17:00～18:00 情報交換会

○分科会第Ⅰ部の内容

I-1：教学IR

「教学IR入門ーデータを使った教育状況把握・活用を体験してみようー」

講 師：和嶋 雄一郎（名古屋大学高等教育研究センター 特任准教授）

I-2：組織マネジメント

「私にもできるモチベーションが高まる職場づくり」

司会者：花原 大輔（岡崎女子大学・岡崎女子短期大学入試広報課 主任）

発表者：中島 英博（立命館大学教育開発推進機構 教授）

満田 清恵（中京大学教務部教務センター 係長）

花原 大輔（岡崎女子大学・岡崎女子短期大学入試広報課 主任）

I-3：大学の国際化

「大学の国際化の展望、教育と支援の課題－あなたの大学、国際化準備できていますか？－」

司会者：LINLEY Matthew（名古屋大学 副総長補佐〔国際担当〕／国際広報室 室長）

コーディネーター：佐藤 幸代（南山大学国際センター 特任講師）

発表者：山岸 敬和（南山大学 副学長〔グローバル化推進担当〕／国際教養学部 教授）

宮林 常崇（東京都立大学 理系管理課長／学務課長）

松本 寿弥（名古屋大学学生支援本部学生相談センター教育連携室 室長）

I-4：高等教育ライジングリサーチフォーラム（名古屋大学高等教育研究センター創設 25 周年記念）

1. 「イギリス大学職員のプロフェッショナル・アイデンティティ・マネジメント」

松村 彩子（名古屋大学／東京大学大学院）

2. 「大学入学後の専攻選択支援に関する研究－米国からの知見及び東京大学の実践事例から－」

【審査員賞】

吉岡 香奈（東京大学大学院）

3. 「高大接続研究の拡張可能性－接続から移行へ－」 【審査員賞】

田中 孝平（京都大学大学院）

4. 「外国人就労者が有する継続在留のためのキャリア意識－元留学生へのインタビュー調査による要因の解明－」

林 エミ（名古屋大学大学院）

5. 「FD の大学設置基準の規定における制度的な過程－臨教審から大学審の議論を手掛かりに－」

浜 えりか（名古屋大学大学院）

6. 「異分野の研究を知るイベント「アカデミックフラッシュ」とは」

熊坂 真由子（名古屋大学）

7. 「私立大学による地域貢献はどのような意義を持つのか－私立大学の地域貢献に関する先行研究レビュー－」

梅村 美椰子（名古屋大学大学院）

8. 「学生新聞とは何か－戦間期の高等教育を映し出すメディアとしての可能性－」

田口 愛梨（名古屋大学大学院）

9. 「芸術に関わる教育者のインタビュー調査から評価の観点に着目して」

土屋 花琳（名古屋大学大学院）

10. 「大学生のデジタル格差－授業のオンライン化に関する課題の発見に向けて－」

藤川 寛之（名古屋大学大学院）

11. 「イスラーム世界の国境を越えた高等教育－現代アラブにおける宗教留学のダイナミズム－」

【審査員賞／オーディエンス賞】

内田 直義（就実大学）

12. 「高等教育研究における制度ロジック分析の動向と課題」 【オーディエンス賞】

東岡 達也（名古屋大学）

13. 「林業大学校学生の学びの変化－コロナ前とコロナ禍の比較－」

小川 高広（京都大学大学院）

14. 「ラボ・ローテーションの教育可能－OIST の研究ユニット制度を手がかりに－」

竹永 啓悟（名古屋大学）

○分科会第Ⅱ部の内容

Ⅱ-5：学際教育

「学際系学部への導入科目における実践と課題」

司会者：竹永 啓悟（名古屋大学高等教育研究センター 特任助教）

安田 淳一郎（名古屋大学高等教育研究センター 准教授）

発表者：堀籠 崇（新潟大学人文社会科学系〔創生学部担当〕 准教授）

山田 亜紀（玉川大学リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科 講師）

Ⅱ-6：キャリア支援

「プロフェッショナル養成課程におけるキャリア支援の課題」

司会者：丸山 和昭（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授）

発表者：桑原 容子（名古屋工業大学キャリアサポートオフィス 特任助教）

鬼頭 裕介（愛知教育大学キャリア支援課 職員）

Ⅱ-7：SD（業務改善）

「業務自動化入門－みんなで学ぶRPA－」

オーガナイザー：稲垣 太一（学校法人金城学院中高事務部 課長補佐）

アドバイザー：株式会社シーオーエー

・ポスターセッション一覧

P1 「法学教育のためのアクティブラーニングの実践的研究」

安藤 由香里（富山大学）

P2 「高専公民分野における『パフォーマンス課題』の開発－大学との協働的な授業研究を通じて－」

山下 大喜（宇部工業高等専門学校）

P3 「大学生の留学、国際交流に対する調査」

ローゼンバウム 知佳（名古屋大学）、岩城 奈巳（名古屋大学）、巽 洋子（名古屋大学）

P4 「教学マネジメントを深化させるためのチェックリストの開発」

山咲 博昭（広島市立大学）、岩野 摩耶（山口大学）、白藤 康成（京都産業大学）、堀 佑二（獨協大学）、
井上 一成（滋賀医科大学）、荒木 俊博（淑徳大学）

P5 「内部質保証に資する学生参画活動の要件・課題・効果に関する研究」

荒木 俊博（淑徳大学）、山咲 博昭（広島市立大学）

P6 「高専教員の教育と学生の期待との乖離」

坪井 泰士（阿南工業高等専門学校）、小林 睦（豊田工業高等専門学校）、藤本 正己（山口大学）、
杉田 郁代（高知大学）

P7 「重度身体障害のある学生の支援に関する国際比較－介助者配置にかかる財源とサービス供給－」

福田 由紀子（日本福祉大学）

P8 「医療系学部における学修支援プログラムが Student Assistant 学生に与える影響」

小倉 亮介（北陸大学）、杉森 公一（北陸大学）

P9 「CAP の現状と大学設置基準改正の狙い－改めて単位制度を考える－」

中村 章二（鈴鹿大学）

P10 「10 社会福祉専門職における『自己覚知』－批判的思考との関連から－」

久保田 祐歌（関西福祉科学大学）、中井 俊樹（愛媛大学）

P11 「コロナ禍を乗り越え進化した成城大学ピアサポート活動の歩みを振り返る」

肥田 奈緒子（成城大学）、筒井 陽加里（成城大学 学生）、大村 真樹（成城大学 学生）、
鈴木 由乃（成城大学 学生）、中谷 彰宏（成城大学 学生）、山中 啓也（成城大学 学生）

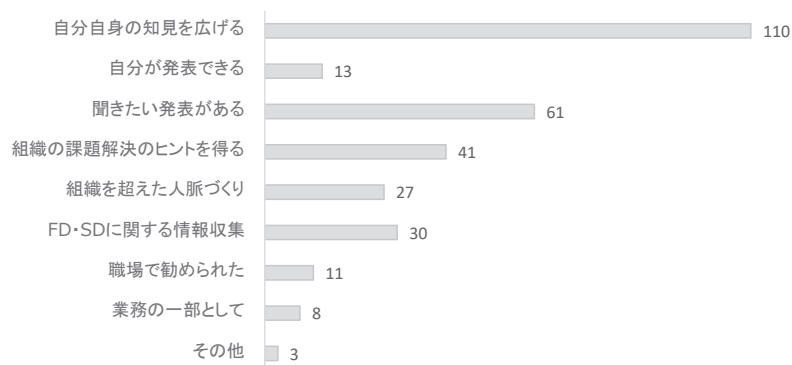
P12 「大学の係長職を支援する取り組み－マネジメント人材育成研究会の活動紹介－」

坂本 規孝（愛媛大学）、大津 正知（茨城大学）、小山 敬史（東海国立大学機構）、
齋藤 芳子（名古屋大学）、武谷 信吾（九州産業大学）、中島 英博（立命館大学）、
的場 由紀子（大阪国際学園）、宮林 常崇（東京都立大学）

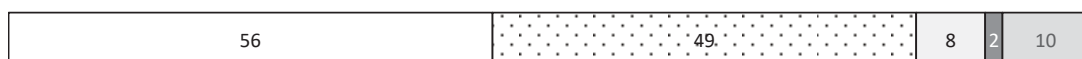
▷アンケート結果（参加者：203名 アンケート回答者：152名）

フォーラムの内容について（単位：人）

(1) フォーラムに参加した動機はなんですか。（複数回答）

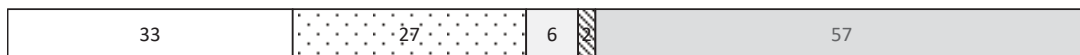


(2) 基調講演で取り上げられた内容は、あなた自身にとってどうでしたか。



役立つ どちらかといえば役立つ どちらともいえない どちらかといえば役立つ 役立つ 不参加

(3) 分科会Ⅰ（分科会1～4）で取り上げられた内容は、あなた自身にとってどうでしたか。



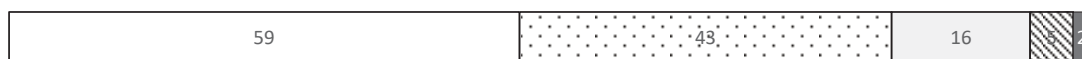
役立つ どちらかといえば役立つ どちらともいえない どちらかといえば役立つ 役立つ 不参加

(4) 分科会Ⅱ（分科会5～8）で取り上げられた内容は、あなた自身にとってどうでしたか。



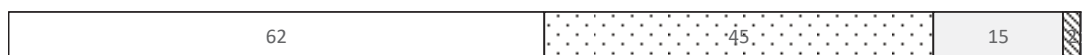
役立つ どちらかといえば役立つ どちらともいえない どちらかといえば役立つ 役立つ 不参加

(5) フォーラムの運営等（広報・当日の運営等）についてどう感じましたか。



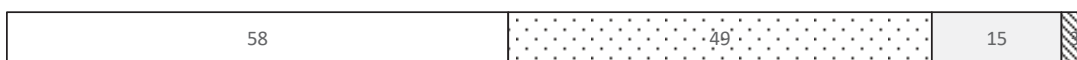
満足 どちらかといえば満足 どちらともいえない どちらかといえば満足 満足 不満

(6) フォーラムは全体的に満足できましたか。



満足 どちらかといえば満足 どちらともいえない どちらかといえば満足 満足 不満

(7) フォーラムを同僚や部下などに勧めたいですか。



勧めたい どちらかといえば勧めたい どちらともいえない どちらかといえば勧めたくない 勧めたくない

自由記述

- ・参加費無料でここまで勉強させていただき、ありがとうございます。毎年楽しみにしています。対面での開催を心待ちにしていました。
- ・ライジングのアイデアが良かったです。また参加者を巻き込む SD のアイデアも良かったです。これだけの内容を無料で提供していて、ボランティアの皆さんにとっても感謝します。
- ・基調講演だけとは言え、外部にオンラインでオープンにしてくださり、ありがとうございます。
- ・テーマが毎年興味深くよくこれだけの数を毎年見つけてこられるなと思っていますが、それだけ問題が多いということなのかなと。毎年開催ありがとうございます。来年も楽しみです。
- ・とても気持ちよく参加させていただきました。スタッフの方のご尽力に心から感謝を申し上げます。また、細かい対応ですが、駅出口からの案内看板が非常に助かりました。名古屋大学の敷地内だからできたのかもしれませんが、あると無いでは大違いですので、大変助かりました。
- ・オンライン参加でしたが、音声時々途切れていました。また、投影スライドも見にくかったです。会場のカメラ・スピーカーを通じての配信設定だったようですが、もう少し改善できると思われます。
- ・もう少し情報を早くお知らせしていただけるとありがたいです。

1.3 その他の主催・共催セミナー

◎公正研究セミナー2023

講師：綾部 広則（早稲田大学理工学術院／創造理工学部社会文化領域 教授）

日時：2023年4月6日（木）14:00～16:00

開催方法：Zoom ウェビナー

主催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]／
名古屋大学大学院理学研究科

概要：「公正研究」をより広い視野で理解するためのセミナーです。「研究不正をしない」ということを超えて、社会における研究活動の意義と意味、研究者の「責任」のあり方を広く見つめ直し、日々の実践を振り返るきっかけを提供します。

今回は、日本の科学技術政策との関連についても取り上げます。

研究者、大学院生はもちろんのこと、研究支援系の事務職員やリサーチ・アドミニストレーターのみなさまの受講もお待ちしております。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/5/>

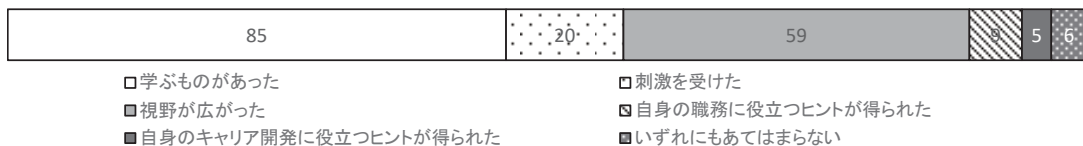
▷アンケート結果（参加者：222名 アンケート回答者：127名）

セミナーの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・公正研究＝倫理的に問題ない、というところに留まらない背景が科学研究の政策史を通して垣間見ることができました。
- ・今まで触れてこず、自分では触れないであろう科学基本技術計画を学べたことはよかったです。研究と社会の繋がりについて考える機会になりました。

- ・研究不正の話では、理想的な行動（RCR）の部分の、「FFP+QRP さえ回避すれば RCR といえるのか」という問いは非常に考えさせられました。FFP と QRP を行わないのは大前提として、自分が行う研究に関わる責任をしっかりと認識して研究活動を行なっていくことが重要であると改めて感じました。
- ・理想の研究とは何か、ただ不正をしないということなのか、成果を出すということなのか、改めて考えるよききっかけになりました。

◎第3回公開セミナー／大学 IR×DX 研究会第1回セミナー

「大学教育と AI との関係性－ChatGPT の光と影」

講師：和嶋 雄一郎（名古屋大学教育基盤連携本部／高等教育研究センター 特任准教授）

日時：2023 年 4 月 20 日（木）15:00～17:00

開催方法：Zoom ウェビナー

対象者：大学教育と AI の関連性に興味関心のある方

共催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概要：2022 年 11 月に OpenAI が発表した ChatGPT が大きな話題になっています。人間が書いたものと区別がつかないような内容の文章を生成することができるため、海外の大学では学生に対して ChatGPT の使用を中止する動きもみられます。大学 IR（Institutional Research）でも、AI を取り入れたシステムの研究が見られるようになってきました。

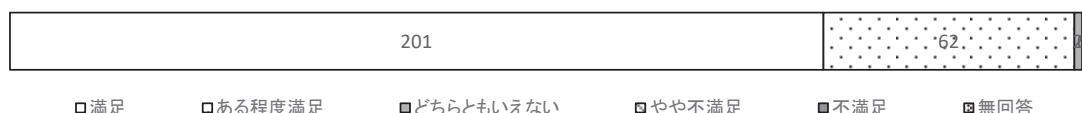
そこで、大学教育に教学 IR の立場で関わってきた経験を基に、大学教育と AI との関係性を考えてみました。セミナーでは、「なぜ ChatGPT は大学教員に警戒されているのか?」、「どのようにすれば AI を大学教育にうまく取り入れることができるのか?」といったことを取り上げ、皆様のご意見も伺えればと思っております。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/1/>

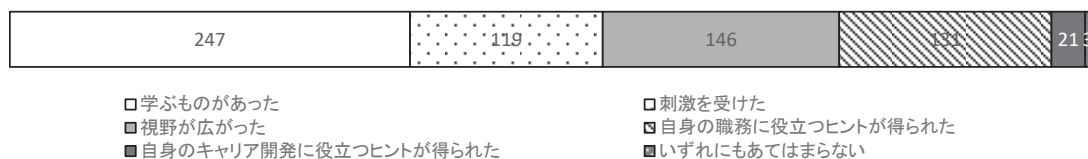
▷アンケート結果（参加者：517 名 アンケート回答者：267 名）

セミナーの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・ ChatGPT の特性について整理することができました。引き続き、学生にどう発信していくか、教職員がどう学んでいくか、考えていきたいです。
- ・ ChatGPT についての情報が整理され、教員から見た場合、学生から見た場合の双方からの視点がわかりやすかったです。最後にも触れられていましたが、使わないという選択肢は無いように思うので、どう使って（付き合っ）ていくか、という点についてしっかり検討する必要があることに気づかされました。
- ・ ChatGPT さんの前向きな回答もそうですが、先生の落ち着いたお人柄がうかがえてよかったです。セミナーとしては時代に適合した素晴らしいセミナーでした。
- ・ 色々な不安、恐怖、疑問がある中で、学生や教職員に寄り添っていくというような考え方が参考になりました。
- ・ 大変興味深いセミナーでした。結局、「いかに活用するか」は人にかかっており、自ら考えられる力を育てていくことが教育上は外せないのかなと思いました。
- ・ テクノロジーの発達は止められないし、世の中で使われているものを避けるのはかえって学ぶ意欲を低下させる（学生からは古い感覚に囚われていると見捨てられる）と思います。むしろ、どう使えば世の中がよくなるかを、学生と一緒に考えることが大切ではないかと思います。ChatGPT をどのように使っていくのかということのみならず、教育に対する姿勢みたいなものについて、共感しました。
- ・ ChatGPT で実演しながら利点や注意点等を整理してご説明いただいたので、実感を伴いながら理解することができました。
- ・ ChatGPT がどういうものか知ることができたので、学生には「使ってはダメ」でなく、「より高度なりテラシーを身に付ける」よう導いていきたいです。
- ・ ChatGPT を使いこなすための教育、そして判断するための専門的知識の必要性、という点が最後に印象に残りました。便利なツールだからこそ、基礎学力や基礎知識がないと使いこなせない（しかも使いこなせていないことに気づかない・・・）人も今後多く出てきそうです。
- ・ 現状では賛否両論ある次代のツールとうまく付き合っていく必要があると思いました。「人間側もしっかり学習を」という点には大いに共感しましたし、新しい科学技術が身近にあることを喜びつつ、「適度な」緊張感と警戒心を持って向き合っていくことが大切と思いました。

◎大学授業の設計と実践

大学の授業を担当するために必要な授業デザインと教育技法についての知識・スキルを身につけていくための集中コースです。学生の学びを促すための授業デザイン、授業シラバスの作成、多様な活動を伴う教授法、授業見学、模擬授業等の実践的な学習を通じて、授業実践への十分な準備を行います。

日 時：2023年5月24日（水）、5月31日（水）、6月7日（水）、6月14日（水）、
6月21日（水）、7月12日（水）、7月19日（水）

対 象 者：名古屋大学、岐阜大学の大学院学生・ポスドク・非常勤講師等・教員歴が浅い
教員

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

担 当：安部有紀子

プログラム：

5月24日（水）：授業デザインとは何か？

5月31日（水）：シラバス作成の理論（授業目標・授業計画・評価）と実践

6月7日（水）：学習の科学と多様な教授法

6月14日（水）：アクティブラーニングの技法・授業デザインシートの作成

6月21日（水）：パフォーマンス評価実践（ルーブリック）

7月12日（水）：模擬授業

7月19日（水）：合理的配慮について・全体ふりかえり

履修者：14名

聴講者：3名

◎教員免許事務担当者講習会

「教職課程事務の学び方について」

講 師：有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）

小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）

多畑 寿城（神戸女子大学 事務局長〔教職課程改革担当〕）

日 時：2023年5月27日（土）10:00～12:00

開催方法：Zoom ウェビナー

主 催：大学教務実践研究会

共 催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：1名につき2,000円 ※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

(銀行振込希望で請求書等書類が必要な場合は1名につき2,500円)

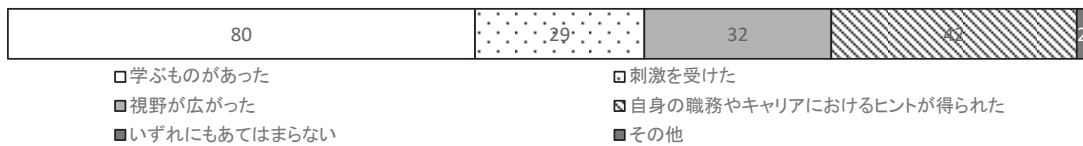
概要：例年初夏に開催している教務系初任者向け講習会のプレ企画です。新しい年度を迎え、多くの大学で人事異動や業務分担の変更に伴って、教職課程の担当となられた方も多くおられることと思います。今後、教職課程の事務を担当するにあたって、教職課程事務に関する知識をどのように獲得していくのかについて、参考となる書籍やウェブサイト、今年度開催が予定されている各種講習会等を紹介します。またこの業務では他大学に相談できるネットワークが形成されており、ネットワーク活用の仕方や活用上の注意点について、3者の対談形式にて、slidoを用いながら参加者の皆さんからの質問を交えつつ進めていきたいと思ひます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/4/>

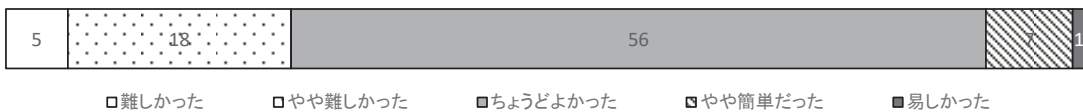
▷アンケート結果 (参加者：288名 アンケート回答者：87名)

講習会の内容について (単位：人)

(1) 本講習会について、あてはまるものを選んでください (複数回答可)。



(2) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・教職課程に携わるベテランの方々の対談は、教職課程のリアルを知ることができてよかったです。Slidoを用いた質問形式も、新参者には質問しやすい方法だと思ひました。次に参加するときは、質問事項なども考え、より一層学びを深めたいと思ひました。
- ・これまで多くの大学のご担当者の方が個別にケースを熟考され、それを共有し、教育免許事務として構築していかれたことが伺えました。また、その知見を我々のような新たな担当者へも共有くださることに感謝申し上げます。学内でも、担当者が変わっても業務の質が落ちないような体制を構築しなければならぬと感じております。

- ・初めての教職担当ということで、「何が分からないか分からない」の状態でしたが、事務の特色や情報収集の情報を知ることができ、今後の業務に活かせると感じました。また、現在教職課程の業務を一人で対応しており、孤独を感じていましたが、いろいろなサイトを利用したり、他大学の方との関りをもったり、周りの方に上手に頼ってよいということもわかってよかったです。内部をよくするためには、外の世界を知ること大切だと感じました。
- ・教職の仕事は、今年度4月より携わっていますが、本当に孤独感を感じていたのですが勉強会などに参加していけば頑張れる気がしてきました。
- ・教職に関して0年目の初心者だったため、年間スケジュールに沿った業務の具体例や注意点などがあるとありがたかったです。

◎マネジメント人材育成研究会セミナー

「第2回 新任係長・主任のためのマネジメントセミナー」

講師：小山 敬史（東海国立大学機構名大病院人事労務課）

大津 正知（茨城大学情報戦略機構）

坂本 規孝（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室）

日時：2023年7月7日（金）15:30～17:30

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

定員：20名

対象者：係長相当職の事務職員

概要：係長相当職は、大学事務職員のキャリアのなかで、初めてマネジメントが求められる職位です。プレイヤーとして自分の業務を進めると同時に、マネジャーとして部下をもって係を組織的に運営することが期待されています。初めての体験だからこそ悩みは尽きませんが、悩みや課題を解決する唯一無二の正解や絶対的な解決法はなく、戸惑いながら現場で奮闘している方々は多くいます。

今回の研修では、部下との関係に焦点を当てたケーススタディを用いて、職場でのマネジメント力の向上を目指します。この春に昇格して職場での采配に悩みを抱えている係長をはじめ、みなさまのご参加をお待ちしています。

ケーススタディ：

- ①部下のほうが現場知を豊かに持っている場合のマネジメント
- ②部下が新卒で着任した場合のマネジメント

獲得目標：

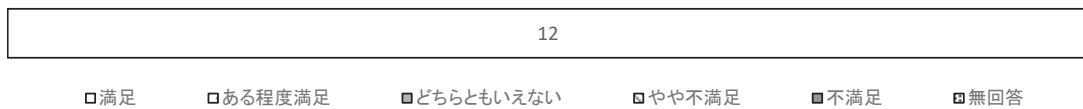
- ①係長相当職のマネジメント指針を理解する。
- ②職場で実践的に対応するための糸口を知る。
- ③同じ立場で奮闘する仲間から知見を得る。
- ④職場でのマネジメントに前向きに取り組む姿勢を身につける。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/11/>

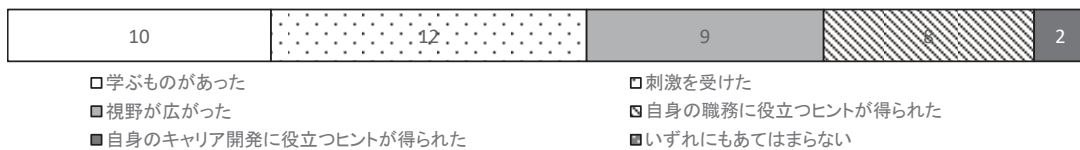
▷アンケート結果（参加者：13名 アンケート回答者：12名）

セミナーの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・対話の中で解決策が浮かぶことが多く、改めて対話の重要性を感じました。
- ・自分では思い至らない意見を聞けて、大変参考になりました。
- ・いろいろな考え方や論点のまとめ方を聞くことができ、有意義な時間となりました。
- ・基本に立ち返り、日頃からコミュニケーションを密にして、信頼関係を築いておくことが何より大切なことだと思いました。
- ・無理に全部を知ろうとするのではなく、知っている人に頼ることもマネジメントとして重要だと思ったので、適切に業務をふろうと思いました。
- ・答えがないからこそ、自分で考えたり他の人の方法を参考にして、適した解答を試行錯誤したいです。
- ・ケーススタディがあつた事で、実際に自分に対応する場合に置き換えて、非常に主観的に考えることができました。また、他の方の考えやテクニカルな対応方法を伺えたことで、非常に勉強になりました。実際に活かすことが一番大切で、事例によって対応も違うので一番難しいことだと思いますが、無駄にしないようにしたいと思います。
- ・物事を捉える視点はさまざまあり、多様性、多様な価値観があるということを改めて肝に銘じておこうと思います。

◎大学教務実践研究会セミナー

「教務系職員初任者向け講習会【ラウンドテーブル】」

講師：小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）
多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）
有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）
天津 正知（茨城大学情報戦略機構 助教）
宮林 常崇（東京都立大学 理系管理課長〔学務課長兼務〕／
公立大学協会 事務局参与）

日時：2023年7月8日（土）

教職事務編：10:00～12:00

教務事務編：13:30～15:30

開催場所：教職事務編：名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール

教務事務編：名古屋大学文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

定員：教職事務編40名、教務事務編20名

主催：大学教務実践研究会

共催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター〔質保証を担う中核教職員能力開発拠点〕

参加費：2,000円（「教務事務編」「教職事務編」いずれかをお選びいただきます）

※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概要：教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があります、円滑に対応することができません。

このラウンドテーブルは、同日開催のオンライン講習会と連動させた対面企画です。講習会では、教務・教職事務初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識を身につけるとともに、今後の制度改正に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指します。一方、ラウンドテーブルでは、同一テーマについての講師と受講者との生の対話を通じて、情報収集、情報共有をしていただく機会を提供いたします。

プログラム：

教職事務編 担当：小野・多畑・有馬

テーマ：教員免許事務の学び方について～情報の追いかた～

対象者：教職事務経験 0～5 年程度まで

教務事務編 担当：大津・宮林

テーマ：教務事務担当者のための大学教育の見方

対象者：教務事務経験 0～3 年程度まで

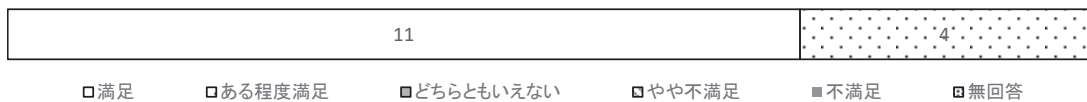
<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/8/>

▷アンケート結果

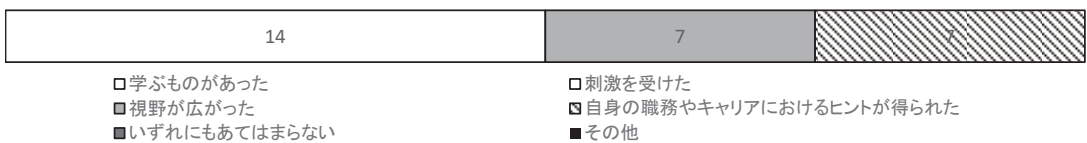
【教職事務編】（参加者：32 名 アンケート回答者：15 名）

講習会の内容について（単位：人）

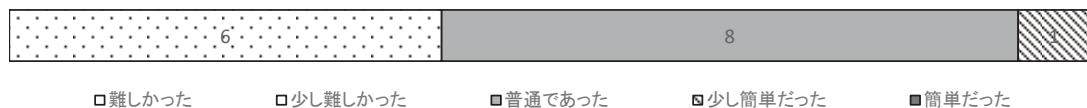
(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

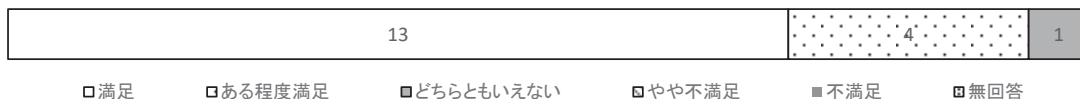
- ・知識の習得はもちろんですが、人とのつながりの重要性を改めて感じました。
- ・対面での参加が初めての機会だったので他の大学の職員さんと挨拶ができてよかったです。またオンラインでは言えないようなこぼれ話も対面参加のメリットだと感じました。
- ・今まで実務の大元である法令について深く学んできませんでした。理解が甘い部分が多くお恥ずかしい限りです。講師の方々が時に面白おかしくお話して下さったおかげで、難しい法令も少しとつきやすくなった印象です。貴重な機会をいただきありがとうございました。
- ・グループごとに分かれて問題を共有したり質問したりする時間を設け、他のグループとも共有する時間が欲しいと思いました。

・講義形式のみではなく対話もあるので、情報がより耳に入りやすく残りやすいです。

【教務事務編】（参加者：21名 アンケート回答者：18名）

講習会の内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・教務事務について、基礎的な部分を網羅的にご説明いただき、1年目の初任者でも分かりやすかったです。
- ・教務の基礎的な部分を知ることができた点と、他大学の方と話し合う機会があり、色々なお話を聞くことができた点です。対面ならではのよさだと思いました。
- ・課題に直面した際に、大学教育の理念、制度、運用と3つの段階に分けて物事を捉えると、自身の考えや適切な解決策について思考がまとめやすいことに気づきました。
- ・GPAや単位など普段の業務でも扱っているものでも、大元（根本）を突き詰めていくと色々深いことがあることが分かりました。そういうところまで理解して業務が出来るようになれば、もっといい仕事が出来ようになるだろうなと思いました。
- ・テーマをひとグループで一つに絞って、もう少し長くグループワークができればよかったですと思いました。

◎大学教務実践研究会セミナー

「教務系職員初任者向け講習会【オンライン】」

講師：宮林 常崇（東京都立大学 理系管理課長〔学務課長兼務〕／
公立大学協会 事務局参与）

小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）

多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）

有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）

日 時：2023年7月8日（土）

教務事務編：10:00～12:00

教職事務編：13:30～15:30

開催方法：Zoom ウェビナー

主 催：大学教務実践研究会

共 催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：1名につき2,000円/日（「教務事務編」「教職事務編」いずれかの参加であつても2,000円）※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概要：教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。

この講習会では、教務・教職事務初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識を身につけるとともに、今後の制度改正に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指します。

プログラム：

教務事務編 担当：宮林

テーマ：関係法規の理解、学籍・単位認定事務の注意点、クレーム対応 等

対象者：教務事務経験0～3年まで（内容は0～1年目に合わせます）

教職事務編 担当：小野・多畑・有馬

テーマ：教職課程事務に関する基本用語の理解、学び方について

対象者：教職事務経験0～5年程度まで

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/6/>

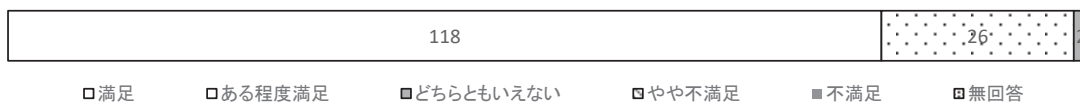
参加者：484名

▷アンケート結果

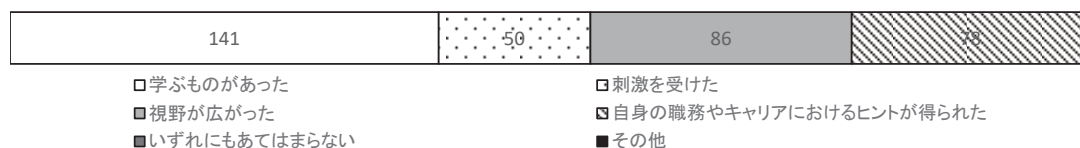
【教務事務編】（回答者：146名）

講習会の内容について（単位：人）

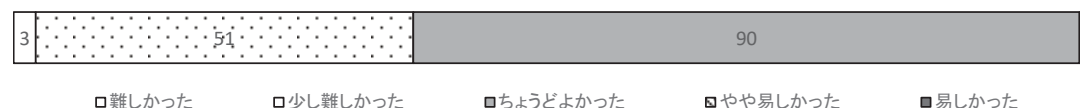
(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



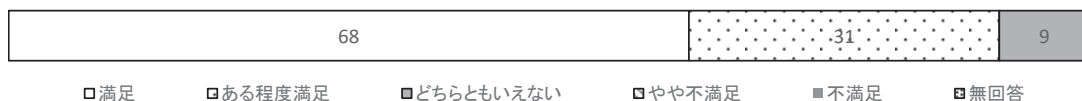
自由記述

- ・内容もさることながら、講師の声（発音、活舌）がよくて聞き取りやすかったです。2時間があっという間に感じました。
- ・大学設置基準などは、調べれば読むことができますが、それをどのように読み解くかということや、法令で決まっていないこと、大学が決めていいことなど、調べてもわからないようなことを初任者向けにお話いただいた点が非常に勉強になりました。また、単位の考え方など、初任者が理解しておかなければいけないことをわかりやすく説明していただけて勉強になりました。
- ・本セミナーは「教務事務初任者」対象とされていて、年数だけ経っている職員は参加しにくいようにも思いましたが、大学職員の基本姿勢として誰もが理解・修得しておくべき内容でしたので、私のように年数経過した職員でも学び直しのためにもおすすめの研修だと思えます。教務事務初任者に限らず、大学職員必須として参加が広がればよいと思いました。
- ・教務事項に携わる職員として、教員対応やクレーム対応時のヒントをいただける場所になっています。オンライン併用にしてくださっている点は大変有難いです。
- ・クイズが含まれていたのが受け身にならず受講でき、理解も進みました。

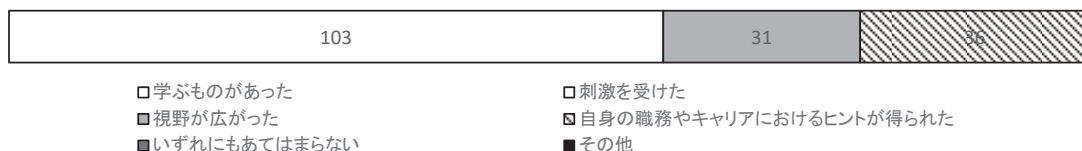
【教職事務編】（回答者：108名）

講習会の内容について（単位：人）

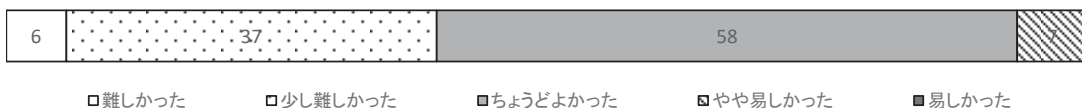
(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。(複数回答可)



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・お三方の実際に経験したことを交えながら説明いただいたことで、非常にわかりやすく、イメージがしやすかったです。
- ・用語について、ゆっくりと順序立ててご説明くださり大変わかりやすかったです。
- ・初心者向け内容であったため、自身の教職課程事務に関する理解を確認できる機会となりました。
- ・過去の失敗事例も交えながら聞くことができたので、気をつけなければならないことも理解できました。
- ・コアカリキュラムの理解がなかなか難しいです。こちらに重点を置いた講習会があればありがたいです。

◎大学教員論

大学教員になるために必要な知識と技能の獲得をめざして、多面的に大学教員の職務を検討していく集中プログラムです。受講生の今後のキャリア設計・開発に資するよう、実践的に進めています。

日 時：TACT 等によるオンデマンド受講期間（7 時限分）

2023 年 7 月 14 日（金）13:00～7 月 31 日（月）12:00

対面授業（対面・オンラインライブを併用しますが、対面を推奨します。）

2023 年 7 月 28 日（金）、31 日（月）、8 月 1 日（火）

対 象 者：名古屋大学、岐阜大学の大学院学生・ポストク・非常勤講師等

担 当：加藤真紀・丸山和昭（教育発達科学研究科）・安部有紀子・齋藤芳子

テキスト：夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子（2010）『大学教員準備講座』玉川大学出版部

プログラム：

7月28日（金）9:30～17:00

1限：オリエンテーション／大学教員という職業とそのライフコース

2限：授業の実施と大学教育の質保証

3限：多様な高等教育機関と若手教員

4限：研究と社会サービスの実施

7月31日（月）9:30～12:45

1限：大学教育におけるチームワークと学生参加

2限：大学の国際化とICT活用

8月1日（火）9:00～12:15

1限：模擬授業

2限：模擬授業

履修者：25名

◎教育基盤連携本部高等教育研究システム開発部門シンポジウム

高等教育研究センター 創設25周年記念国際シンポジウム

「高等教育研究と実践をつなぐー私たちが次の4半世紀にできることー」

“Connecting Higher Education Research and Practice: What we can do in the next quarter century”

講師：Iveta Silova（米国 アリゾナ州立大学 教授）

Bruce Macfarlane（中国 香港教育大学 教授）

黒田 一雄（早稲田大学 教授）

夏目 達也（名古屋大学 名誉教授／桜美林大学 教授）

日時：2023年9月1日（金）13:30～17:30

開催場所：名古屋大学東山キャンパス野依記念学術交流館2階カンファレンスホール

定員：180名

対象者：高等教育関係者

主催：名古屋大学教育基盤連携本部高等教育システム開発部門、

名古屋大学高等教育研究センター [質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

協 力：名古屋大学研究大学強化促進事業、名古屋大学同窓会

概 要：名古屋大学に高等教育研究センターが設立されて 2023 年で 25 年、教育基盤連携本部が設立されて 7 年になる。この間、世界の高等教育を取り巻く状況は大きく変化した。高等教育の大衆化、商業化、国際化、そして経済の新自由主義的な影響などに加え、昨今のパンデミックやロシアのウクライナ侵攻などによって顕著な社会・政治・経済的な分断が露呈している。日本でも、少子化や低経済成長などにより大学を取り巻く課題が山積している。このような社会的変化を見据えて大学が育成すべき人材像を明確にし、その手法を確立することは喫緊の課題となっている。我々のセンターおよび本部は、この間、国内外の研究者招聘等を通じて高等教育の探究や先駆的な教育実践を進め、国内外に知己を増やしてきた。過去にセンターに在籍した教員も含めた、この価値ある縦横のつながりを軸に、激変する社会の中での今後の高等教育およびその研究の在り方を探究する機宜とすることが本シンポジウムの目的である。

プログラム：

13:30 趣旨説明

加藤 真紀（名古屋大学高等教育システム開発部門 教授）

13:35 開会挨拶

藤巻 朗（名古屋大学 副総長）

13:45 講演 1

「人新世における高等教育の未来：科学、芸術、想像の力を結集して」

“Higher Education Futures in the Anthropocene: Mobilizing the Power of Science, Art, and Imagination”

Iveta Silova（アリゾナ州立大学 教授／MLF ティーチャーズカレッジ副学部長）

14:25 講演 2

「高等教育における『伝統』の過去・現在・未来：神話を現実から切り離す」

“The past, present and future of ‘tradition’ in higher education: disentangling myth from reality”

Bruce Macfarlane（香港教育大学 教授／教育・人間発達学部長）

15:15 講演 3

「高等教育国際化と多層的グローバルガバナンスの展開－歴史と展望－」

“History and Prospects of Internationalization of Higher Education and its Multi-layered Global Governance”

黒田 一雄（早稲田大学 教授）

15:55 講演 4

「日本の大学における高等教育研究センターの可能性」

“Future Possibilities of Center for the Studies of Higher Education in Japanese Universities”

夏目 達也（名古屋大学 名誉教授／桜美林大学 教授）

16:45 パネルディスカッション

モデレーター：加藤 真紀

17:25 閉会挨拶

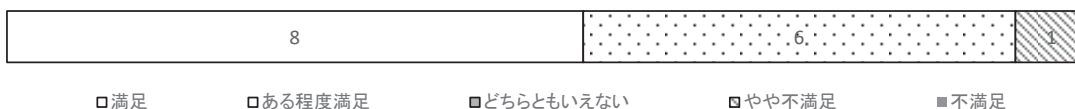
北 栄輔（名古屋大学高等教育システム開発部門 部門長）

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/center/activitylog/25thAnniversary/>

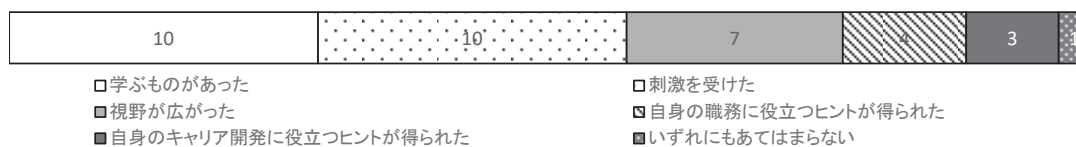
▷アンケート結果（参加者：85名 アンケート回答者：15名）

シンポジウムの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本シンポジウムについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・どの先生方の話の内容もまったく違った内容でしたが、全て前を向いて進むために何が必要かを深く考えさせる内容でした。
- ・同じ教育系センターで働く身として、より小さな組織で活動をどう展開していくべきか、自身の大学教員としての残り年数をどう過ごすべきかを省みる機会になりました。

◎名城大学新任教員 FD・SD 研修会

「学生の主体的な学びを促す授業設計～学習到達目標から授業を見直そう!～」

講師：安部 有紀子（名古屋大学高等教育研究センター／

東海国立大学機構アカデミック・セントラル QTA・GSI トレーニングセンター
准教授）

竹永 啓悟（名古屋大学高等教育研究センター／

東海国立大学機構アカデミック・セントラル QTA・GSI トレーニングセンター
特任助教）

日時：2023 年 9 月 12 日（火）13:00～14:20

開催方法：Zoom

主催：名城大学

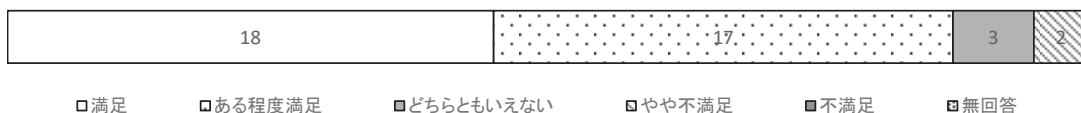
共催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]／

東海国立大学機構アカデミック・セントラル QTA・GSI トレーニングセンター

▷アンケート結果（参加者：66 名 アンケート回答者：40 名）

研修会の内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



自由記述

- ・到達目標の重要性がよく理解できました。次回のシラバス作成の時に生かしたいと思います。
- ・ブレイクアウトルームにて他学部の先生方とお話ができる機会を得てよかったです。分野は違いますが、共通した部分も多々あったことが収穫でした。
- ・他学部の先生方がシラバス作成上、どのようなことで悩んでいるか知ることができ、有意義でした。
- ・学習目標について具体例や理論をご教授頂けたので、短時間でもよく学べたと感じました。
- ・バックワードデザインについての知識を今後の講義に活かしていきたいです。
- ・目標に数値を入れることを見落としてしまっていたので、再発見できたのが一番大きな収穫でした。
- ・バックワードデザインなる概念やその意義については理解しましたが、それをどこまで実践できる・実践すべきかとなると、授業の種類や配当学年によって大きな幅があるのではないかと思います。

https://ac.thers.ac.jp/qgc/news/2023-09-22_00-45-11/

◎教員免許事務担当者講習会

「カリキュラム変更上の基礎知識」

講師：小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）
多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）
有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）

日時：2023年9月23日（土）
第1部：オンライン 13:30～15:45
第2部：対面 16:00～17:30

対面会場：龍谷大学大宮キャンパス東翼3階301講義室

定員：対面 50名、オンライン 定員なし

主催：大学教務実践研究会
東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：1名につき2,000円 ※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概要：教員から「免許状取得に必要な単位が多すぎるので10単位削減したい」「複数の免許を取らせたいので他学部の免許を取れるようにしたい」と相談を受けた場合、どのように対応しますか？このような相談は一例ですが、変更をめぐって相談を受けた場合、何が回答の拠り所になるのか戸惑うことが多いと思います。

カリキュラムの変更にあたっては、①単位修得上の不足が生じないか、②開設単位数上の不足が生じないか、③学科等の目的・性格と免許状との相当関係が失われないかの3点からの検討が必要となります。①②は法令等に規定されているので明らかですが、③については明確な基準があるわけではありません。また、他学部受講等の多様な履修方法については、これまでの実地視察での指摘内容、行政解釈をもとに、各大学で判断しなければならない点があります。

今回の第1部（オンライン）では、こうした内容に関する基本知識の講義と、ご参加の皆さんからのslidoを通じた質問を交えつつ進めていく講師陣の対談を行います。第2部（対面）では、判断の難しい個別具体事例をもとにご参加の皆さんと検討する、ラウンドテーブルを開催します。なお、本年度改正が予定されている教職課程認定基準や教育職員免許法施行規則の改正に係る情報については、開催日時点での動向について扱う予定です。

プログラム：

第1部

13:30 講習①

単位修得のルールである教育職員免許法・同法施行規則と科目開設のルールである教職課程認定基準・課程認定審査の確認事項の関係について説明します。

14:45 講習②

実地視察報告書の指摘事項と表面の講習会概要の冒頭に記載しました具体的相談事例への対応について説明します。

また、「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等に関する改革工程表に基づく教職課程認定基準や教育職員免許法施行規則の改正に係る最新の動向についても公開されている会議資料をもとに紹介します。

第2部

16:00 ラウンドテーブル

判断の難しい個別具体事例について、登壇者の見解をもとにざっくばらんに参加者の方とともに共有・意見交換したいと思います。

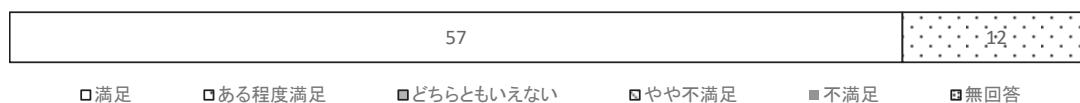
また、参加者の方が抱えている業務上の課題点等について、参加者相互で意見交換し、解決のヒントになる場になればと考えています。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/12/>

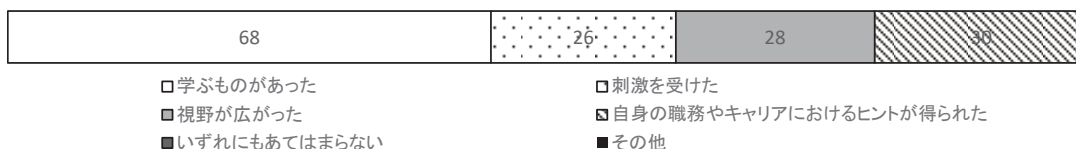
▷アンケート結果（参加者：326名 アンケート回答者：69名）

講習会の内容について（単位：人）

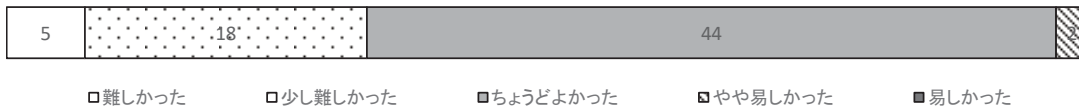
(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・今年度より教職担当になり勉強会に参加しておりますが、参加者のやる気や熱意がすごいな、と毎回感じます。
- ・小野様、多畑様、有馬様が実際に教職事務を行った上でのご意見が聞けてよかったです。
- ・課程認定基上的における教科に関する専門的事項の科目及び単位数、教職専任教員配置についてなど、とてもわかりやすく勉強させていただきました。また、科目等履修生、他大学での履修生など修得方法が多様化しているのでそのことも学びました。
- ・最新の情報をわかりやすく説明していただけてとても参考になりました。
- ・小野さんの講義が大変分かりやすいのはもちろんのことですが、第二部で各グループでの発表を終えたあとも、再びグループ内でざっくばらんに情報共有出来たことは、大変勉強になりました。また同じグループの方と更に交流することが出来てよかったです。

◎大学授業の開発と改善

この授業では、大学教員としてのキャリアを希望する大学院生が、将来的に大学で担当する授業を自ら継続的に改善するための知識やスキルを身につけます。授業改善に資するテーマを選び、計画を立て、研究的なアプローチにより改善を試みます。教員や受講生とのディスカッションやフィードバックを通じて学んでいきます。

日 時：2023年10月11日（水）、12月15日（金）、2024年1月25日（木）

対 象 者：名古屋大学、岐阜大学の大学院学生・ポスドク・非常勤講師等・教員

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

担 当：安部有紀子・加藤真紀・齋藤芳子・安田淳一郎

プログラム：

10月11日（水）：オリエンテーション

12月15日（金）：中間報告・フィードバック

1月25日（木）：最終報告会・全体のふりかえり

履修者：9名

聴講者：2名

◎第8回大学教育イノベーションフォーラム

「ポストコロナ時代における研修実施拠点：専門性と地域性をつなぐ」

講師：早川 佳穂（岐阜大学医学教育開発研究センター 特任助教）
生田 容景（山口大学知的財産センター 副センター長／准教授）
我妻 鉄也（千葉大学アカデミック・リンク・センター 特任助教）
小湊 卓夫（九州大学次世代型大学教育開発センター 准教授）

日時：2023年10月20日（金）13:00～15:55

開催方法：Zoom ウェビナー

主催：大学教育イノベーション日本（HEIJ）

共催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

概要：コロナウイルスの感染状況が落ち着きつつあり、対面研修の賑やかな光景が少しずつ戻ってきました。他方、コロナ禍を経てオンライン研修が一般的となったことで、場所を問わず各地の研修に参加できるようになりました。このように研修実施のあり方に変化が見られる「ポストコロナ時代」の今、各拠点が果たす役割を改めて考える時期にきています。

本企画では、大学教育イノベーション日本の加盟校のなかでも、特定の分野で高い専門性をもとにした研修を提供している組織と、地域の課題を汲み上げ、総合的に研修を提供している組織それぞれの立場から、ポストコロナ時代における研修実施拠点の役割を考えたいと思います。オンライン形式の研修が今後も充実すれば、特定分野に専門化し全国のための拠点となるのが効率的です。他方、対面開催が徐々に戻ってきたことにより、地域の拠点において総合的に研修を提供することの意義が再認識されています。本フォーラムでは、各組織の実践事例と今後の展望を踏まえつつ、研修実施拠点としての意義と課題、そしてそれぞれがお互いに期待することや連携のあり方を議論し、今後の拠点の役割を考えたいと思います。

プログラム：

13:00 開会挨拶・趣旨説明

中井 俊樹（HEIJ 代表／愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

13:10 報告

「変容する医学教育におけるFDの再定義を目指して」

早川 佳穂（岐阜大学医学教育開発研究センター 特任助教）

「知財実務部門を礎とした実質的知財教育の実践と展開」

生田 容景（山口大学知的財産センター 副センター長／准教授）

「コロナ禍後の教育・学修支援専門職養成拠点の役割」

我妻 鉄也（千葉大学アカデミック・リンク・センター 特任助教）

「次世代型大学教育開発拠点における専門的職員養成の現状と課題」

小湊 卓夫（九州大学次世代型大学教育開発センター 准教授）

15:00 総合討論

モデレーター：丸山 和昭（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授）

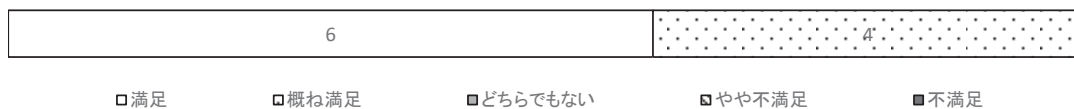
15:50 閉会挨拶

加藤 真紀（名古屋大学高等教育研究センター 教授）

<https://www.heij.jp/news/733>

▷アンケート結果（参加者：39名 アンケート回答者：10名）

フォーラムの満足度はいかがでしたか（単位：人）



自由記述

- ・様々なFD・SD拠点の取組の現状と課題を知ることができました。
- ・現在の取り組みや各拠点のお悩みを共有していただきありがとうございました。総合討論も認定制度などについて踏み込んだ話があり面白かったです。
- ・全国に、さまざまな専門分野の教育拠点があることが知れ、取り組みを聞くことができ有益でした。

◎大学教務実践研究会セミナー

「教務系事務部門中堅者向け講習会」【オンライン】

講師：宮林 常崇（東京都立大学 理系管理課長〔学務課長兼務〕／
公立大学協会 事務局参与）

小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）

多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）

有馬 美耶子（白百合女子大学子大学教務課 課長代理）

石樽 三鈴（中部大学学事部設置改組準備課 課長）

日時：2023年10月21日（土）

教務事務編：10:00～12:00

教職事務編：13:30～15:30

開催方法：Zoom ウェビナー

主催：大学教務実践研究会、東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：1名につき2,000円/日（「教務事務編」「教職事務編」いずれかの参加であっても2,000円）※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概要：教務系事務部門の中堅職員には国内の高等教育情勢や大学政策、規程、全学的会議の議論内容、自大学の教育理念や内容などの理解を踏まえた上で学内諸会議において、適切な資料を作成・提示することが求められます。

この講習会では、教務・教職事務の中堅者を対象として、部署内の他の職員や他部署からの相談案件に対して、状況を適切に理解し、一定の判断を行なうことができるスキルを身につけることを目指します。

プログラム：

教務事務編 担当：宮林

テーマ：大学設置基準改正事項における現場の対応、単位認定のケース別実務、社会人向けプログラムにおける教務事務、組織づくり等

対象者：教務事務を1年以上経験し、1年の流れを把握できている方であれば理解できる内容です。

教職事務編 担当：小野・多畑・有馬・石樽

テーマ：教職課程における事務職員の立場・役割について－課程認定申請の事例をもとに－

対象者：教職事務を半年程度経験し、1年の流れを把握できている方であれば十分理解できる内容です。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/16/>

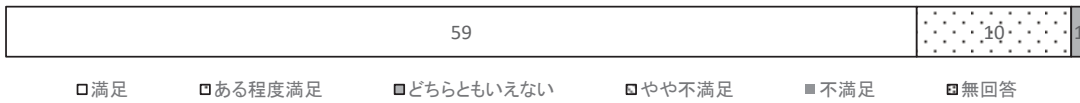
参加者：353名

▷アンケート結果

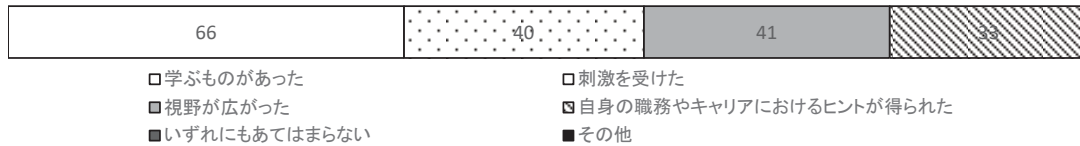
【教務事務編】（回答者：70名）

講習会の内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



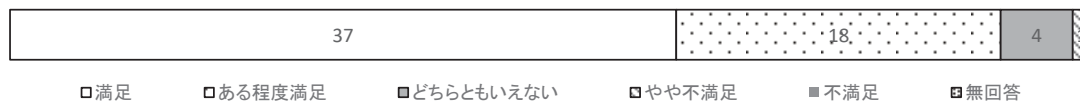
自由記述

- ・宮林先生の説明は身近な例えを用いてくれるので、非常にわかりやすいです。
- ・講師の先生がテーマをかみ砕いて教えてくださったので、話がわかりやすかったです。
- ・膨大な情報量ですが、「教務実践」の名の通り、業務に直結する内容でしたので集中でき、学びの多い充実した3時間でした。内部質保証とのかかわりを示していただいたことも学内の状況と照らして理解が深まりました。たくさんのわかりやすい事例を入れていただけたこともよかったです。
- ・初めての参加でしたが、セミナー全体の長さやテンポがちょうどよく、終始聞きやすかったです。
- ・教務系事務の経験がなく、予備知識不足で理解が追いつかないところもあったのですが、アーカイブ配信での見直しを推奨してサクサク進行を進めてくださる点がよかったです。

【教職事務編】（回答者：60名）

講習会の内容について（単位：人）

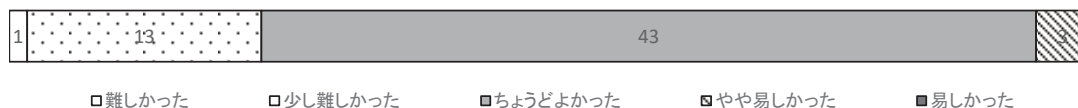
(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。(複数回答可)



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・「どうせなら前向きに楽しく」とても共感できるお言葉です。多畑先生が日々葛藤なさっている様子が心配いたしておりますが、現場のことを誰よりもわかっていらっしゃるからこそであり、多畑先生の手元で勤務されている皆様がうらやましくも思います。
- ・場合によっては言いづらいこともあるかと思いますが、対談形式でそれぞれの先生方がさらっと話していただけるので、非常にありがたいと思います。
- ・各大学の登壇者の皆さんの生の声を聞くことで、(特に管理職として) どういうスタンスで課程認定申請の対応にあたるのが望ましいのか、そのニュアンスを一定程度聞き取れたような気がしました。
- ・内容面はいつも目から鱗で大変充実していると感じます。無理なお願いかと思いますが、関東圏でも勉強会を開催していただけると対面で参加しやすいです。教職事務担当者間でのネットワークがより強固になるかと思っています。
- ・課員の立場のときに管理職に対してどう業務改善を提案していけばいいのか、また管理職の立場のときにその上の上司にどう働きかけていけばいいのか、立場ごとでの違いを知りたいと思いました。

◎大学教務実践研究会セミナー

「教務系事務部門中堅者向け講習会」【ラウンドテーブル】

講師：小野 勝士 (龍谷大学社会学部教務課)

多畑 寿城 (神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長)

有馬 美耶子 (白百合女子大学子大学教務課 課長代理)

宮林 常崇 (東京都立大学 理系管理課長〔学務課長兼務〕)

公立大学協会 事務局参与)

大津 正知 (茨城大学情報戦略機構 助教)

日時：2023年10月21日(土)

教職事務編：10:00～12:00

教務事務編：13:30～15:30

開催場所：教職事務編：名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール

教務事務編：名古屋大学文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

定員：教職事務編40名、教務事務編20名

主催：大学教務実践研究会、東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：1名につき2,000円/日（「教務事務編」「教職事務編」いずれかの参加であっても2,000円）※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概要：教務系事務部門の中堅職員には国内の高等教育情勢や大学政策、規程、全学的会議の議論内容、自大学の教育理念や内容などの理解を踏まえた上で学内諸会議において、適切な資料を作成・提示することが求められます。

このラウンドテーブルは、同日開催のオンライン講習会と連動させた対面企画です。講習会では、教務・教職事務中堅者を対象として、部署内の他の職員や他部署からの相談案件に対して、状況を適切に理解し、一定の判断を行うことができるスキルを身につけることを目指します。一方、このラウンドテーブルでは、同一テーマについての講師と受講者との生の対話を通じて、情報収集、情報共有をしていただく機会を提供いたします。

プログラム：

教職事務編 担当：小野・多畑・有馬

テーマ：教職課程認定大学実地視察報告書から学ぶ

対象者：教職事務を半年程度経験し、1年の流れを把握できている方であれば十分理解できる内容です。

教務事務編 担当：宮林・大津

テーマ：教務事務担当者のための大学設置基準の読み方

対象者：教務事務を1年以上経験し、1年の流れを把握できている方であれば理解できる内容です。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/14/>

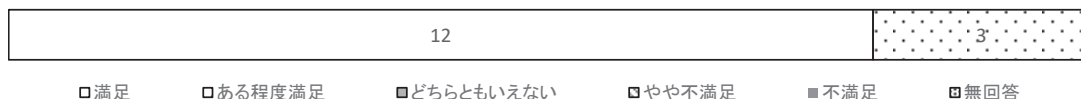
参加者：52名

▷アンケート結果

【教職事務編】（回答者：15名）

講習会の内容について（単位：人）

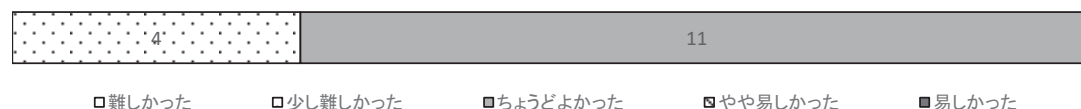
(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



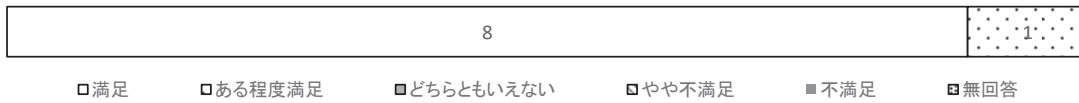
自由記述

- ・具体的な事例の解説をいただき、わかりやすく、かつ本学の状況にも置き換えて考えることができました。
- ・実地視察で指摘されることの実例をたくさん学べてよかったです。自分は今年度より教職担当になり対面で参加させていただいておりますが、本日お話しした方でもそういう方が数名みえて「対面とオンラインは全然違います」という話をしました。本日はグループで話すこともできてよかったです。小野様をはじめ多畑様、有馬様、石樽様のお話が聞けて感謝しております。
- ・教職担当となってから実地視察を経験したことがなかったため、注意すべき点等全く想像できずにいましたので、見直す点など把握できてよかったです。
- ・講習の途中、短い時間ではありましたが近くの座席の方と情報共有することができ、他の大学の方と困っている点などを共有できたことがよかったです。
- ・時間が少ないと感じるくらいに充実しているので、オンラインオンリーでの開催など、運営される方の負担にならない程度に増やしていただくと尚嬉しいです。

【教務事務編】（回答者：9名）

講習会の内容について（単位：人）

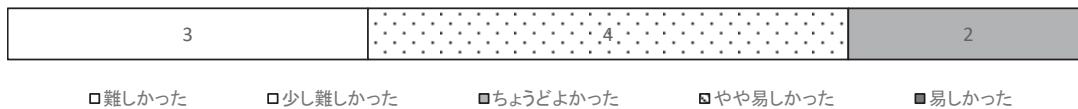
(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本講習会について、あてはまるものを選んでください。(複数回答可)



(3) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・ 4 月より教務課教職係に所属して主として教職係の日業務に追われて大学設置基準についての知識が全くないのを痛感しました。大津先生、宮林先生には本学で講習会をしていただきたいと思いました。
- ・ 日常業務をこなすだけでなく、その裏側にある国（文科省）の意図なども知ることで、より日々の業務により影響が出せるのではないかと感じました。文科省の通知文など、難しい表現が多くなかなか理解することが難しいので、このような場で対話を通じて色々学んでいくのが一番よいのではと感じました。
- ・ 講義とディスカッションを通して、大学設置基準への理解が深まりました。
- ・ 前半と後半でグループが変わるため、いろんな方と交流・情報交換ができてよかったです。
- ・ 参加者相互のディスカッションの時間が少ないと感じたので、講義とのバランスを考慮し、相互の交流や意見交換が促進される内容がよいように感じました。

◎第 4 回学生支援担当者講習会／ワークショップ

「学生支援における連携と協働－京都大学の取り組みより－」

講師：杉原 保史（京都大学学生総合支援機構学生相談部門 教授）

日時：2023 年 12 月 1 日（金） 15:00～17:00

開催場所：名古屋大学東山キャンパス学生支援棟 2 階

対象者：本学学生支援本部の相談員、兼任相談員

主催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

共催：名古屋大学学生支援本部

概要：京都大学は国立大学の中でも学生相談の歴史が長く先駆的な取り組みを行っています。当日は京都大学学生総合支援機構の杉原先生をお招きし、京都大学の学生支援体制に関する講演、ならびに、名古屋大学学生支援本部における相談の実際について事例検討を行います。

参加者：26名

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/49/>

◎教職員能力開発拠点事業

「IRer 養成講座」

講師：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

上月 翔太（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 講師）

坂本 規孝（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 特定研究員）

竹中 喜一（近畿大学 IR・教育支援センター 准教授）

丸山 和昭（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授）

日時：2023年12月14日（木）10:00～17:20

2023年12月15日（金）10:00～17:30

開催方法：Zoom

定員：20名

対象者：IRを担当する教職員（IRの経験が1年以上10年未満の方）

主催：愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室[教職員能力開発拠点]

共催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：4,000円

概要：IRの担当者として、IRの意義や方法、データ分析や報告に関する実践的な知識とともに、所属大学におけるIRを改善するための具体的手法を身につけることを目的としています。

プログラム：

12月14日（木）

10:00 開会挨拶

10:05 アイスブレイク・オリエンテーション【坂本】

10:20 IRの意義と方法を理解する【中井】

11:20 IRの課題を共有する【坂本】

12:10 休憩

- 13:10 学生の学習過程を分析する【上月】
- 14:10 学生調査を企画・実施する【丸山】
- 15:10 統計分析を実施する【丸山】
- 16:10 テキストデータを活用する【上月】
- 17:00 質疑応答・諸連絡【坂本】
- 17:20 終了

12月15日（金）

- 10:00 前日の振り返り【坂本】
- 10:10 活用につながる報告を行う【坂本】
- 11:10 IRの組織体制を構築する【竹中】
- 12:00 休憩
- 13:00 IRの課題解決を検討する【全講師】
グループに分かれてIRの課題解決案の作成・発表・質疑応答
- 17:00 まとめとふりかえり【坂本】
- 17:20 閉会挨拶・クロージング
- 17:30 終了

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/23/>

▷アンケート結果（参加者：17名 アンケート回答者：15名）

- ・ IRに関する基本的な知識だけでなく、他大学のIRの取り組みや状況を知ることができたのは、とても有益でした。
- ・ 分析方法から認知に向けた話まで、基礎的なことも含めつつお話いただけたので、IR事業が具体的に動ききれていない本学にとってとても有益な講座になりました。
- ・ IRの意義と方法をはじめに研修していただけてよかったです。また、講座ごとに意見交換があったことは楽しくてよかったです。
- ・ 具体的なデータを使うことで説得性が高まり、若い職員でも組織を動かすことができるというお話に嬉しくなりました。
- ・ 知識と併せて、実践に向けたプラン作成やそのフォローアップがプログラムに含まれていてよかったです。
- ・ 各講座の中にあるグループワークによって、自分がどのようなところをもっと学習するべきなのかが明確になりました。アクションプランについて講師の先生やグループワークで一緒したみなさんからアドバイスを頂戴することができてよかったです。

- ・グループワークについて、最初にもう少しアイスブレイクがあるとその後の議論がもう少し活発にできたのではないかと感じました。また、各グループワークは時間が短く、参加者間の議論や交流が難しかったのが残念です。
- ・一口に IR と言ってもどこに課題があるのか、改善のためのプロセスは多種多様で同じ解決策は無いということがわかりました。他大学の状況を知るためにも 2 日目のようにグループディスカッションの時間がある程度とれるとよいなと思いました。

◎「ゼロからはじめる海外留学プログラム設計ワークショップ」

講 師：宮林 常崇（東京都立大学）、大枝 さやか（国際基督教大学）、
大竹 秀和（立教大学）、鈴木 悠（東京音楽大学）、
畑中 みどり（大阪学院大学）、宮原 秀明（大阪学院大学）

日 時：2023 年 12 月 15 日（金）13:00～16:00

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ

定 員：10 名

対 象 者：留学プログラムに関する業務知識を基礎から学びたい職員であり、講習会修了後に書面アンケート（10 分程度）に必ずご協力いただける方

主 催：大学教務実践研究会、東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参 加 費：無料

概 要：大学教育の国際化に必要な業務は様々な部門との連携が不可欠ですが、教務部門と国際部門の連携不足が業務遂行上の課題となっている職場は少なくありません。そこで、大学教務実践研究会では 2021 年に「教務部門と国際部門の架け橋プロジェクト」を立ち上げ、お互いの連携を円滑にするために役立つツールの開発を行ってきました。本企画はその 1 つとして、初任者向けの SD を対面形式で実施するものです。

このセミナーでは、

◇自大学の国際化を促進するために関係する教職員と連携することができる

◇自大学の国際化に資する企画を自ら考え、上司へ提案できる

ようになるために、

◆海外留学プログラムに関する基礎的な知識

◆海外留学プログラムを設計するうえで知っておくべき国際部門や教務部門の業務知識を身に着けることを目的とし、具体的な事例を用いた対面ワークショップ形式で開催します。

プログラム：

13:00 ゼロからはじめる海外留学プログラム設計ワークショップ

15:50 書面アンケート

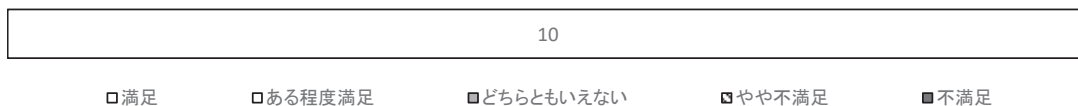
16:00 アンケート終了

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/26/>

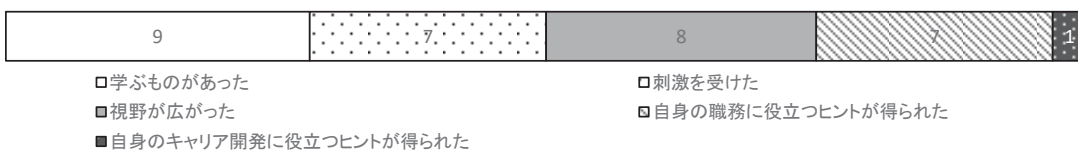
▷アンケート結果（参加者：10名 アンケート回答者：10名）

ワークショップの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本ワークショップについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・本学でも留学する学生を増やすため、いつ何時新しいプログラムが必要になるか、という状況ですのできっと役に立つ日が来ると感じました。
- ・自分は日本人学生の留学支援を担当していますが、現状、直接的に留学プログラムの設計に関わっているわけではありません。しかし、大学として、留学に対し積極的でない学科にも、短期留学プログラムを実施することを求めていますので、なぜ留学プログラムが必要なのか、どのようにプログラム設計すればいいのか、を教員に説明するための勉強になりました。
- ・大学設置基準やディプロマ・ポリシーを学んでから、それを考慮にいれて留学プログラムを設計するという進め方は非常に新鮮で、「何のために留学させるのか」という簡単なようで難しい問いに対するヒントを得られました。
- ・ディプロマポリシーと連携した理由付けの部分と、他大学様の取り組み事例が特に参考になりました。
- ・教務系の知識が皆無だったので、オリエンテーションでの知識が助かりました。その他様々な気づきがありました。

◎「事務担当者のための国際部門（留学生受入）基礎知識勉強会」

講 師：宮林 常崇（東京都立大学）、岩田 剛（愛媛大学）、
塩川 雅美（大学未来創造研究所）、前河 泰正（大阪国際大学）、
村上 健一郎（横浜国立大学）

日 時：2023年12月15日（金）14:00～16:00

開催方法：リアルタイムオンライン

定 員：50名程度

対 象 者：海外からの学生受け入れに関する業務知識を基礎から学びたい職員であり、講習
会修了後にWEBアンケート（10分程度）に必ずご協力いただける方

主 催：大学教務実践研究会／東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保
証を担う中核教職員能力開発拠点]

参 加 費：無料

概 要：大学教育の国際化に必要な業務は様々な部門との連携が不可欠ですが、教務部門と
国際部門の連携不足が業務遂行上の課題となっている職場は少なくありません。そこで、大学
教務実践研究会では2021年に「教務部門と国際部門の架け橋プロジェクト」を立ち上げ、お互
いの連携を円滑にするために役立つツールの開発を行ってきました。本企画はその1つとして、
初任者向けのSDをオンラインで実施するものです。

この勉強会では、

◇自大学の国際化を促進するために関係する教職員と連携することができる

◇自大学の国際化に資する企画を自ら考え、上司へ提案できる

ようになるために、

◆国際部門（海外からの留学生受け入れ）の基本的な流れ

◆留学生受け入れプログラムの検討に必要な国際部門や教務部門の業務知識
に関する基礎的な知識・理解を身につけることを目的としています。

プログラム：

14:00 国際部門（留学生受入）基礎知識勉強会

15:30 Web アンケート

15:40 オンライン参加者のうち希望者と講師との情報交換会

16:00 情報交換会終了

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/25/>

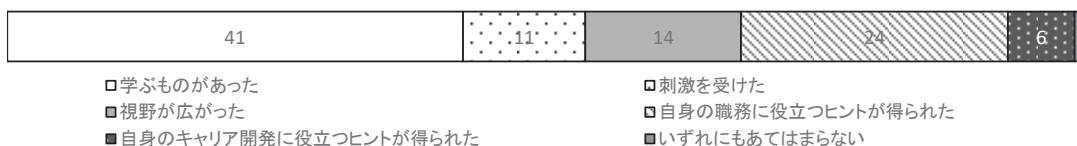
▷アンケート結果（参加者：65名 アンケート回答者：45名）

勉強会の内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本勉強会について、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・国際部門での経験が浅く、自身の語学能力を向上させることや目の前の業務にしか考えが至らなかったが、留学生受け入れに関する日本の方針や世界から日本がどのように見られているかなどにも目を向けることが、本当の意味で国際的な視野を持つことになり、今後の業務にも役立ちそうだと思います。
- ・普段から、「これってどういう意味なのだろう」と疑問に思うことが多々あったので、その疑問が解消されたように思います。
- ・留学生支援については、特殊性もあり日本人学生への支援とは異なる部分が多いため、新たに担当になる職員の基礎的知識の均一性を担保するためにこのような研修がいつでも（人事異動の際に）閲覧できる仕組みがあると育成の際にありがたいと思いました。
- ・国際部門のマネージャーとして、教務系・学生支援系の部署の職員と受入れプロジェクトを立ち上げる予定なので、すぐに実践に活かせるとともに、よりよい協働ができそうであると感じました。
- ・内容が盛りだくさんであり、もっと具体例も聞きたいなと思ったので、もう少し時間が長い講座でもよいかと感じました。

◎大学教務実践研究会セミナー

「教務課題検討フォーラム」

講師：宮林 常崇（東京都立大学）・大津 正知（茨城大学）

有馬 美耶子（白百合女子大学）

竹中 喜一（近畿大学）

小野 勝士（龍谷大学）

[話題提供] 多畑 寿城（神戸女子大学）、石樽 三鈴（中部大学）

日 時：2023年12月16日（土）10:00～15:30

開催方法：対面／オンライン／アーカイブ

対面会場：名古屋大学東山キャンパス全学教育棟 A 館

主 催：大学教務実践研究会／東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：1名につき2,000円 ※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概 要：大学教務実践研究会と名古屋大学高等教育研究センターとは、教務の現場における事例を持ち寄り、それを整理した上で実践的な知識まで高めることを目的に、協働して活動しています。この教務課題検討フォーラムは、2022年までの大会から名称を変更し、より今日的な課題をとりあげ、ともに議論を深めていく場として設定しました。今年のフォーラムでは、昨年改正された大学設置基準や今年改正された教職課程認定基準をテーマに、制度の理解、実際の運用場面での対応、文部科学省への手続き等、4つの分科会を設定し、実践的な知識を共有します。

プログラム：

10:00 分科会 1

1a) カリキュラムを取り巻く法令・制度の理解を深める

担当：宮林・大津

1b) どうする？履歴書・教育研究業績書の執筆依頼！

－課程認定申請・変更届提出を控えて－

担当：有馬

話題提供：多畑・小野・石樽

13:30 分科会 2

2a) カリキュラムを通じた学習成果の評価を考える

担当：竹中

2b) 事例で学ぶ教員免許事務－教育課程の変更届－

担当：小野

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/27/>

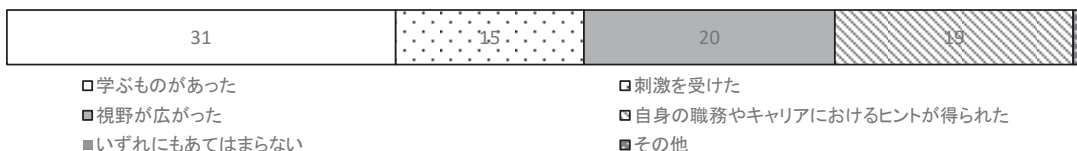
参加者：349名

▷アンケート結果

【分科会 1a】（回答者：31 名）

分科会の内容について（単位：人）

(1) 本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



(2) 本分科会の内容水準はいかがでしたか。



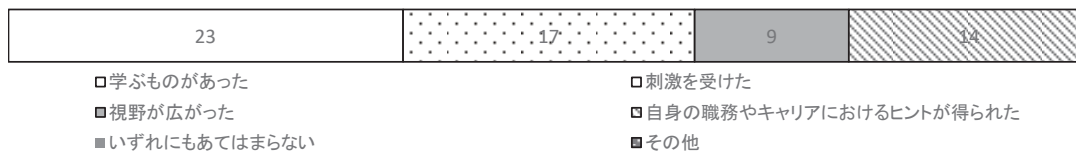
自由記述

- ・毎回、難しい法律の解釈についてわかりやすく説明いただけるので大変勉強になります。
- ・教務が直面している問題を具体例で示しつつ解説していただけた点がよかったです。また思っていたより対面参加の人数が少なく、それがかえて講師との距離が縮まって私にとってはよかったです。昼休憩の時間に講師の方々に直接、自大学のことを例に挙げて質問することができました。それだけでも現地参加した甲斐があったと思います。
- ・対面で参加させていただきましたが、講師の方はもちろん周りの方も知識が豊富な方が多く、とても刺激があり教務業務へのモチベーションが上がりました。
- ・他にこのような学習する機会がないため、大変ありがたいです。

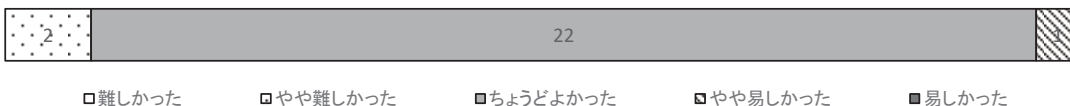
【分科会 1b】（回答者：25 名）

分科会の内容について（単位：人）

(1) 本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



(2) 本分科会の内容水準はいかがでしたか。



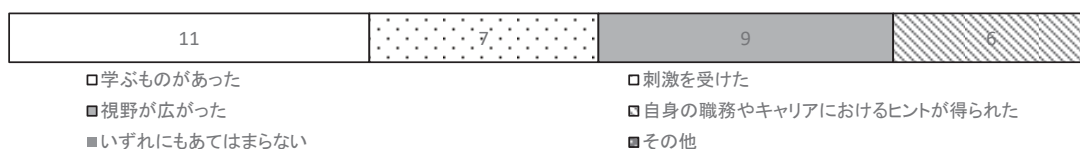
自由記述

- ・ 昨年から教職担当となりましたので、担当者として押さえておくべきことが分かりやすかったです。なかなか学内だけでは、相談する相手もいませんし、担当者が退職していることもありますので、他大学の事例を伺って大変勉強になりました。
- ・ 対面会場のみでの、様々な事例や各大学のご担当者のご経験談等のお話は、大変貴重でした。
- ・ マニュアルに書かれていない、業務をスムーズに進めるためのコツをたくさんお聞きすることができてよかったです。
- ・ 履歴書等の内容で気をつける点だけでなく、教員への依頼・関わり方について勉強になりました。

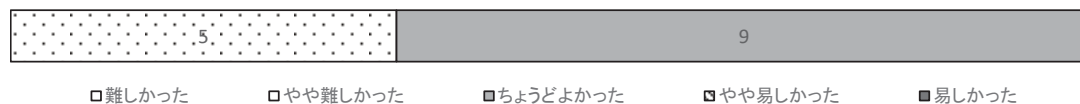
【分科会 2a】（回答者：14名）

分科会の内容について（単位：人）

(1) 本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



(2) 本分科会の内容水準はいかがでしたか。



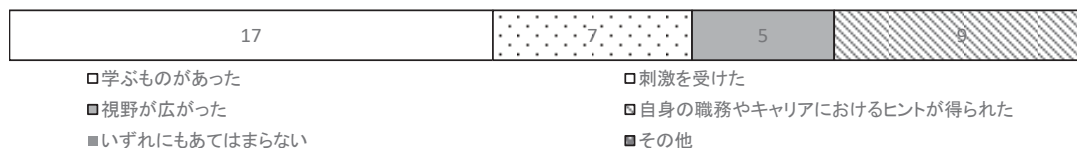
自由記述

- ・ 評価についてあまり詳しくなかったのですが、丁寧に説明していただいたので理解がしやすかったです。
- ・ 対面で参加させていただきましたが、参加者の方の見識も深く、今自大学でできていること、できていないことがはっきりと認識することができました。
- ・ 本学では今年から学長主導で PROG テストが導入されたが、その目的をより深く理解することができました。また、情報を取得し分析するだけでなく、その情報を活用しこれまでのやり方を変えていくために、上層部に意思決定してもらうための理論について示されていたところが印象に残りました。
- ・ 授業評価アンケートだけでなく、カリキュラム全体を通して学生に何が残っているかをスチューデントフィードバックシートを使用して学生モニターに聞いているところを本学でも取り入れられたらと思いました。先生のおっしゃるとおり、授業評価アンケートでは個々の授業の評価になるので、カリキュラム全体としての意見はそこからは見えないというところに気づかされました。
- ・ カリキュラムがうまく機能しているかの検証方法について、考え方やヒントを得ることができました。

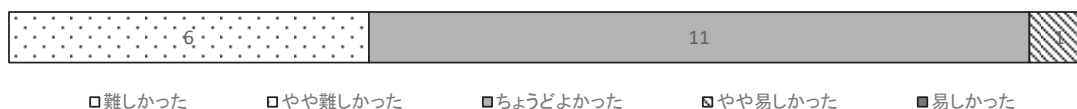
【分科会 2b】（回答者：18 名）

分科会の内容について（単位：人）

(1) 本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



(2) 本分科会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・新たな気づきがあり勉強になりました。練習問題は事前の学習で大変参考になりました。また小野様が自身の経験からわかりやすく説明していただいたこと心より感謝しております。
- ・変更事例とその際の新旧対照表への記載方法を見せていただけるので参考になっています。
- ・対面で参加させていただきましたが、対面でしか聞けない貴重なお話が聞けて素晴らしいセミナーに参加させていただきました。
- ・実際の様式を用いて説明してくださるため、わかりやすく、確認がしやすかったです。
- ・法律の改正に伴って変更届の提出については、いろいろなパターンがありますので、それを改めて整理することができました。

◎第 4 回公開セミナー／物理学講義実験研究会セミナー

「分野別教育方法研究（DBER）に基づく学習成果の可視化」

講 師：安田 淳一郎（名古屋大学教育基盤連携本部／高等教育研究センター 准教授）

日 時：2024 年 1 月 18 日（木）15:00～17:00

開催方法：Zoom ウェビナー

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

概 要：学問分野別の効果的な教授法に関する科学的知見の蓄積・活用は、大学教育の質保証の観点からも、非常に有益とされます。本セミナーでは、そのような知識体系を構築する分野別教育方法研究（discipline-based education research, DBER）について解説し、とくに物理教育研究を一例として、DBER が学習成果の可視化に果たし得る役割についてお話しします。また、DBER で得られた知見の活用事例として、山形大学が独自に開発した「基盤力テスト」

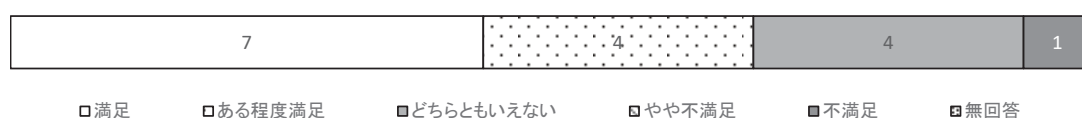
を取り上げ、大学初年次における学習成果の可視化、およびカリキュラム改善の事例をご報告します。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/30/>

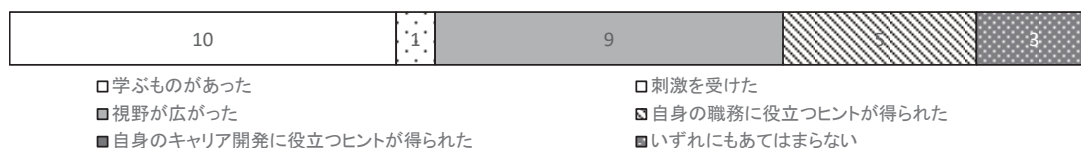
▷アンケート結果（参加者：44名 アンケート回答者：16名）

セミナーの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・物理学の研究、教育に従事しており、理学部、工学部の学生の教育だけでなく、文系の学生を対象とする教養科目も担当しています。どの分野に進む学生でも、物理学、数学のリテラシーは身に付けてほしい（それが何かということも問題ですが）と願っております。本日の講演内容は、DBER について学ぶことができただけでなく、私自身の視野を広げ、あらためて教育について考える機会となりました。
- ・基盤力テストがカリキュラムに与える影響の大きさが想像より大きかったです。
- ・DBER についてさらに学んでいかないとはいませんが、自分自身の教育活動の中に活かせるよう、具体的に考えてみたいと思っております。

◎教員免許事務担当者講習会

「変更届提出前のチェックポイントについて」

講師：小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）

多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）

有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）

日時：2024年2月10日（土）

オンライン 13:00～15:15

対面 13:00～17:00

開催方法：対面／オンライン／アーカイブ

対面会場：神戸女子大学ポートアイランドキャンパス D 館 5 階 501 講義室

主催：大学教務実践研究会／東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加費：1 名につき 2,000 円 ※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概要：本講習会では、本年 2 月末が提出期限となっている一部教科での教科に関する専門的事項に関する科目の変更届や通常の 3 月末提出期限となっている教職課程の変更届の作成担当者を主な対象として、登壇者の対談、参加者からの質問を交え、提出直前の確認事項のおさらいをします。教務課題検討フォーラム（2023/12/16 開催）においても教育課程の変更届をテーマにしましたが、新手引き（令和 7 年度開設用手引き）公表前の内容で行いましたので、今回は新手引きに基づく内容で実施します。

今回の第 1 部（オンライン）では、チェックポイントの確認と、ご参加の皆さんからの slido を通じた質問を交えつつ進めていく講師陣の対談を行います。第 2 部（対面）では、判断の難しい個別具体事例をもとにご参加の皆さんと検討する、ラウンドテーブルを開催します。

プログラム：

13:00～14:00 第 1 部 オンライン／対面〈録画あり〉

15:30～17:00 第 2 部 対面〈録画なし〉

判断の難しい個別具体事例について、登壇者の見解をもとにざっくりばらんに参加者の方とともに共有・意見交換したいと思います。また、参加者の方が抱えている業務上の課題点等について、参加者相互で意見交換し、解決のヒントになる場になればと考えています。

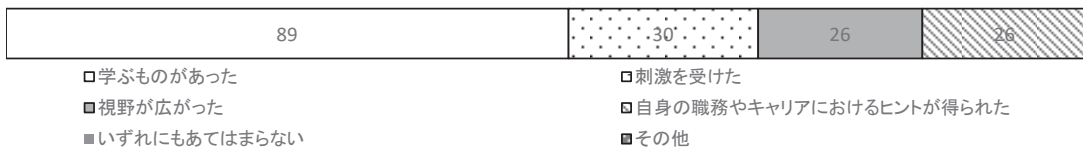
<https://kyoumujissenn.com/news/966/>

参加者：285 名

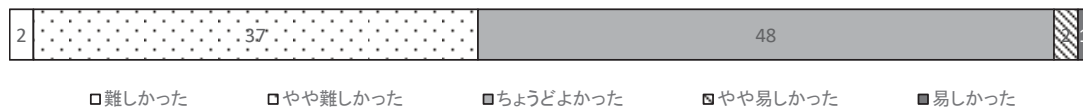
▷アンケート結果（回答者：91 名）

講習会の内容について（単位：人）

(1) 本講習会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



(2) 本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

- ・以前、教職事務をしていましたが、以前と変わっている点がわかりよかったです。
- ・変更届作成事務にあたって、どこをポイントに（重点的に）作成すればよいのかについて、改めて確認する機会となり、非常に勉強になりました。
- ・知りたかったことがわかって本当にありがたいです。毎回学び直しができる、とても感謝しております。
- ・変更届の新旧対照表に基づきそれぞれの内容に関する説明があり、今まで疑問に思っていたこと等が解決し、自身の業務に活かしていきたいと感じました。
- ・事例を交えて説明いただけたので、イメージしやすく、大変勉強になりました。変更が影響する範囲（証明書の作成等）にも話を広げていただけたので、今後は注意確認の意識を一層広げようと思います。

2. 講師派遣

2.1 学外講師派遣

○2023年6月29日（木）

日本女子大学 JWU 女子高等教育センターFD セミナー

「大学教育と AI との関係性－大学は ChatGPT とどう付き合う？」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：日本女子大学 JWU 女子高等教育センター

会 場：オンライン

対 象：日本女子大学教職員

参加者：150 名

○2023年7月4日（火）

北陸大学経済経営学部 FD 研修「教育現場における ChatGPT の活用について」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：北陸大学経済経営学部

会 場：北陸大学

対 象：北陸大学教職員

参加者：44 名

○2023年8月4日（金）

同志社大学良心館ラーニング・コモンズ 10 周年記念イベント「トークセッション」

講 師：竹永啓悟

主 催：同志社大学学習支援・教育開発センター

会 場：同志社大学良心館 2 階プレゼンテーションコート（ハイブリッド方式）

対 象：同志社大学良心館ラーニングコモンズスタッフ、同志社大学教職員

参加者：30 名

○2023年8月23日（水）

名古屋学院大学 SD 研修

「デジタル時代の大学の可能性を考える 大学における AI の活用可能性」

講 師：和嶋雄一郎
主 催：名古屋学院大学
会 場：名古屋学院大学
対 象：名古屋学院大学教職員
参加者：146 名

○2023 年 9 月 7 日（木）

星城大学 FD 教育改善検討会議「大学と AI の関係性－大学で AI を導入するときのコツ」

講 師：和嶋雄一郎
主 催：星城大学
会 場：星城大学
対 象：星城大学教職員
参加者：55 名

○2023 年 10 月 11 日（水）

新化学技術推進協会 人材育成部会講演会

「博士育成とキャリアー日本の博士エコシステムを考える」

講 師：加藤真紀
主 催：新化学技術推進協会人材育成部会
会 場：新化学技術推進協会
対 象：新化学技術推進協会人材育成部会員
参加者：12 名

○2023 年 10 月 16 日（月）

科学コミュニケーション「科学コミュニケーション概論」

講 師：齋藤芳子
主 催：奈良先端科学技術大学院大学
会 場：オンライン
対 象：奈良先端科学技術大学院大学修士課程 1 年生
参加者：86 名

○2023年10月20日（金）

早稲田大学大学総合研究センター第3回 Faculty Café

「大学教育と生成系 AI—授業と教員と学生と ChatGPT—」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：早稲田大学大学総合研究センター

会 場：オンライン

対 象：大学教員、大学職員、大学院生

参加者：126名

○2023年10月23日（月）

2023年度学生支援相談に関する研究会「コロナ禍のピアサポート活動」

講 師：安部有紀子

主 催：学生文化創造

会 場：オンライン

対 象：大学職員

参加者：11名

○2023年11月8日（金）

就実大学教育学部 FD 研修会

「大学での生成系 AI の活用：教員・学生それぞれの使い方」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：就実大学教育学部

会 場：オンライン

対 象：就実大学教育学部教員

参加者：25名

○2024年2月17日（土）

2023年度 FD 講演会

「大学教育と生成系 AI—ChatGPT を Tool として活用できるか？—」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：関西学院大学高等教育推進センター

会 場：オンライン

対 象：関西学院大学教員

参加者：82 名

○2024 年 2 月 20 日（火）

令和 5 年度教育開発センターFD・SD 研修会

「大学教育と生成系 AI—大学で使う Tool としての ChatGPT—」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：岡山県立大学教育開発センター

会 場：岡山県立大学

対 象：岡山県立大学教員

参加者：79 名

○2024 年 3 月 14 日（木）

第 30 回大学教育研究フォーラム

「大学教育における自分らしい生成系 AI との付き合い方」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：大学教育研究フォーラム実行委員会

会 場：オンライン

対 象：大学教員、大学職員、大学院生、大学教育に関心のある方

参加者：85 名

○2024 年 3 月 18 日（月）

令和 5 年度（2023 年度）第 3 回教育コーディネーター研修会

「大学の授業で ChatGPT が使えるか？」

講 師：和嶋雄一郎

主 催：愛媛大学教育・学生支援機構

会 場：オンライン

対 象：愛媛大学の教育コーディネーター、その他関心のある教職員

参加者：59 名

2.2 学内講師派遣

○2023年4月4日（火）

令和5年度東海国立大学機構新規採用職員研修「若手職員に求められる学びとは」

講 師：安部有紀子

主 催：総務部人事労務・研修係

会 場：環境総合館レクチャーホール

対 象：名古屋大学／岐阜大学の職員

参加者：50名

○2023年4月7日（金）

令和5年度東海国立大学機構名古屋大学新任教員研修「授業改善支援」

講 師：安部有紀子

主 催：東海国立大学機構

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル／名古屋大学高等教育研究センター

会 場：野依記念学術交流館

対 象：名古屋大学／岐阜大学の新任教員

参加者：158名

○2023年6月21日（水）

アカデミックライティング講習会 レポートの書き方セミナー 第1回

「レポートに取り組むために～レポートの種類と書式を学ぶ～」

講 師：齋藤芳子・竹永啓悟

主 催：附属図書館

会 場：中央図書館大会議室

対 象：名古屋大学／岐阜大学の学部生

参加者：4名

○2023年6月28日（水）

アカデミックライティング講習会 レポートの書き方セミナー 第2回

「レポートを書こう！」

講 師：竹永啓悟・安部有紀子

主 催：附属図書館
会 場：中央図書館大会議室
対 象：名古屋大学／岐阜大学の学部生
参加者：5名

○2023年11月8日（水）
アカデミックライティング講習会 論文の書き方セミナー 第1回
「論文の大枠を定めよう～構成と『問い』の立て方を学ぶ～」
講 師：竹永啓悟・齋藤芳子
主 催：附属図書館
会 場：中央図書館ラーニングポッド
対 象：名古屋大学／岐阜大学の学部生
参加者：6名

○2023年11月15日（水）
アカデミックライティング講習会 論文の書き方セミナー 第2回
「論文を執筆しよう～学術的な文書の書き方のコツ」
講 師：安部有紀子・竹永啓悟
主 催：附属図書館
会 場：中央図書館ラーニングポッド
対 象：名古屋大学／岐阜大学の学部生
参加者：4名

○2023年12月7日（木）
「シラバスの書き方セミナー」
講 師：安部有紀子
主 催：QTA・GSI トレーニングセンター、高等教育研究センター
会 場：オンライン
対 象：岐阜大学と名古屋大学の教職員・ポスドク・大学での授業実施に関心がある大学
院生
参加者：4名

○2023年12月19日(火)

学術情報リテラシー教育研修「講習会のためのスライドデザイン」

講 師：齋藤芳子

主 催：附属図書館

会 場：文系総合館アクティブラーニングスタジオ

対 象：名古屋大学の図書館職員

参加者：15名

3. 教材制作

◎ワークブック

○RA（レジデント・アシスタント）のためのトレーニング・ワークブック

ー学生スタッフとともに創る学寮コミュニティのためにー

学生アシスタント養成研究会（編）

名古屋大学高等教育研究センター、2024年3月



4. 情報提供

4.1 情報配信サービス

高等教育研究センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせするサービスを行っています。情報配信サービスへの登録は、以下ウェブサイトよりお申込ください。

・ウェブサイト

<https://forms.office.com/r/PgyyCQUT3P>

4月14日(金)	CSHE ニュース 172
6月13日(火)	CSHE ニュース 173
6月23日(金)	CSHE ニュース 174
7月21日(金)	CSHE ニュース 175
8月 7日(月)	CSHE ニュース 176
9月29日(金)	CSHE ニュース 177
10月17日(火)	CSHE ニュース 178
11月 2日(木)	CSHE ニュース 179
12月 4日(月)	CSHE ニュース 180
1月19日(金)	CSHE ニュース 181
2月 8日(木)	CSHE ニュース 182
3月21日(木)	CSHE ニュース 183

4.2 定期刊行物

◎ジャーナル『名古屋高等教育研究』第24号（2024年3月）

・目次

このジャーナルがめざすもの	編集委員会
[特集] 高等教育研究と実践をつなぐ～私たちが次の4半世紀にできること	
名古屋大学高等教育研究センターの25周年を迎えて	北栄輔
特集の趣旨	加藤真紀
高等教育研究センター創立25周年国際記念シンポジウム講演要旨	
Iveta SILOVA・Bruce MACFARLANE・黒田一雄・夏目達也	
グローバルな課題解決を導く高等教育と研究・組織の在り方	
ーパネルディスカッションの記録ー	東岡達也・加藤真紀
『名古屋高等教育研究』で使用されている単語からみる高等教育研究の変化	和嶋雄一郎
Higher Education Futures Beyond the Anthropocene: Mobilizing the Power of Science, Art, and Imagination	Iveta SILOVA
高等教育の多層的グローバルガバナンスと国際化の理念・理論的検討	黒田一雄
大学における高等教育研究センターの可能性ー私的・体験的センター論ー	夏目達也
[研究論文]	
オーストラリア国立大学の学習・教育戦略における多様性、公正、包摂の組織的推進	鳥居朋子
大学生活での学習・活動への関与が初期キャリアの思考行動特性へ及ぼす影響	
	高澤陽二郎・松井賢二
大学教員公募における競争ー東京の公立大学教員採用選考を事例としてー	加藤真紀
[特別寄稿]	
高等教育における奨学金と寄付の循環構ー大学卒業者のマイクロデータからの検証ー	福井文威
少子社会日本における高等教育へのアクセス	
ー大学進学・選択行動の地域的差異から考えるー	朴澤泰男
Higher Education Internationalization in Taiwan: New Developments in the Context of Geopolitical and Social Changes	
	Jason Cheng-Cheng YANG
[研究ノート]	

Writing Support in Higher Education:

How to Use Native Checkers to Improve the Quality of Research Writing

LEGE R. Paul・DAVANZO Christopher

留学生に対する米国修士大学教職員の認識－大学の沿革や方針・留学生数に着目して－

陣田内美

大学生における社会的アイデンティティの成長理論の研究動向

河井亨・村上紗央里

大学職員における心理的風土の規定要因と、心理的風土が意識と自発的行動に及ぼす影響

堀川優弥

米国大学教育の学生支援における統合の概念の実態と課題について

安部有紀子

・ウェブサイト

<https://test.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/journal/>

◎季刊紙「かわらばん」

記事タイトル抜粋

- ・ かわらばん 82号 (2023年4月)
巻頭「25回目の春に」
グローサリー「大学におけるワークライフバランス」
- ・ かわらばん 83号 (2023年7月)
巻頭「温故知新－これからの大学教育を語りませんか」
グローサリー「学際教育」
- ・ かわらばん 84号 (2023年10月)
巻頭「生成系 AI と教育」
グローサリー「キャップストーン・コース」
- ・ かわらばん 85号 (2024年1月)
巻頭「多様な学生を授業に受け入れるために
－大学教員準備講座（認定プログラム）の開始に寄せて－」
グローサリー「分野別教育方法研究（ディーバー）」
- ・ ウェブサイト

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/kawaraban/>

©e-Newsletter FRIENDS vol.17: E-bulletin from the Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University. (December 2023)

センターに過去に在籍した方々（客員教員を含む）、海外から招聘した方々を対象に、年に1回、センターの活動状況を英語で発信しています。これにより、学術的交流を継続させています。

4.3 オンラインサービス

◎新任教員リソース集

新任教員のみなさまが着任後スムーズに活動を開始することができるよう、名古屋大学の教員として働くうえでのスタートアップ情報や、教育・研究環境の基本情報について提供しています。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/portal/resource/>

◎高等教育グロサリー

高等教育にかかわる様々な用語を解説しています。本センターの季刊紙『かわらばん』より「高等教育グロサリー（旧：カリキュラムグロサリー）」を随時転載しています。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/student/grossary/>

◎ファカルティガイド

必要な情報にさっとアクセスできるように、トピック別に背景や論点と手法を簡潔にまとめた1枚もののガイドです。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/facultyguide/>

◎ティップス先生からの7つの提案

名古屋大学の学生・教員・職員がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたものです。

名古屋大学では、さまざまな優れた教育活動が実践されています。主に学内での調査を通じて収集した教育実践例をデータベース化し、教授法研究や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。

なお、「ティップス先生からの7つの提案」には冊子版もあります。名古屋大学の教職員の方には配布しておりますのでご連絡ください。また学外で冊子版を希望される方は、出版業者（石川特殊特急製本株式会社、連絡先 052-231-2127）まで直接ご連絡ください。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/tips/>

◎成長するティップス先生

成長するティップス先生－名古屋大学版ティーチングティップス－の目的はとてもシンプル。つまり、われわれ教員が日ごろの教育活動のなかでしばしば出会う困ったこと、悩

みの解決のためにちょっとしたヒントをさし上げようということです。とりわけ初めて教壇に立つ教員の方々に有益なアドバイスとなることを念頭において制作しましたが、経験豊富な教員にとっても、困ったことが生じたとき、立ち止まって自分の授業を振り返り改善しようとするときに役立つものになっているはずです。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/resources/tips/>

◎ティップス先生のカリキュラムデザイン

このハンドブックは、名古屋大学の学部や研究科などで教育プログラムやコースの開発を担当する教職員のみなさんにとって役に立つカリキュラムデザインの要点や方法を、わかりやすくステップで説明するものです。ティップス先生のように、はじめてカリキュラムの改訂を担当することになった方々を主な読者に想定しています。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/tips/img/curriculum_design.pdf

◎名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック

名古屋大学の教員有志によって立ち上げた留学生研究会で作成しました。本冊子は、教員と留学生が信頼関係を築く上で参考になるとと思われるアドバイスや各種情報をまとめたものです。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/handbook/img/ryugakusei_handbook.pdf

◎研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit

科学コミュニケーションを始めたい研究者のために

- ・科学コミュニケーションとはなにか
 - ・科学コミュニケーションの場をどうつくっていくか
 - ・どのように科学コミュニケーションを行ったらよいか
- について役立つ情報とノウハウを集めた実践ガイドです。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/scicomkit/>

◎名古屋大学新入生のためのスタディティップス

一連の小冊子からなるシリーズです。「ティップス (tips)」とは、「秘訣・ヒント・こつ」などを意味します。「主体的な学習者」になることがなぜあなたにとって価値があり意味あることなのか。どうしたら学習姿勢を主体的なものに切り替えることができるのか。そのために役立つさまざまな秘訣について、提供していきます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/resources/stips/>

◎名古屋大学生のためのアカデミック・スキルズ・ガイド

名古屋大学において学習・研究を進めるために必要となる基本的なスキル (Common Basics) を取り上げ、解説したガイドです。トピックス別のスタート・ガイドはそれぞれ、(1)当該トピックスの概要、(2)チェックリスト、(3)チェックリスト達成のための説明、(4)推奨文献という4つのパートから構成されています。アカデミック・ライティング・ガイドは、執筆段階に沿った3部構成としています。各ガイドの出力にはA4用紙両面印刷がおすすめです。学習を始める際に、また学習の中で戸惑った時に、お役立てください。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/asg/>

◎良識をもって学問をしよう！

名古屋大学の新生が大学で学ぶ際に必要な学術倫理の基本をまとめたものです。単に示すだけを示すだけのガイドとは異なり、名大での学習活動を充実できるようにするためのアイデアや実践方法をまとめたものです。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/img/integrity.pdf>

◎シラバステンプレート

実際に使用されているシラバスをテンプレートという形で公開しています。ワードファイルでも公開していますので、シラバス作成時に役立てていただければと思います。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/activity/>

◎シラバス英文表記のための例文集

シラバスの重要な項目である、授業の目的と到達目標、成績評価方法、授業計画について、シラバスとしての質を最低限担保する最もシンプルな基本文型を示しました。また、キーワードを入れ替えることで、さまざまな分野のシラバス作成に対応できるようにしました。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/img/esyllabus.pdf>

◎ミニッツペーパーテンプレート

授業中、学生に記述させるコンパクトな質問用紙です。用途や目的に応じて、「リアクションペーパー」「ワーキングペーパー」「コメントペーパー」とも呼ばれます。

PDFファイル、エクセルファイルでテンプレートを公開しています。文言等を変更して使用することもできます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/minute/>

◎名大の授業

名古屋大学は、授業の一部を選び、そこで実際に使われている教材を電子化しインターネット上で無償公開する事業を行っています。

これは、授業教材をインターネット上で公開することで、普段は見ることのできない名古屋大学の教育の一端を、社会へ広く情報発信しようとするものです。学生の自学自習教材としての活用だけでなく、教員と学生、教員と学外者、そして教員同士の交流・インタラクションを期待しています。

この事業は、名古屋大学オープンコースウェア運営協議会が運営しており、日本オープンコースウェア・コンソーシアム（JOCW）と連携しています。

<https://ocw.nagoya-u.jp/>

◎東海高等教育研究所『大学と教育』

東海高等教育研究所に掲載された論文のうち、執筆者の許諾が得られたものをウェブサイトに公開しています。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/center/activitylog/publication/>

名古屋大学学術機関リポジトリからも閲覧できます。

https://nagoya.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=1657153778290

5. 拠点間交流

◎大学教育イノベーション日本の事務局活動

大学教育イノベーション日本（HEIJ）は、大学教育開発を促進し、日本の大学教育のイノベーションに寄与することを目的とした団体であり、文部科学省から教育関係共同利用拠点として認定を受けた組織や大学間連携により大学教育の開発を進める組織など全国の15組織（14組織（13大学）および1ネットワーク団体）が加盟している。

名古屋大学高等教育研究センターは、2021年6月から2023年10月まで大学教育イノベーション日本の事務局を担当した。本年度は事務局として、代表選挙の準備・実施、総会の準備およびHPの管理・更新等を行った。さらに、大学教育イノベーション日本が主催するイベントである「第8回大学教育イノベーションフォーラム」を企画・運営した。

第8回大学教育イノベーションフォーラム

「ポストコロナ時代における研修実施拠点：専門性と地域性をつなぐ」

日 時：2023年10月20日（金）13:00～15:55

開催方法：Zoom

定 員：200名

主 催：大学教育イノベーション日本

共 催：名古屋大学高等教育研究センター [質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参加者：39名

第8回 大学教育イノベーションフォーラム

ポストコロナ時代における研修実施拠点
：専門性と地域性をつなぐ

2023年10月20日（金）13:00-15:55

開催形態：ZOOMによるウェビナー
定 員：200名（先着順） **参加無料**
主 催：大学教育イノベーション日本（HEIJ）
共 催：名古屋大学高等教育研究センター [質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

Program

13:00-13:10 開会挨拶・趣意説明
中井 俊樹 氏
HEIJ代表
愛媛大学教育・学生支援機構教育企画課 教授

13:10-14:50 報告
① 早川 保穂 氏
岐阜大学教育学部教育開発センター 特任教授
② 金田 智幸 氏
山口大学知識センター 副センター長・准教授
③ 我妻 秋也 氏
千葉大学デジタル・リソグ・センター 特任助教
④ 小湊 卓夫 氏
九州大学次世代型大学教育開発センター 准教授

14:50-15:00 休憩

15:00-15:50 総合討論
モデレーター：丸山和昭 氏
名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授

15:50-15:55 閉会
加藤 真紀 氏
名古屋大学高等教育研究センター 教授

コロナウイルスの感染状況が落ち着きつつあり、対面研修の趣やが元来が少なくなってきました。他方、コロナ禍を越えオンライン研修が一般的となったことで、場所を問わず各地の研修に参加できるようになりました。このように研修実施のあり方に変化が見られる「ポストコロナ時代」の今、各拠点が果たす役割を改めて考える時期にきています。

本企画では、大学教育イノベーション日本の加盟校のなかでも、特定分野で高い専門性をもとにした研修を提供している拠点と、地域の課題を学ぶが、総合的に研修を提供している組織それぞれの立場から、ポストコロナ時代における研修実施拠点の役割を考えたいと思います。オンライン形式の研修が今後も充実すれば、特定分野に専門化し全国のための拠点となることが期待です。他方、対面開催が徐々に戻ってきたことにより、地域の拠点において総合的に研修を提供することの意義が再認識されています。本フォーラムでは、各組織の実践事例と今後の展望を踏まえつつ、研修実施拠点としての意義と課題、そしてそれぞれが抱えている期待することや連携のあり方を議論し、今後の拠点の役割を考えたいと思います。

参加
申込
方法
大学教育イノベーション日本UP [News&Event] よりお申し込みください
URL: <https://www.heij.jp/>
WEBからの申し込みができません。Eメールアドレスまで、氏名・所属・連絡先メールアドレスをお知らせください

お問い合わせ
大学教育イノベーション日本事務局
(名古屋大学 高等教育研究センター)
E-mail: heijoffice@gmail.com

6. 研究会運営

6.1 アカデミックスキルズ教育研究会

1. 活動目標

高等教育研究センターでは、ホームページにおいて学生を対象にした研究活動の導入レベルの知識やスキルを伝えるコンテンツとして、「アカデミック・スキルズガイド」を公開している。現在、学士課程教育の低年次学生に対するアカデミックスキルズの習得は大きな課題になっており、学生が自主的に調査を行い、分析し、レポートをまとめることができるようにより詳細な「ガイド」を作成する必要がある。

そこで、本研究会は学生の主体的な学びを支援するためのツールとして低年次学生を対象にした調査・分析・レポート執筆の新たなガイドの開発を行うことを目的とする。加えて、実際の授業で試行し、学生や関係者からフィードバックを得ることや、学生の指導にあっている教員や大学院生とも協力を得ることで、より実践的なガイドへとブラッシュアップしていく。

2. メンバー

安部 有紀子（名古屋大学高等教育研究センター）

齋藤 芳子（名古屋大学高等教育研究センター）

松本 みゆき（名古屋大学高等教育研究センター）

竹永 啓悟（名古屋大学高等教育研究センター）

3. 2023 年度の活動

第1回研究会 2023年8月23日（水）12:00～13:00

基礎セミナーの観察結果、レポートの到達度についての検討会を行い、質的調査法の方法に関するガイドの改訂版の作成について検討した。また、アカデミックライティングでは特に問いの立て方や、参考文献の書き方に関する情報が不足しているという点について確認した。引き続き情報収集を進めていくことになった。

6.2 学生アシスタント養成研究会

1. 活動目標

課外活動において訓練を受けた学生が他の学生を支援する取り組みは、現在多様な分野に広がっているが、その訓練方法については、担当教職員の個人的経験からの取り組みに留まり、大学組織を超えた情報や方法の共有が未発達である。本研究会では、学生の学習を促進するための学生スタッフの養成方法について、情報を収集するとともに、学術的知見に基づいたトレーニングモデルを開発する。

活動内容：本件について、先駆的取り組みをおこなっている事例の収集と、先行研究に関する学習会で得た見地をもとに、2023年度中に学生スタッフ養成のためのワークブックを開発、出版する。

2. メンバー

安部 有紀子（名古屋大学）

蝶 慎一（香川大学）

小野 詩紀子（南山大学）

南 玉瓊（お茶の水女子大学）

下之門 直樹（立命館アジア太平洋大学）

丸山 侑子（豊橋技術科学大学）

竹川 清美（豊橋技術科学大学）

澤田 涼（名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程）

3. 本年度の活動内容

第6回研究会 2023年4月24日（月）18:30～20:00

- ・報告（立命館アジア太平洋大学 APハウス／下之門氏）
- ・ワークブック構成案の意見交換

第7回研究会 2023年7月10日（月）18:30～20:00

- ・報告（南山大学ヤンセン国際寮／小野氏）
- ・ディスカッション

第8回研究会 2023年9月11日(月) 18:30~20:00

- ・報告(お茶の水女子大学 SCC/南氏)
- ・ディスカッション

第9回研究会 2023年10月7日(月) 18:30~20:00

- ・報告(学生アシスタントの養成について/澤田氏)
- ・ディスカッション
- ・ワークブックの執筆様式の確定

第10回研究会 2023年11月13日(月) 18:30~20:00

- ・報告(サービスマーケティングからの示唆ーリフレクションを通じた学び/黒沼氏)
- ・ディスカッション
- ・ワークブック執筆分担の調整

第11回研究会(総括セミナー) 2024年3月23日(土) 10:00~17:00

- ・報告1(カナダにおける学寮アシスタントの養成/Mr. Andrew Quenneville, Associate Director, Strategic Initiatives and Staff Development at The University of British Columbia)
- ・報告2(中国大学の書院制度について/修斌(XIU BIN)教授・中国海洋大学行遠書院事務局長)
- ・ディスカッション
- ・ワークブック完成の報告と研究会の総括

4. 成果と課題

本年度はワークブックの作成のために年度当初より構成案を検討し、作成作業を進めていった。毎月の研究会では各大学の実践報告を行い、現場の課題や状況を共有するとともに、課題解決のための検討を行った。2024年3月にワークブック完成の成果報告と全体を総括する研究会を実施した。今後、ワークブックは高等教育研究センターのホームページに掲載するとともに、各メンバー校の学生リーダー養成の研修機会で活用していく。

RA(レジデント・アシスタント)のためのトレーニング・ワークブック

ー学生スタッフとともに創る学寮コミュニティのためにー

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/handbook/img/Resident_Assistant_Workbook.pdf

6.3 教務系 SD 研究会

1. 活動目標

名古屋大学高等教育研究センターにおける「FD・SD 教育改善支援拠点」（2010～2014年度）事業の一環として設置された「名古屋 SD 研究会」を源流とし、拠点事業終了後もセンターのもとに活動を継続。「質保証を担う中核教職員能力開発拠点」（2017～2021年度、2022～2024年度）としてセンターが拠点事業の再認定を受けたことに伴い、研究会も再び拠点事業の一部に位置付けられている。2019年度には、教務系実務に特化している現状を踏まえて、名称を「教務系 SD 研究会」に変更した。引き続き、教務系職員に必要な専門知識・スキル等を明らかにすることに加え、大学事務組織の課題を主体的に解決できる職員の育成に必要な支援を明らかにすることを目的としている。

具体的な目標及び課題は以下の通りである。

- 1) これまでの大会や講習会の実績を踏まえた教務系事務職員に求められる知識・理解の体系化を行い、書籍として教務事務の現場へ還元する可能性について方向性を決める。
- 2) 教務系法規について、これまでの歴史的な経緯を確認し、課題を明らかにする。
- 3) 教学マネジメント指針で提言されている教務事務に関する SD を現場視点で議論し、大学教務実践研究会のセミナーや大会の開催により、能力開発の機会を開発・提供する。

2. メンバー（所属は 2024 年 3 月現在）

	有馬 美耶子	（白百合女子大学）
	石樽 三鈴	（中部大学）
	大津 正知	（茨城大学）
代表	小野 勝士	（龍谷大学）
	加藤 史征	（名古屋大学）
	川島 香織	（愛知県立大学）
	齋藤 芳子	（名古屋大学）
	田頭 吉一	（鹿児島大学）
	竹中 喜一	（近畿大学）
	多畑 寿城	（学校法人行吉学園）
	辰巳 早苗	（追手門学院大学）
	徳丸 由紀	（日本文理大学）
	宮林 常崇	（東京都立大学）
	村瀬 隆彦	（学校法人高木学園）

3. 本年度の活動実績

(1) 組織的研修の開催（詳細は第Ⅱ部令和5年度の拠点活動実績に掲載）

- ①教務系職員向け初任者講習会
- ②教務系事務部門中堅者向け講習会
- ③教務課題検討フォーラム
- ④教員免許事務担当者講習会
- ⑤ゼロからはじめる留学プログラム設計ワークショップ
- ⑥事務担当者のための国際部門（留学生受入）基礎知識勉強会

(2) 研修支援の試行（大学設置基準改正への対応のための研修プログラム提供および講師派遣）
6件（内訳：国立1、公立1、私立3、大学間ネットワーク1）

(3) 研究会

①第1回 2023年4月28日

名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

- ・2023年度構成員・年間スケジュールについて
- ・教務系職員初任者向け講習会の開催について
- ・改正大学設置基準施行後の状況について
- ・大学設置基準等改正に伴う対応検討会の周知チラシについて
- ・各プロジェクトの活動について

②第2回 2023年9月28日

名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

- ・教務系職員初任者向け講習会の振り返り
- ・教員免許事務担当者講習会（9月）と中堅者向け講習会（10月）の運営について
- ・教務課題検討フォーラムの企画について
- ・教務研修支援プロジェクトについて
- ・各プロジェクトの活動について

4. 成果と課題

①成果

○今年度は、2019年度以来の対面開催を実施した。リアルタイムオンライン配信・アーカ

イブ配信を併用し、対面開催のみに限定しない開催とした。

- 教務を取り巻く今日的な課題に関して、各講習会・大会において取り扱い、実践的な知識や最新情報を広く提供することができた。
- 大学設置基準等改正を踏まえた対応検討研修会をプログラム化し、各大学のニーズに合わせて、構成員を派遣し、研修会を開催した。
- 対面・リアルタイムオンライン配信・アーカイブ配信の選択制としたが、リアルタイムオンライン配信での参加者が少ないことから、今後は対面開催とアーカイブ配信のみの開催としたい。対面参加希望者は、知識面の修得以外に人脈を広げることや、他大学の状況のヒアリングという目的をもって参加されることから、対面参加者のみのプログラムを別途実施することとする。

②今後の課題

- 次世代の育成を視野に入れた活動の必要性がある。構成員の年齢構成を考慮した新規構成員の取り込みを行い、世代間の知識の継承を図っていくことが課題である。

5. 特記事項

本研究会から派生して、大学教務実践研究会が任意団体として設立されている。以下にその概要を記す。

a. 活動内容および目標

- ・教務に関する実践的知識の探究、それらの蓄積及びネットワーク構築並びに次世代の教務系職員の育成等（趣意書より）
- ・教務事務の実務的な内容を中心とする

b. 運営体制

代表	小野 勝士	(龍谷大学)
副代表	辰巳 早苗	(追手門学院大学)
事務局長	宮林 常崇	(東京都立大学)
運営アドバイザー	田頭 吉一	(鹿児島大学)
	村瀬 隆彦	(学校法人高木学園)
	美納 清美	(国士舘大学)
運営委員	有馬 美耶子	(白百合女子大学)

	石樽 三鈴	(中部大学)
	竹中 喜一	(愛媛大学)
	多畑 寿城	(学校法人行吉学園)
	徳丸 由紀	(日本文理大学)
運営協力者	大津 正知	(茨城大学)
	加藤 史征	(名古屋大学)
	川島 香織	(愛知県立大学)
	齋藤 芳子	(名古屋大学)
	中井 俊樹	(愛媛大学)
	松田 和才	(名古屋大学)
	満田 清恵	(中京大学)
	森 征一郎	(名古屋大学)

c. 活動内容

①教務課題検討フォーラムの開催 (12月)

②セミナーの開催

教務系職員向け初任者講習会 (7月)

教員免許事務担当者講習会 (5・9・2月)

教務系事務部門中堅者向け講習会 (10月)

ゼロからはじめる留学プログラム設計ワークショップ (12月)

事務担当者のための国際部門 (留学生受入) 基礎知識勉強会 (12月)

注：研究会の活動内容を広く発信するための方策として、講習会の申し込み時に今後も本研究会からの情報提供を求めるかどうかの確認を行い、メールアドレスを収集した。今後の行事案内を適宜発信したことで活動内容の広報について強化を図ることができた。

6.4 経済学教育研究会

1. 活動目標

主に日本の大学で経済学を教える教員が、経済学教育を研究し、教育実践の向上を志向・共有するための場を提供する。

2. メンバー

齊藤 誠（名古屋大学大学院経済学研究科） 代表
柳原 光芳（名古屋大学大学院経済学研究科）
藤田 真哉（名古屋大学大学院経済学研究科）
玉井 寿樹（名古屋大学大学院経済学研究科）
山口 景子（名古屋大学大学院経済学研究科）
田村 彌（名古屋大学大学院経済学研究科）
加藤 真紀（名古屋大学高等教育研究センター） 事務局

3. 本年度の活動実績

第1回会合

2023年6月21日（水）15:00～17:00

名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

- ・メンバーが授業（2年生100人規模の反転授業）実践で抱いた「学生にいかに良い質問をさせるのか」という問いに対して意見交換を行った。

第2回会合

2024年2月21日（水）10:00～12:00

名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階会議室

- ・経済学の学際研究について意見交換を行った。経済学分野では確立された手法を伴うため interdisciplinary 以上の分野融合が難しいと捉えられるが、数式化の過程で捨象した部分を自然言語で補うアプローチなども話し合われた。その他、学際研究と研究業績との関連、分野融合を進めるための基盤となる認識やアプローチおよびそれらを育てる方法などを具体的な事例を伴い話合った。

4. 成果と課題

今年度の成果は、2回の会合である。今後の課題は、非常に多忙なメンバーの会合をどのように調整開催するのか、そして昨年度来の課題である、近隣大学などを中心にした学外への展開である。活動内容は継続協議事項である。これらを踏まえて、元々の研究会の趣旨である、参加できなかった時は残念に思うような会にしたいというメンバーの希望に沿う活動を企画実施する予定である。

6.5 高大社接続研究会

1. 活動目標

- ・大学入学前から卒業後までの長期的なスパンで学生の成長課題と必要な方策を検討する
- ・入試、高大接続業務の課題に対応するための方策を検討する
- ・入試、高大接続業務に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
- ・キャリア教育、就職支援の課題に対応するための方策を検討する
- ・キャリア教育、就職支援に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
- ・入試、高大接続担当者、キャリア教育、就職支援担当者の連携の可能性を検討する

2. メンバー

- 代表 丸山 和昭 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)
夏目 達也 (名古屋大学名誉教授・桜美林大学教育探究科学群)
永野 拓矢 (名古屋大学教育基盤連携本部アドミッション部門)
齋藤 芳子 (名古屋大学高等教育研究センター)
東岡 達也 (名古屋大学高等教育研究センター)
菊池 美由紀 (愛知淑徳大学キャリアセンター)

3. 本年度の活動内容

会合 2023年4月19日(水) 対面

- ・活動目標の確認
- ・活動内容についての意見交換

会合 2023年5月13日(土) 対面

- ・学生調査及び調査結果報告の方法についての意見交換

会合 2023年6月15日(木) 対面

- ・学会発表についての意見交換

会合 2023年7月26日(水) 対面

- ・調査結果報告についての意見交換

会合 2023年8月28日(火) 対面

- ・論文投稿及びセミナー講師選定についての意見交換

会合 2023年9月20日(水) 対面

- ・論文投稿についての意見交換

会合 2023年11月15日(水) 対面

- ・能力開発プログラムについての意見交換

会合 2024年3月20日(水) 対面

- ・次年度計画についての意見交換

4. 成果と課題

4-1. 今年度の成果

- ・「大学生は中学・高校におけるキャリア教育をどのように評価しているのか」をテーマとした学生調査を実施し、2023年6月24日(土)に愛知教育大学で開催された中部教育学会第71回大会にて発表した(菊池・東岡・丸山)。
- ・「大学生は中学・高校におけるキャリア教育をどのように評価しているのか」を愛知淑徳大学教育論集に投稿し、掲載された(菊池・東岡・丸山)。
- ・「教職課程を担当する教員の専門性に関する探索的研究」として「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」のシラバス分析を行い、2023年6月24日(土)に愛知教育大学で開催された中部教育学会第71回大会にて発表した(東岡・菊池・丸山)。

4-2. 次年度以降の課題

- ・今年度の調査をふまえ、「新学習指導要領の実施に伴う高校生の学びの変化に対して、大学教育・大学教員はどのように向き合っていくべきか」をテーマとしたセミナーを開催する。
- ・大学におけるキャリア教育担当教員とキャリアコンサルタントに対する調査を行い、調査結果を踏まえた研修プログラムを構想する。
- ・その他、活動目標に関わる調査、セミナーの企画を進める。

6.6 大学 IR×DX 研究会

1. 活動目標

- ・大学の IR (Institutional Research) の課題に対応するための方策を検討する
- ・大学の IR に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
- ・大学の DX (Digital Transformation) の課題に対応するための方策を検討する
- ・大学の DX に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
- ・IR と DX のシナジーによって可能となる、大学改革の方策について検討する
- ・IR 担当者と DX 担当者の連携の可能性を検討する

2. メンバー

加藤 真紀 (名古屋大学高等教育研究センター)

鄭 漢模 (三重大学高等教育デザイン・推進機構)

長谷川 暁人 (岐阜大学教育推進・学生支援機構)

松本 みゆき (名古屋大学高等教育研究センター)

代表 丸山 和昭 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

神酒 太郎 (岐阜大学教育推進・学生支援機構)

安田 淳一郎 (名古屋大学高等教育研究センター)

幹事 和嶋 雄一郎 (名古屋大学高等教育研究センター)

3. 本年度の活動実績

1) 会合 2023年6月8日(木) 15:30~16:30 オンライン開催

2) 大学の DX (Digital Transformation) の課題に対応するための方策を検討するための情報収集、セミナー開催

大学の DX 化の課題を整理するために、セミナーを4回開催し、情報収集を行った。大学の DX 化における作業の効率化の可能性に加えて、継続性を担保するための組織化のあり方等の情報収集を行った。また、大学 DX 化で注目されている学修成果の可視化に関して、効果的かつ実践的な方法に関しての情報収集を行った。

4. 成果と課題

セミナー企画 第3回公開セミナー・大学 IR×DX 研究会第1回セミナー「大学教育と AI との関係性－ChatGPT の光と影」講師：和嶋雄一郎 (名古屋大学)、2023

年4月20日。

セミナー企画 「IRer 養成講座」講師：中井俊樹（愛媛大学）・上月翔太（愛媛大学）・坂本規孝（愛媛大学）・竹中喜一（近畿大学）・丸山和昭（名古屋大学）、2023年12月14-15日。

セミナー企画 名古屋大学高等教育研究センター第213回招聘セミナー・大学IR×DX研究会第2回セミナー「持続可能な事務業務のデジタル化－組織で定義するDX－」講師：一丸直人（三重大学）、2024年2月16日。

セミナー企画 名古屋大学高等教育研究センター第214回招聘セミナー・大学IR×DX研究会第3回セミナー「卒業時の学習成果をどのように評価するか－効果的な実践を目指して－」講師：竹中喜一（近畿大学）、2024年2月22日。

6.7 名古屋哲学教育研究会

1. 活動目標

東海地域で哲学を教える教員が、所属大学を越えて日頃の教育実践を共有し、知見を交換する機会を提供する。

2. メンバー

岩田 直也 (名古屋大学大学院人文学研究科)
笠木 雅史 (名古屋大学大学院情報学研究科)
久木田 水生 (名古屋大学大学院情報学研究科)
久保田 祐歌 (関西福祉科学大学社会福祉学部)
鈴木 真 (名古屋大学大学院人文学研究科)
齋藤 芳子 (名古屋大学高等教育研究センター) 事務局担当

3. 本年度の活動実績

1) セミナー企画

哲学は、問いを定式化、ないし先鋭化することに長けた学問であり、その意味において学問体系の根幹をなしてきた。哲学教育を、哲学を専門としない人々に対して行う意義の1つも、ここに求めることができる。他方で、よりよい生き方を求める思索という側面も強く、教養教育としての意義も認められてきたところである。

今回のセミナー企画では、後者の側面をより強く含む、専門職養成における哲学教育に焦点をあてた。2名の講演者から実践事例をご報告いただき、それをもとに授業設計やカリキュラムについて議論をすることができた。

名古屋哲学教育研究会セミナー・名古屋大学高等教育研究センター 第209回招聘セミナー

「専門職養成における哲学教育の実践」

日 時：2023年10月27日(金) 15:00-17:00

場 所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

講演者：久保田 祐歌(関西福祉科学大学社会福祉学部 教授)

本田 康二郎(金沢医科大学一般教育機構 准教授)

2) 新規メンバー

課題であったメンバーの補充について、以下3名の協力を得られることとなった。

岩田 直也 (名古屋大学大学院人文学研究科)

笠木 雅史 (名古屋大学大学院情報学研究科)

久保田 祐歌 (関西福祉科学大学社会福祉学部)

4. 次年度計画

次年度のセミナー企画として、哲学教育の手法に着目することを構想中である。

6.8 物理学講義実験研究会

1. 活動目標

理系講義で学生が体験的に学習する機会を作り、理論と実験を関係づける手法の1つとして、講義中の実験（以下、「講義実験」）を導入する方法がある。現在、講義実験の器具開発と活用には、各大学の教員が各自で取り組んでおり、そのノウハウが共有されていない。そこで我々は、学内外の講義実験に関するノウハウを抽出し、各大学の教員間で共有できるネットワークを形成することを目的として活動を行っている。

2. メンバー

代表 三浦 裕一（愛知県立芸術大学 非常勤講師）
伊東 正人（愛知教育大学理科教育講座）
井村 敬一郎（名古屋大学教養教育院）
大藪 進喜（徳島大学教養教育院）
小西 哲郎（中部大学工学部）
齋藤 芳子（名古屋大学高等教育研究センター）
千代 勝実（山形大学学士課程基盤教育院）
中村 泰之（名古屋大学教養教育院）
古澤 彰浩（藤田医科大学医学部）
幹事 安田 淳一郎（名古屋大学高等教育研究センター）

3. 本年度の活動内容

- 1) 新規講義実験の開発・集積
- 2) 既存講義実験の調査と改善

全体会合日：

2023年4月14日、5月13日、6月22日、7月27日、9月15日、11月10日、2024年3月28日。

4. 成果

- 科研費採択 科研費基盤研究(B)「遠隔授業に対応したアクティブラーニング型物理学実験テーマの教育効果測定指標の開発」研究代表者：千代勝実、予算額16,510千円、2023年4月～2027年3月（予定）。
- セミナー企画 名古屋大学高等教育研究センター第4回公開セミナー「分野別教育方法研究(DBER)に基づく学習成果の可視化」講師：安田淳一郎(名古屋大学)、2024年1月18日。
- 学会発表 三浦裕一・齋藤芳子・中村泰之・古澤彰浩・千代勝実・安田淳一郎・伊東正人・小西哲郎・大藪進喜「統計力学の法則を可視化するモデル実験 4－結晶生成と硬さの可視化など」日本物理学会第78回年次大会、2023年9月16日～19日、東北大学。
- 学会発表 三浦裕一・齋藤芳子・安田淳一郎・中村泰之・古澤彰浩・千代勝実・伊東正人・小西哲郎・大藪進喜「慣性力が他の力に変換され見かけ上消失する実験の開発－食塩水中の卵は落下しても割れない－」日本物理学会 2024年春季大会、2024年3月18日～21日、オンライン開催。

6.9 マネジメント人材育成研究会

1. 活動目標

マネジメント人材育成研究会は、大学の職場で求められる教職員のマネジメント力向上を支援するため、人材育成や能力開発の考え方と方法論を体系的にまとめることを目的とする。その際に、現場主体のマネジメント力向上のため、現場の課題を現場の教職員で解決していくアプローチを重視する。

この課題に取り組むため、昨年度までに引き続き「後輩指導の理論と実践」を重点課題とする。経営改善やマネジメントの高度化には、一般職員から係長レベルが対応する複雑化・高度化する業務への対応が求められているためである。これらに少ない職員で取り組むには、現場主体の人材育成が必要であり、潜在的なニーズも高い。また、優れた主任・係長級の育成は、その後の管理職育成にもつながる取組である。後輩指導の知見は、人的資源管理論や成人教育論の領域で蓄積されており、本研究会でもこの領域での研究と実践を目指す。

大学職員を対象とした研修は、各大学が行う財務、総務、教務等の領域別研修や、大学横断的に行う IR、アドミッション、学生支援等の政策課題的研修がある。後者の研修は、自大学で研修を開催できない大学にとっては有用であるが、能力開発に参加する職員を過度に限定したり、研修に積極的な職員が職場で周辺化されるなどの弊害もある。また、経営人材育成の必要性が指摘される中、上位層向けの研修のみに注目が集まっているが、一般職員を対象としたマネジメント研修はあまり議論されてこなかった。本研究会は、この分野に貢献することを目指している。

2. メンバー

大津 正知 (茨城大学)
小山 敬史 (名古屋大学)
齋藤 芳子 (名古屋大学)
坂本 規孝 (愛媛大学) 代表
武谷 信吾 (九州産業大学) *
中島 英博 (立命館大学)
的場 由紀子 (大阪国際学園) *
宮林 常崇 (東京都立大学／公立大学協会)

*新規加入メンバー

3. 本年度の活動内容

会合 2023年6月23日(金) 14:30~15:30

- ・2022年度までの活動の振り返り
- ・講習会の内容と進行の確認
- ・メンバー補充について

講習会 2023年7月7日(金) 15:30~17:30

- ・係長対象の対面ワークショップ(ケーススタディ2件)

報告 2023年7月12日(水)

- ・坂本規孝(2023)「寄稿 7つの指針を提案 マネジメント人材としての係長職」『教育学術新聞』第2931号、日本私立大学協会。

会合 2023年10月12日(木) 15:15~16:45

- ・今後の活動方針についての意見交換
- ・メンバー補充について

報告 2024年3月2日(土)

- ・大学教育改革フォーラム in 東海 2024におけるポスター発表「大学の係長職を支援する取り組みーマネジメント人材育成研究会の活動紹介ー」

報告 2024年3月31日(日) 刊行

- ・大学基準協会『大学職員論叢』(第12号)に活動紹介の論文「一般職員を対象とするマネジメント研修の開発と試行ーマネジメント人材育成研究会の活動ー」を投稿(pp.49-55)

4. 成果と課題

今年度は、当研究会が手がけたハンドブックをもとにした研修を開催することができ、そのなかで新しく開発した2件のケーススタディを活用することができた。また、懸案であった職員メンバーの補充についても、新たに2名の参画を得ることができた。さらに、これまでの活動をまとめて、広く知ってもらったり記録に残したりする活動にも取り組むことができた。

次年度は、研修のテーマを掘り下げ、それに見合ったケーススタディを開発して、実際の研修に適用することをめざしたいと考えている。

7. 研究開発

7.1 学術論文

◎スタッフ

Maki Kato “Careers of faculty with foreign degrees: The attributes and impact on academic ranks in Japan” *International Journal of Educational Development*, 99 (102754) , pp.1-9, May 2023.

Yoshie Kawahito, Hiroyuki Takeda, Yuichiro Wajima, Atsuko Kaga “Research Assessment of Co-creative Aspects with Citizens in Urban Planning Related Fields in the UK” *Proceedings of 2023 International Conference of Asian-Pacific Planning Societies*, pp.1306-1315, August 2023.

古市吉輝・松本みゆき・土田満「不動産業における労働者のワーク・ライフ・バランスに関する研究－JGSS-2017/JGSS-2018 統合データを用いた分析－」『瀬木学園紀要』第 22 号、22-28 頁、2023 年 9 月。

Maki Kato “Japanese Universities’ International Medical Partnerships: Reciprocity and Stratification” *International medical education*, 2(4), pp.239-251, October 2023.

和嶋雄一郎・山本亮・津久井浩太郎「IR の深化フェーズの整理とそれぞれの深化フェーズにおける IR 資源」『第 12 回大学情報・機関調査研究集会論文集』82-87 頁、2023 年 11 月。

勝田仁之・安田淳一郎「初めて物理を学ぶ高校生の pre テスト得点は妥当か－概念指標の 1 次元性の検証－」『物理教育（日本物理教育学会誌）』71 巻 4 号、249-254 頁、2023 年 12 月。

東岡達也・加藤真紀「グローバルな課題解決を導く高等教育と研究・組織の在り方－パネル ディスカッションの記録－」『名古屋高等教育研究』第 24 号、23-36 頁、2024 年 3 月。

和嶋雄一郎「『名古屋高等教育研究』で使用されている単語からみる高等教育研究の変化」『名古屋高等教育研究』第 24 号、37-50 頁、2024 年 3 月。

加藤真紀「大学教員公募における競争－東京都の公立大学教員採用選考を事例として－」『名古屋高等教育研究』第 24 号、181-202 頁、2024 年 3 月。

安部有紀子「米国大学高等教育の学生支援における統合の概念の実態と課題について」『名古屋高等教育研究』第 24 号、357-377 頁、2024 年 3 月。

安部有紀子・蝶慎一「米国学生支援における学習成果の参照基準の変容に関する考察－学生支援アセスメントにおける学習成果の位置付けに着目して－」『大学経営政策研究』第14号、1-17頁、2024年3月。

松本みゆき・金井篤子「海外派遣者の女性配偶者の帰国後のキャリア形成に関する葛藤についての検討」『瀬木学園紀要』第23号、28-34頁、2024年3月。

松本みゆき・高樋さち子「開発途上国における COVID-19 後の初等教育への影響 (I) －バングラデシュ人民共和国における日本の国際教育協力の取り組みについて－」『瀬木学園紀要』第23号、17-50頁、2024年3月。

Lilan Chen, Akari Kikuchi, Yuichiro Wajima, Tatsuo Kawashima “The Perceptions and Experiences of Graduate Students: Evidence From a Japanese National Research University” *IICE2024 Conference Proceedings*, March 2024. URL: <https://papers.iafor.org/submission77371/>

大津正知・坂本規孝・小山敬史・齋藤芳子・宮林常崇・中島英博「一般職員を対象とするマネジメント研修の開発と試行－マネジメント人材育成研究会の活動－」『大学職員論叢』第12号、49-55頁、2024年3月。

齋藤芳子・東岡達也・藤井利紀「研究会方式FD・SDにおける学びと運営－研究会メンバーの語りから－」『大学経営政策研究』第14号、55-71頁、2024年3月。

◎客員

黒田一雄「高等教育の多層的グローバルガバナンスと国際化の理念・理論的検討」『名古屋高等教育研究』第24号、87-107頁、2024年3月。

福井文威「高等教育における奨学金と寄付の循環構造－大学卒業者のマイクロデータからの検証－」『名古屋高等教育研究』第24号、205-221頁、2024年3月。

朴澤泰男「少子社会日本における高等教育へのアクセス－大学進学・選択行動の地域的差異から考える－」『名古屋高等教育研究』第24号、223-242頁、2024年3月。

Jason Cheng-Cheng YANG “Higher Education Internationalization in Taiwan: New Developments in the Context of Geopolitical and Social Changes”, *Nagoya Journal of Higher Education*, Vol.24, pp.243-267, March 2024.

7.2 その他執筆

齋藤芳子「25 回目の春に」『かわらばん』第 82 号、2023 年 4 月。

加藤真紀「温故知新－これからの大学教育を語りませんか」『かわらばん』第 83 号、2023 年 7 月。

上西浩司・大津正知・小野勝士・齋藤芳子・辰巳早苗・長尾義則・中井俊樹・水谷早人・宮林常崇・村瀬隆彦著、中井俊樹・宮林常崇編『教務の Q&A 第 2 版』、玉川大学出版部、2023 年 8 月。

和嶋雄一郎「生成系 AI と教育」『かわらばん』第 84 号、2023 年 10 月。

安部有紀子「多様な学生を授業に受け入れるために－大学教員準備講座（認定プログラム）の開始に寄せて－」『かわらばん』第 85 号、2024 年 1 月。

7.3 講演発表

近田政博・加藤真紀・栗田佳代子・佐藤浩章・根岸千悠「プレ FD 再検証－研究大学の教育系センターにおける運営上の課題と試行錯誤」大学教育学会第 45 回大会、大阪大学（ハイブリッド方式）、2023 年 6 月 3 日。

安部有紀子・日暮トモ子・蝶慎一「コロナ禍における学寮プログラムの挑戦からの示唆－国際比較の視点から－」大学教育学会第 45 回大会、大阪大学（ハイブリッド方式）、2023 年 6 月 3 日。

安部有紀子・蝶慎一「事例から見る米国学寮プログラムの実態と教育的意義－LLC (Living Learning Communities) における統合の概念に着目して」日本高等教育学会第 26 回大会、千葉大学（ハイブリッド方式）、2023 年 6 月 10 日。

陳麗蘭・矢田尚也・川嶋太津夫・和嶋雄一郎「国際学生調査から見えたコロナ禍における大学院生の経験－X 国立大学の事例」日本高等教育学会第 26 回大会、千葉大学（ハイブリッド方式）、2023 年 6 月 10 日。

Lilan Chen, Naoya Yada, Yuichiro Wajima, Tatsuo Kawashima “ The COVID-19 pandemic and graduate students’ experiences in Japan: Evidence of a case national university” HERA 2023 Conference, Hiroshima University, June 13-14, 2023.

東岡達也・菊池美由紀・丸山和昭「教職課程を担当する教員の専門性に関する探索的研究－『教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想』の科目担当者に注目して－」中部教育学会第 71 回大会、愛知教育大学、2023 年 6 月 24 日。

菊池美由紀・東岡達也・丸山和昭「大学生は中学・高校におけるキャリア教育をどのように評価しているのか－中等教育におけるキャリア教育、進路指導、特別活動の経験に注目して－」中部教育学会第 71 回大会、愛知教育大学、2023 年 6 月 24 日。

Yoshie Kawahito, Hiroyuki Takeda, Yuichiro Wajima, Atsuko Kaga “ Research Assessment of Co-creative Aspects with Citizens in Urban Planning-related Fields in the United Kingdom” International Conference of Asian-Pacific Planning Societies 2023, Vietnam Danang University of Architecture, 会場 (Danang, Vietnam), August 18, 2023.

三浦裕一・齋藤芳子・中村泰之・古澤彰浩・千代勝実・安田淳一郎・伊東正人・小西哲郎・大藪進喜「統計力学の法則を可視化するモデル実験 4－結晶生成と硬さの可視化など」日本物理学会第 78 回年次大会、東北大学、2023 年 9 月 17 日。

望月麻友美・和嶋雄一郎「国際的活動やグローバル化を大学は把握できているのか？－国際 IR という提案－」研究・イノベーション学会第 38 回年次学術大会、オンライン、2023 年 10 月 29 日。

竹永啓悟「大学院における学際的教育プログラムにおける学習成果に関する事例研究－人文・社会科学系学生の語りから－」大学教育学会 2023 年度課題研究集会、北陸大学（ハイブリッド方式）、2023 年 11 月 11 日。

和嶋雄一郎・山本亮・津久井浩太郎「IR の深化フェーズの整理とそれぞれの深化フェーズにおける IR 資源」MJIR2023 第 12 回 大学情報・機関調査研究集会、神田外語大学（ハイブリッド方式）、2023 年 11 月 17 日。

齋藤芳子「研究公正教育に学生はなにを思うのか－名古屋大学における経験から」第 51 回 RIHE 研究員集会、広島大学（ハイブリッド方式）、2023 年 11 月 17 日。

和嶋雄一郎「大学業務と AI 高等教育機関職員は生成系 AI をどう活用する？」第 13 期 JMA 大学 SD フォーラム、オンライン、2023 年 11 月 29 日。

齋藤芳子「昆虫学分野におけるアマチュアと職業的研究者の協働」科学技術社会論学会第 22 回年次大会、大阪大学、2023 年 12 月 9 日。

Maki Kato, “International Medical Student Exchange of Japanese Universities: Reciprocity and Stratification” 22th Hawaii International Conference on Education, 会場 (Hawaii, USA), January 6, 2024.

和嶋雄一郎「分科会 1『教学 IR』教学 IR 入門－データを使った教育状況把握・活用を体験してみよう－」大学教育改革フォーラム in 東海 2024、名古屋大学、2024 年 3 月 2 日。

坂本規孝・大津正知・小山敬史・齋藤芳子・武谷信吾・中島英博・的場由紀子・宮林常崇「大学の係長職を支援する取り組み－マネジメント人材育成研究会の活動紹介－」大学教育改革フォーラム in 東海 2024 [ポスターセッション]、名古屋大学、2024 年 3 月 2 日。

竹永啓悟「ラボ・ローテーションの教育可能性－OIST の研究ユニット制度を手がかりに－」大学教育改革フォーラム in 東海 2024 [高等教育ライジングリサーチフォーラム]、名古屋大学、2024 年 3 月 2 日。

東岡達也「高等教育研究における制度ロジック分析の動向と課題」大学教育改革フォーラム in 東海 2024 [高等教育ライジングリサーチフォーラム]、名古屋大学、2024 年 3 月 2 日。

和嶋雄一郎「自分のために使う教学 IR」嘉悦大学・北陸大学シンポジウム 2023、嘉悦大学（ハイブリッド方式）、2024 年 3 月 7 日。

Maki Kato, "International partnerships of Japanese universities: Reciprocity and stratification of studying abroad" CIES (Comparative and International Education Society) 2024, 会場 (Miami, USA), March 11, 2024.

安田淳一郎・前直弘・Michael M. Hull「デジタル画像実験 (Interaktive Bildschirmexperimente) の現状と今後の可能性ーベルリン自由大学への訪問調査報告ー」日本物理学会 2024 年春季大会、オンライン、2024 年 3 月 19 日。

三浦裕一・齋藤芳子・安田淳一郎・中村泰之・古澤彰浩・千代勝実・伊東正人・小西哲郎・大藪進喜「慣性力が他の力に変換され見かけ上消失する実験の開発ー食塩水中の卵は落下しても割れないー」日本物理学会 2024 年春季大会、オンライン、2023 年 3 月 20 日。

7.4 国際交流

◎機関訪問

[安部有紀子]

2024年2月10日(土)～17日(土)

メリーランド大学、ジョージワシントン大学(アメリカ)

[安田淳一郎]

2023年11月25日(土)～12月2日(土)

ベルリン自由大学(ドイツ)

[松本みゆき]

2023年9月28日(木)～10月6日(金)

ダッカ大学、JICA バングラデシュ事務所、ダッカ日本人学校、シャプラニールダッカ事務所、UNESCO ダッカ、FAO バングラデシュ(バングラデシュ)

2023年11月24日(金)～30日(木)

ダッカ大学、JICA バングラデシュ事務所、FAO バングラデシュ、JETRO ダッカ事務所(バングラデシュ)

◎参加国際会議

[加藤真紀]

2024年1月3日(水)～7日(日)

22th Hawaii International Conference on Education(アメリカ)

2024年3月10日(日)～14日(木)

Comparative and International Education Society 2024(アメリカ)

◎セミナー開催

[加藤真紀・安部有紀子・齋藤芳子]

2023年6月25日(日)

東アジア中等・高等教育研究フォーラム in 名古屋(日本)

©研究協定

[加藤真紀]

2023年10月～2025年10月

Data use agreement (データ使用協定) [ハーバード大学 COACHE 担当部署]

8. 研究プロジェクト

◎センター教員が研究代表者であるもの

種別	研究代表者	研究課題名
科研費 基盤研究 (C)	加藤真紀	外国学位を有する日本人大学教員のキャリア：留学と帰国の選択
科研費 基盤研究 (C)	安部有紀子	学生の学習を促進する質保証を基盤とした学生支援プログラムの開発
科研費 基盤研究 (B)	安部有紀子	日本の高等教育における学寮の教育的展開と質保証を基盤としたプログラム開発
科研費 挑戦的研究(萌芽)	安田淳一郎	デジタル画像実験を用いた物理学実験で習得する思考力の評価法の開発
科研費 基盤研究 (B)	安田淳一郎	個々人の力学概念理解度の進展を捉える連鎖的コンピュータ適応型テストの開発
科研費 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	松本みゆき	バングラデシュの日本型教育学術基盤の構築:持続可能なインクルーシブ教育と衛生教育
科研費 基盤研究 (C)	齋藤芳子	科学への市民参画の諸相－職業的科学者との協働と分業の実態と課題－
科研費 研究活動スタート支援	竹永啓悟	大学院の学際的教育プログラムの質保証－人文・社会科学系の学生の観点から－

◎センター教員が研究分担者として参画したもの

教員名	種別	研究課題名	研究代表者名(所属)
安部有紀子	科研費 基盤研究 (A)	社会的能力の特定化とその育成適正期および教育効果の検証	松繁寿和 (大阪大学教授)
安田淳一郎	科研費 基盤研究 (B)	遠隔授業に対応したアクティブラーニング型物理学実験テーマの教育効果測定指標の開発	千代勝実 (山形大学教授)
安田淳一郎	科研費 挑戦的研究(開拓)	高度デジタル技術を用いた新たな理数系評価問題の開発：科学的思考力の育成に向けて	安野史子 (国立教育政策研究所 統括研究官)
安田淳一郎	科研費 基盤研究 (B)	概念形成過程の実践的研究と一体化した物理概念調査紙群の開発	新田英雄 (東京学芸大学 名誉教授)

松本みゆき	科研費 基盤研究 (C)	インドにおける「衛生安全な新しい日本型学級経営モデル」の開発	石川美智子 (名古屋産業大学教授)
和嶋雄一郎	科研費 基盤研究 (C)	国際 IR 開発と大学における国際活動の再定義	望月麻友美 (大阪大学准教授)
和嶋雄一郎	科研費 基盤研究 (C)	研究大学における学生の教育・研究活動の包括的分析	廣森聡仁 (大阪大学准教授)
和嶋雄一郎	科研費 基盤研究 (B)	AI を活用した教学 IR の自動化の実装と可能性の検証	川嶋太津夫 (大阪大学特任教授)
和嶋雄一郎	科研費 挑戦的研究(萌芽)	研究活動の駆動を目指した大学院生の生態系に関する調査研究	村上正行 (大阪大学教授)
和嶋雄一郎	科研費 基盤研究 (A)	社会的能力の特定化とその育成適正期および教育効果の検証	松繁寿和 (大阪大学教授)
齋藤芳子	科研費 挑戦的研究(萌芽)	「社会変革型」科学技術イノベーション政策時代の大学院教育	両角亜希子 (東京大学教授)
齋藤芳子	科研費 基盤研究 (B)	遠隔授業に対応したアクティブラーニング型物理学実験テーマの教育効果測定指標の開発	千代勝実 (山形大学教授)

◎その他

教員名	種別	研究課題名	研究代表者名 (所属)
加藤真紀	学術コンサルティング	「博士エコシステム」の提言に向けた指導	加藤真紀 (名古屋大学教授)
和嶋雄一郎	寄附金	研究助成	和嶋雄一郎 (名古屋大学特任准教授)
和嶋雄一郎	共同研究	Data Brainstorming：データ可視化ツールを活用したアイデア生成手法の構築	和嶋雄一郎 (名古屋大学特任准教授)

9. 受賞・メディア取材など

◎受賞

高等教育ライジングリサーチフォーラム（大学教育改革フォーラム in 東海 2024）

オーディエンス賞

東岡達也

「高等教育研究における制度ロジック分析の動向と課題」の発表に対して

2024年3月

Appendix 拠点外令和5年度活動実績

A.1 教育

A.1.1 正課

[兼任]

教育発達科学研究科高等教育学講座	加藤真紀
教育発達科学研究科高等教育学講座	安部有紀子
教育発達科学研究科高等教育学講座	安田淳一郎

[授業担当]

○教養教育院全学教育科目

基礎セミナー	安部有紀子
高等教育学	加藤真紀
同上	安部有紀子
同上	齋藤芳子
名古屋大学の歴史：2単位15回のうち1回を担当	齋藤芳子

○大学院教育発達科学研究科

高等教育学研究Ⅰ〔大学教員準備講座〕	加藤真紀
同上	安部有紀子
同上	齋藤芳子
大学授業の設計と実践〔大学教員準備講座〕	安部有紀子
大学授業の開発と改善〔大学教員準備講座〕	安部有紀子
同上（授業補助）	加藤真紀
同上（授業補助）	齋藤芳子
同上（授業補助）	安田淳一郎
高等教育学研究Ⅰ 高等教育経営論－高等教育と国際社会－	加藤真紀
高等教育学研究Ⅰ 高等教育経営論－学生支援研究－	安部有紀子
高等教育学研究Ⅱ 高等教育経営論－大学教育マネジメント研究－	安部有紀子

○大学院生命農学研究科

研究リテラシー：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当

齋藤芳子

Research Literacy：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当（英語）

齋藤芳子

○大学院情報学研究科

情報学特論 I：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当

齋藤芳子

○教養教育院大学院共通科目

大学教員論（教育発達科学研究科「高等教育学研究 I」を提供）

加藤真紀

同上

安部有紀子

同上

齋藤芳子

大学授業の設計と実践

安部有紀子

大学授業の開発と改善

安部有紀子

同上（授業補助）

加藤真紀

同上（授業補助）

安田淳一郎

同上（授業補助）

齋藤芳子

プロフェッショナル・リテラシー：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当

和嶋雄一郎

プロフェッショナル・リテラシー：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当

齋藤芳子

Professional Literacy：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当（英語）

齋藤芳子

A.1.2 名古屋大学学生論文コンテストの企画運営

本学の学部1～3年次生の学習研究意欲を喚起し、アカデミックライティングを経験してもらう場として、学生論文コンテストを毎年開催しています。初年次教育である基礎セミナーと連携するなど、教員のアカデミックライティング指導への支援を含んでいます。このような取り組みの現状や効果を他大学と共有できるよう、情報を公開しています。

・応募要項

論文内容：応募論文においてとりあげるテーマ／問いを明確に記述したうえで、文献等を活用して論じてください。内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるよう記述してください。

応募期間：2024年1月11日（木）

応募資格：名古屋大学に在学する学部1～3年生

応募規定：

- ・応募論文は、単著、未発表かつ日本語で書いたものに限りします。
- ・審査対象論文は1人1編のみとします。
- ・次項「応募方法」に掲載されている書式に従って作成し提出してください。

応募方法：

1. 書式に従って論文を作成してください。
2. 論文本編ファイルをPDFに変換したうえで、ファイル名を応募者氏名にし、応募フォームから期日内に提出してください。

審査：本学教員による

表彰：数名に賞状及び協賛機関からの副賞を授与

結果発表：

- ・2024年2月
- ・発表に際し、入賞者の所属学科および氏名を公表いたします。
- ・入賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載いたします。

その他：

- ・論文の書き方に関する各種文献を中央図書館2階 Sky Learning Studio および高等教育研究センター（東山キャンパス文系総合館5階）にて閲覧できます。
- ・中央図書館2階サポートデスクでは、大学院生スタッフからレポートの書き方の相談を受けられます。

主催：名古屋大学高等教育研究センター、教養教育院

共催：名古屋大学附属図書館

協賛：コクヨマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合

・ウェブサイト

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/student/contest/>

・実施スケジュール

2023年10月10日	チラシ、TACTによる広報開始
2024年1月11日	応募締切（4件）
2024年1月29日	高等教育研究センター教員による予備審査
2024年2月21日	本審査（審査員：藤巻朗理事、納谷信教養教育院長、 佐久間淳一附属図書館長、北栄輔高等教育研究センター長）
2024年3月14日	表彰式

・選考結果

【佳作】

名古屋大学での空き時間における低年次学生の居場所の実態と理想	文学部1年 藤井和奏
総合型地域スポーツクラブの活動の柔軟性と機能についての研究	文学部3年 堀聡音
社会の繋がりとしての化粧役割－働く女性の化粧規範に着目して－	文学部2年 山元隆雅
日本におけるクマと人間の関わり	文学部2年 日下部亜虹

・表彰式



A.2 学内研修の企画運営

A.2.1 東海国立大学機構新任教員研修プログラム

東海国立大学機構の教員としての各種職務の遂行に必要な基本情報を得たり、授業で困ったときや改善したいときに参考になる情報を提供する目的で行っています。

日 時：2023年4月7日（金）13:15～16:00

実施方法：ハイブリッド

対面会場：野依記念学术交流館

対 象 者：2022年4月2日～2023年4月1日迄に名古屋大学に着任した教員
（週38時間45分勤務する研究員を含む）

主 催：東海国立大学機構

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル、名古屋大学高等教育研究センター

目 標：1_機構・大学教員としての各種職務の遂行に必要な基本情報を得る
2_授業で困ったときや改善したいときに参考となる情報を得る
3_教員間のネットワークをつくる

プログラム：

13:15 オリエンテーション

13:30 ウェルカムセッション

松尾 清一（機構長）

藤巻 朗（機構長補佐）

杉山 直（名古屋大学総長）

14:30 ワークショップ

白村 直也（岐阜大学教育推進・学生支援機構 准教授）

丸山 和昭（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授）

安部 有紀子（名古屋大学高等教育研究センター 准教授）

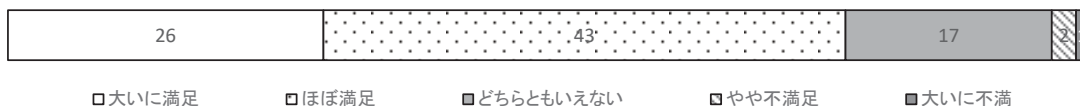
15:30 ポスターセッション

▷アンケート結果

(参加者：158人 [対面76名、オンライン82名 (岐人阜大学33名・名古屋大学49名)])

アンケート回答者：89人 (岐阜大学21名・名古屋大学68名)

Q1. 本日の新任教員研修は満足のものでしたか。(単位：人)

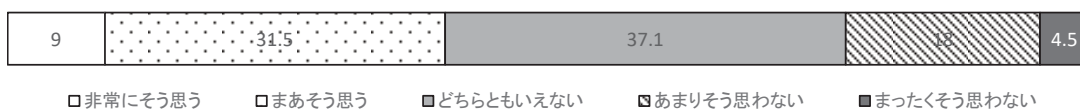


Q2. 今後の新任教員研修内容のあり方として、以下の点についてどのようにお考えですか。(単位：%)

1. 研修の機会を増やしてほしい。



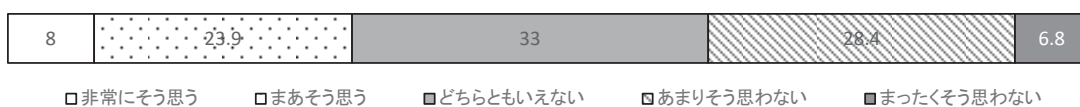
2. 各項目についてもっと詳しい説明がほしい



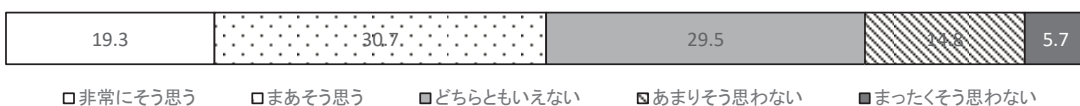
3. 質疑応答の時間を長く設けてほしい



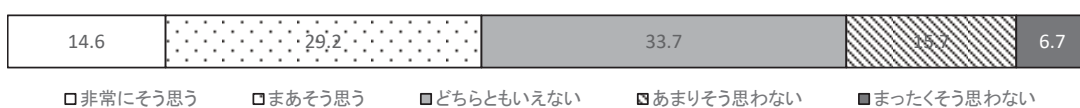
4. もっと資料を増やしてほしい



5. 出席者同士の交流の場をより長くしてほしい



6. 大学執行部との交流の場がほしい

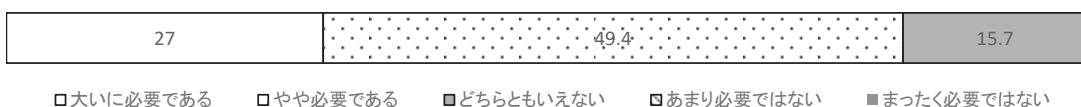


Q3. 名大の教員として勤務する上で、赴任時に必要な情報はどのようなものとお考えですか。（単位：％）

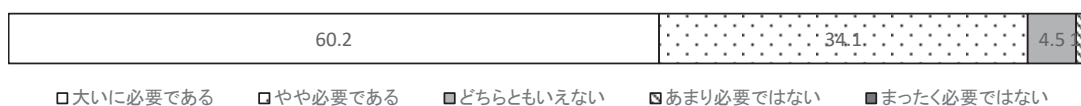
1. 大学運営の基本方針・施策



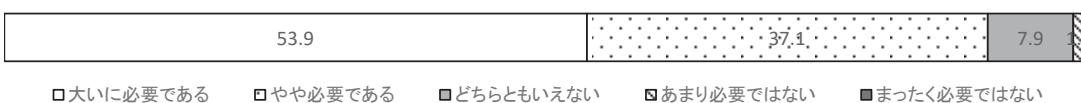
2. 教員の服務規程



3. 研究支援体制



4. 教員の教育活動の支援体制



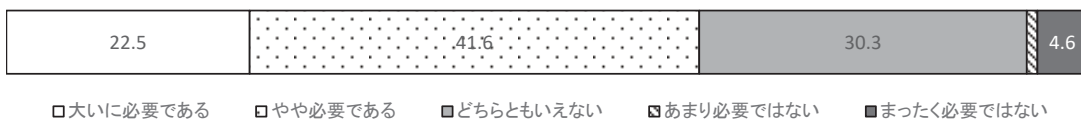
5. 情報関連の支援体制



6. 学生支援の体制



7. 学内の各種文化活動



8. 学内の教員向け各種サービス



自由記述

- ・グループワークを行う際に、短時間で目標を達成するにはファシリテートできるスタッフが一緒に入るとより有意義であったかと思いました。
- ・対面で参加してよかったです。面白そうなことをやっている教員とお話することができました。
- ・同じ立場でも異なる新任教員が集まって話し合えたのは、非常に新鮮でした。ただ、会場の音が響いて、ワークショップ時の声が聞き取りづらく、もう少し聞き取りやすい会場だとよかったです。
- ・普段は接さない他部署の方とのワークショップが思った以上に面白かったです。全体共有の時間はなかったが、プレッシャーがない分、より自由に議論を深められたように感じました。
- ・機構長・学長のお話、思いを直接お聞きできてよかったです。
- ・オンラインによる事前視聴と、当日とでうまく役割を分担されており、研修などでよくありがちな、話が長すぎて疲れてしまうなどの事も無かったです。
- ・想像していたよりも内容が深く有意義なものでした。
- ・どうしても時間が経つにつれて意識が薄れてくるので、もう一度（半年後くらいに）再度研修の機会を設けて復習できるタイミングを設けていただけると嬉しいです。

A.2.2 学内向け研修

◎実施したセミナー

○「シラバスの書き方セミナー」

講 師：安部 有紀子（QTA・GSI トレーニングセンター／高等教育研究センター 准教授）

日 時：2023年12月7日（木）13:00～15:00

開催方法：Zoom ミーティング

定 員：10名

対 象 者：岐阜大学と名古屋大学の教職員・ポスドク・大学での授業実施に関心がある大学院生

主 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル QTA・GSI トレーニングセンター
／名古屋大学高等教育研究センター

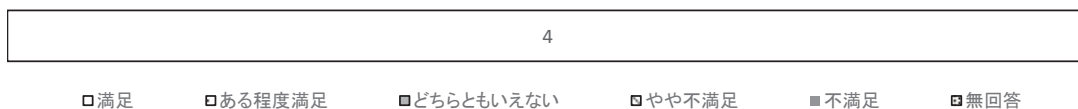
概 要：シラバスとは何でしょうか？シラバスは授業の設計図であり、学生の学習が始まる出発点です。十分に設計された良いシラバスは、学生の主体的な学びを促すツールになります。本セミナーでは、授業経験の浅い教員や大学院生を対象に、シラバスの作成ワークを中心に、学生の自学自習を促すためのシラバス作成方法を身につけていきます。ぜひ自信を持って新しいシラバスで授業をスタートしましょう。

https://ac.thers.ac.jp/qgc/news/2023-11-07_01-10-02/

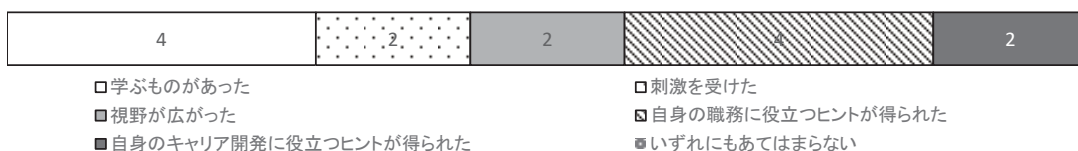
▷アンケート結果（参加者：4名 アンケート回答者：4名）

セミナーの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・全ての内容は興味深く、面白かったです。特に印象に残ったのは、「バックワードデザイン」と「学生との関係を築くためのシラバス」でした。改めていいシラバスの大切さを理解できるようになりました。
- ・特に、他の方のシラバスを見ることで、自身のシラバスの書き方を振りかえる機会になりました。
- ・あらゆることが印象的でした。1時間40分がこんなに短く感じたことはありませんでした。
- ・キャリア教育の講義はいつか担当したいと考えているので、それを視野にシラバス例を作成して参加しました。講義を作るのは大変ですが、今回教えていただいた授業設計の考え方をもとにシラバスを作成すると、講義をどう作ればよいのかも考えやすくなると感じました。
- ・具体的なシラバスの作り方を勉強して、よりよい授業内容や設計できるようになってきたので、大変参考になりました。今後授業の中で、本日の内容も自分の学生に伝えたいです。
- ・先生のお話が非常にわかりやすく、明快でした。教育手法、教育論について全く知らない私でも、理解しやすく、丁寧に解説くださいました。
- ・学生にとってわかりやすく正確な情報を伝えられるシラバスづくりをしていきたいと思います。

○第5回スキルアップセミナー

「ZOOMを用いたグループワークの運営方法」

講師：権藤 千恵

（大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター 特任助教）

日時：2023年12月14日（木）13:00～14:30

開催方法：Zoom ミーティング

定 員：30 名

対 象 者：名古屋大学と岐阜大学の大学院生・学部生・教職員

主 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル QTA・GSI トレーニングセンター／名古屋大学高等教育研究センター

概 要：スキルアップセミナーは、QTA・GSI をはじめとした授業支援に携わる大学院生や学部生（TA や SA 等）や、大学教員を対象に、受講生の主体的な学びを促進するための授業の進め方や、ツール活用のスキルを身につけることを目的に開催します。

今回は、IT ツールを活用することで、オンライン授業やワークショップにアクティブ・ラーニング（グループ別の議論やワーク）を積極的に取り入れていくための基本的な操作方法や運営方法についての理解を深めることを目指します。具体的には、Web 会議サービス Zoom のブレイクアウトルーム・ホワイトボード・タイマー機能等を使ったグループワークの基礎的なノウハウについて、実際に体験しながら学びます。

学習目標

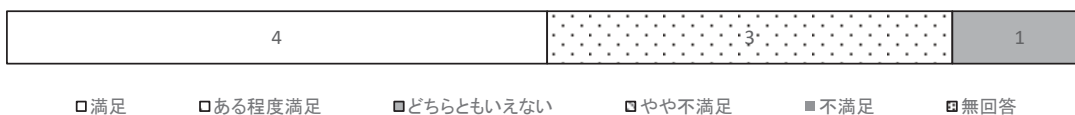
- ・Zoom のブレイクアウトルーム・ホワイトボードを用いた授業（グループワーク）の運営手順について理解する
- ・Zoom のブレイクアウトルーム・ホワイトボード・タイマーが操作できるようになる
- ・授業をオンライン環境でマネジメントする際に必要となるスキルについて知る

https://ac.thers.ac.jp/qgc/news/2023-11-07_01-46-24/

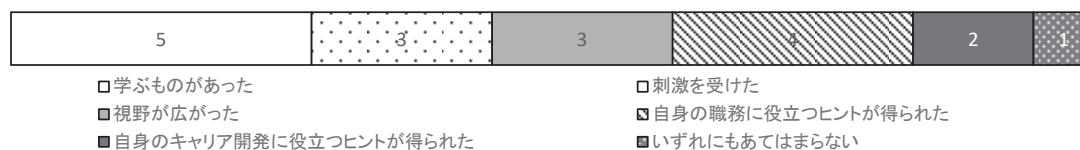
▷アンケート結果（参加者：11 名 アンケート回答者：8 名）

セミナーの内容について（単位：人）

(1) 満足度はいかがでしたか。



(2) 本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

- ・プログラム立案の幅が広がると感じました。
- ・オンラインでもどんどんグループワークを取り入れるとともに、学生にもオンラインでも活発な議論ができるよう支援していきたいと思いました。

○名古屋大学スーパーグローバル大学創成支援事業 FD セミナー

「英語『で』教える」

講 師：Michelle Evans (英国 リーズ大学言語センター 副センター長)

Mick Parkin (英国 リーズ大学言語センター 副センター長)

日 時：2024年2月20日(火)、21日(水) 9:30~17:00

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

定 員：各回 30名

対 象 者：英語による授業に関心を持つ本機構教職員

参加資格：CEFR B2以上

使用言語：英語

主 催：名古屋大学スーパーグローバル大学創成支援事業

共 催：東海国立大学機構アカデミック・セントラル

企画運営：名古屋大学高等教育研究センター

概 要：本セミナーは、英語を教授言語として授業をしている教員、およびこれから担当する教員を対象に、英語で授業をする際、専門分野を問わず広く活用できる効果的な教授法を紹介します。参加者は、少人数制や英語で行う授業での授業設計の工夫、ならびに授業で英語を使用することによる利点を学ぶことができます。

1日目は大学での教育経験が浅い方向けの内容です。

2日目は大学での教育経験が一定程度ある方向けの内容です。

両日とも参加者による短い模擬授業もしくは口頭発表を行います。セミナー終了後も8週間以内であれば送った動画に詳細なフィードバックを提供します。

参加者は、希望するセッションを自由に選んで参加できます。

プログラム：

2月20日(火)

▷セッション1：英語による授業への導入

英語で授業を行う際の一般的な留意点や、学生の学習を促すための技法について紹介します。

▷セッション2：明快な説明をする技法

英語での講義を明快なものにするために必要な、言葉の使い方、内容の構成方法、ボディランゲージの使い方、視覚教材の使い方を紹介します。

▷セッション3：授業に学生参加を取り入れる

学生との双方向のやり取りを授業の中に取り入れた授業の実施計画を実際に作成してみます。

▷セッション4：模擬授業

参加者の専門分野に関する短時間の模擬授業を行い、相互フィードバックを行います。

▷セッション5：学生評価とフィードバック

学習評価の基礎と英語で学生へのフィードバックを行う技法について紹介します。

2月21日（水）

▷セッション6：多人数授業とICTの活用

多人数の授業において、ICTの活用によって学生との双方向のやり取りを取り入れる技法を紹介します。

▷セッション7：少人数授業と発問の活用

少人数授業や研究指導を行う教員向けに、学生参加の技法や質疑応答を行うための技法を紹介します。

▷セッション8：理解しやすい説明のための英語

学習内容の構造を理解しやすいよう、話の展開や接続を効果的に行う英語技法を扱います。

▷セッション9：研究ショートトーク

参加者の研究内容について、非専門家に向けて短時間で紹介し、相互フィードバックを行います。

▷セッション10：多文化コミュニケーション

英語による授業で留意すべき文化的側面について紹介します。特に、知識獲得に対する態度、ネイティブ話者の考え方、自民族中心の教材の問題などを紹介します。

参加者：4名

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/36/>

A.2.3 大学教員準備講座

名古屋大学高等教育研究センターでは、2010年度より大学教員を目指す大学院生を対象にした2単位1科目の授業を開講してきました。2023年度からは、講座の内容を拡充し、

体系的に構成した3科目4単位の認定プログラムとしてスタートしました。各科目を修了するごとに修了証が授与され、3つの科目すべてを修了すると「大学教員準備講座修了証」が授与されます。

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/student/program/>

A.2.4 名古屋大学教員のためのメンタリングプログラム

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものです。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムです。ジェンダーダイバーシティセンターと協力してプログラムを運営しています。

・主な活動内容・成果

- 1) 新任教員研修において教員メンタープログラムを広報し、希望者にメンター教員を紹介
- 2) パンフレットおよびホームページを通して広報し、希望者にメンター教員を紹介
- 3) ジェンダーダイバーシティセンターメンターワーキンググループにメンバーとして参加し、希望者とメンターのマッチングを実施

◎過去3年にメンター制度を利用した新任教員（メンティー）へのアンケート結果
回答9名／対象16名（うち1名は転出済みのためアンケート送付できず）

1. あなたにとっての教員メンタープログラムの経験を5段階で評価してください。

・満足／よかった	5
・どちらかといえば満足／よかった	3
・どちらとも言えない	1
・どちらかといえば不満／よくなかった	0
・不満／よくなかった	0

2. これまでに何回ぐらい面談がありましたか？

・0~1回	2
・2~3回	3
・4~9回	3
・10回~	1

3. 面談を今後も続ける予定ですか。

- ・ はい 6
- ・ わからない 2
- ・ すでに終了している 1

4. 教員メンタープログラムに参加してよかった点を記してください。（抜粋）

- ・ 最初からとても話しやすい方でした。また、カウンセリングが専門の先生であるため、学生たちとの関わり方についても他ではいただけない理論と実践に裏付けられたアドバイスをいただいております。
- ・ メンター教員との交流を通じて学内外の人間関係が広がり、精神的にサポートいただけました。
- ・ 話し相手がいること。
- ・ 教員の経験が浅いので、ベテランの教員と相談することにより、大学教員の仕事について、理解が深まった。また、自分が外国人なので、日本人教員として当たり前なことが理解できないことがあり、これらの理解できない点について、自分の研究科に相談できる相手がないので、メンタープログラムがあって、大変助かった。
- ・ メンターの先生は気軽に素朴な疑問を質問できる存在であり、気持ちの上でも支えられています。
- ・ 経験者から直接お話を伺えたこと。身近に研究相談ができたこと。
- ・ メンターの先生も色々と悩みながら仕事と家庭のバランスを模索されてきたことを知り、悩んでいるのは自分だけではないこと、自分らしいバランスを考えていけばよいことを実感し、気持ちが軽くなりました。
- ・ 今後のキャリアを見据えて今やっておくべきことが明確化されました。

5. メンターとの活動において困ったことや苦勞したことを記してください。（抜粋）

- ・ 特になし。メンターの職場が遠いのは大変だったが、良い運動になりますしプラスに捉えています。
- ・ メンター担当教員が大変にお忙しい方で、なかなか連絡がとれず、会うことも難しい状況は現在も続いています。
- ・ どのタイミングで会えばいいのか、こちらからお誘いしていいのか迷った。
- ・ 一度お話しさせていただいた後、自分も業務で忙しくなり、お会いすることが難しくなりました。それもまだ自分の時間の使い方がうまくいっていないことの現れだと思いますが。しかし一度だけでも、とても貴重な体験でした。

6. 教員メンタープログラムの改善に関するご意見やご要望があれば記してください。（抜粋）

- ・ 月一位でお会いできると個人的には嬉しかった。

- ・10月採用の先生方はこのような制度があることを知らないようですので、もう少し宣伝したほうがよいかもしれません。私は4月の新任教員研修で知りましたが、そもそもあの研修には参加しない可能性がありました。新任教員の交通手当では6月まで出ませんので、結果的にZoomで研修に参加しましたが、途中で運営側のトラブルがあり、一部参加出来ていないアクティビティがありました。よって、私もメンター制度の部分はたまたま見られたため知っていたという具合です。宣伝はもれなくした方がよいと思います。
- ・メンター教員やメンティ教員の状況によると思いますが、プログラムの開始当初は月1回等、面談の頻度のある程度設定し、メンター教員主導で面談を設定する方が良いように思いました。大変にお忙しいメンター教員に面談時間をいただくことに気を遣ってしまい、なかなか相談できない状況がありましたので。
- ・メンタープログラムに関係がないかもしれませんが、外国人教員のNetwork（Slack GroupやMLなど）があればと良いかと思います。

◎過去3年にメンタープログラムにおいてメンターを務めた教員へのアンケート結果

回答6名／対象15名（うち1名は2人のメンティを担当）

1. あなたにとっての教員メンタープログラムの経験を5段階で評価してください。

- ・満足／よかった 2
- ・どちらかといえば満足／よかった 2
- ・どちらとも言えない 2
- ・どちらかといえば不満／よくなかった 0
- ・不満／よくなかった 0

2. これまでに何回ぐらい面談がありましたか？

- ・0~1回 2
- ・2~3回 0
- ・4~9回 3
- ・10回~ 1

3. 面談を今後も続ける予定ですか。

- ・はい 2
- ・わからない 2
- ・すでに終了している 2

4. 教員メンタープログラムに参加してよかった点を記してください。（抜粋）

- ・自分自身は初めて授業を持った時の緊張や周囲の先生とのやりとりに悩んだことは、思い出したくない黒歴史だったが、今回メンティに話をするために久しぶりにふりかえり、自分の中では「思い出」になっていることがわかり、それが一番よかった。
- ・多少なりとも役に立てたとすれば、よかったです。
- ・若手教員やポストクの悩みが聞けるのでよい機会だと思っている。
- ・他分野の仕事や研究課題について知ることができた。
- ・メンティといろいろお話しできたのはよかったと思います。

5. メンターとの活動において困ったことや苦労したことを記してください。（抜粋）

- ・ないです。別のキャンパスにいらっしゃるので、業務上で触れ合うことがないことや気軽にランチに誘ったりできないことくらいでしょうか。
- ・初回コンタクトがどのようにされるのかがわからない。
- ・自分の対応が誤った方向に導くものではないか自信がもてないところもあった。

6. 教員メンタープログラムの改善に関するご意見やご要望があれば記してください。（抜粋）

- ・とてもよいサービスだと思う。件数が少なくても継続して行くべき制度だと思います。個別が苦手な方もいると思いますので、個別のメンタープログラムと同時並行で、グループで集うようなイベントがあると良いように思います。
- ・特にはありませんが、評価シート？みたいなものを提出するのはちょっといやだなと思いました。そういうものからはフリーな活動だと思いますので。

- ・ウェブサイト

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/portal/mentor/>

A.2.5 名古屋大学教員のための教育研修プログラム

社会に有為な学生を育てること、そのために質の高い教育を行うことは、どの研究科・学部においても重要であり、関心が高まっています。

高等教育研究センターでは、順次新たな研修プログラムを開発し、学内のみなさまのご要望にお応えできるよう努めています。各部局の教育力を高めるために、ぜひこのプログラムをご活用ください。

- ・この研修プログラムのねらい
各学部・研究科の教育力を高めることをめざします。
- ・授業改善に必要な基礎的な知識やノウハウを提供します
- ・各学部・研究科による組織的な授業改善の指針を提供します
- ・教育・授業についてのコミュニティをつくる支援をします
- ・研修プログラム

各研修は90分を目安としていますが、ご要望に応じて内容を一部変更しての時間調整が可能です。

プログラム一覧：

- ・現代の大学生
- ・シラバス設計法
- ・大学教授法の基礎
- ・メディアを活用した教授法
- ・多人数授業の教授法
- ・成績評価の方法
- ・大学教員という職業
- ・英語で教える方法
- ・メンタリングプログラムの進め方
- ・コーチングの技法
- ・教育改善のためのデータ活用

研修のすすめ方：

1. 研修を希望される日の1ヶ月前までを目安に、高等教育研究センターまで随時ご連絡ください。その際、部局名、希望される研修プログラム、ご希望の日時、その他のご要望・ご事情についてお知らせください。
2. お申し込みがあつてから2～3日の内にお返事を差し上げます。なお、ご希望の日時に添えないときには、ご寛恕下さい。
3. 実施決定後、日時・内容・方法について貴部局担当者とセンター担当者による事前打ち合わせを行います。研修の対象者、ニーズなどをお聞かせ下さい。
4. このプログラムでは次のようなサービスをご提供いたします。
5. 相談（部局のご要望をお伺いします）
6. 企画（ご要望に沿って、研修当日の内容を組み立てます）

7. 実施（研修当日の進行役を務めます）
8. 教材（研修教材をご提供します）
9. 研修の評価と今後の課題の整理（研修後に各学部・研究科のご担当者と高等教育研究センターの担当者と話し合います）
10. プログラム改善のため、研修参加者にアンケートをお願いしております。どうぞご協力ください。

・ウェブサイト

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/>

A.2.6 個別の授業改善支援（名古屋大学教職員対象）

・授業の悩みの相談にのります

「シラバスがうまく作れない」「学生が授業にのってこない」「学生の私語が多くて授業にならない」など、授業について悩みを抱えていらっしゃる先生方は少なくないと思います。どの教員も多かれ少なかれ悩みを抱えながら、授業をしているのが実情でしょう。

そのような場合には、一人で悩まずに、高等教育研究センターにご相談ください。授業改善の取り組みは一人でもできますが、できるだけ多くの方々、とくに同じような悩みを抱えた方々と積極的な議論や共同の取り組みを行うとより効果的にできます。多くの方との議論によって多くのヒントを得ることができますし、授業改善の意欲も高まります。

授業でお悩みの場合には、まずは気軽に高等教育研究センターにご相談ください。

・授業を見学させてください。授業を一緒に見学しませんか。

高等教育研究センターでは、すぐれた授業とは何か、それを成立させるための条件とは何かについて研究しています。この研究のために、また『成長するティップス先生』の内容を改訂するために、すぐれた授業を行っている学内外の先生方から積極的に学ぶために、授業を見学させていただきたいと考えています。すでに一部の先生方からご協力をいただいています。

また、高等教育研究センタースタッフと一緒に授業見学を希望する方を募集しています。日々の授業を改善するための手っ取り早い方法は、他の教員の授業、それもすぐれた授業を見学することです。名古屋大学にはそのような授業がたくさんあるはずですから、それをご一緒に発掘し、学んでみませんか。

授業見学でご協力いただける方、また、ご一緒に見学を試みようとご検討の方は、高等教育研究センターまでご連絡ください。

・ウェブサイト

<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/portal/consultation/>

A.3 学内貢献

A.3.1 学内委員・室員等の委嘱

東海国立大学機構アカデミック・セントラル インストラクショナル・デザインチーム

メンバー 加藤真紀

メンバー 安部有紀子

メンバー 安田淳一郎

メンバー 齋藤芳子

東海国立大学機構アカデミック・セントラル QTA・GSI トレーニングセンター

センター長 加藤真紀

メンバー 安部有紀子

メンバー 安田淳一郎

メンバー 齋藤芳子

メンバー 竹永啓悟

東海国立大学機構アカデミック・セントラル運営委員会

委員 加藤真紀

教育基盤連携本部会議

委員 加藤真紀

オブザーバー 安田淳一郎

全学教育企画委員会

委員 加藤真紀

文系総合館管理運営委員会

委員 加藤真紀

国際教育運営委員会

委員 加藤真紀

国際戦略室

オブザーバー 加藤真紀

OCW プロジェクトミーティング

委員 安部有紀子

プラットフォーム運営室（仮称）設置準備室 準備運営委員会「交わる」WG

委員 安田淳一郎

IR 戦略室

室員 和嶋雄一郎

教員メンターWG

メンバー 齋藤芳子

情報セキュリティ連絡協議会

メンバー 齋藤芳子

教養教育院基礎セミナー検討会

メンバー 齋藤芳子

博士課程教育推進機構

協力教員 齋藤芳子

博士課程教育推進機構統括会議

オブザーバー 齋藤芳子

A.3.2 学内活動への協力

教学 IR 企画・分析支援（教育基盤連携本部）

安田淳一郎

同上

松本みゆき

同上

和嶋雄一郎

基礎セミナーオンデマンド教材提供（教養教育院）

齋藤芳子

基礎セミナー担当 QTA 関連（教養教育院）

齋藤芳子

教養教育院 e-portfolio の開発（教養教育院）

齋藤芳子

A.4 社会貢献

A.4.1 学会等における活動

[加藤真紀]

- ・ International Medical Education Editorial Board Member (2022 年 4 月～)

[安田淳一郎]

- ・ 日本物理教育学会編集幹事 (2020 年 7 月～)

[和嶋雄一郎]

- ・ 認知科学会第 41 回大会プログラム委員 (2023 年 11 月～)

[齋藤芳子]

- ・ 研究・イノベーション学会評議員 (2002 年 10 月～[中断期間あり])
- ・ 大学教育学会広報委員会委員 (2021 年 8 月～2023 年 6 月)
- ・ 大学教育学会編集委員会委員 (2023 年 8 月～)

A.4.2 社会における活動

[加藤真紀]

- ・ 四日市市大学構想策定委員会委員 (2023 年 5 月～)
- ・ HEIJ 副代表 (2023 年 10 月～)

[安部有紀子]

- ・ 日本学生支援機構学生支援の取組状況に関する調査委員会委員 (2009 年 4 月～)
- ・ 文部科学省先導的改革推進委託事業審査委員会委員 (2016 年 7 月～)

A.5 組織運営

A.5.1 高等教育研究センター運営委員会委員名簿

委員長	北 栄輔	高等教育研究センター センター長
委員	周藤 芳幸	人文学研究科 教授
委員	伊藤 彰浩	教育発達科学研究科 教授
委員	長尾 確	情報学研究科 教授
委員	中道 範人	生命農学研究科 教授
委員	加藤 淳	多元数理科学研究科 准教授
委員	納谷 信	教養教育院 院長
委員	加藤 真紀	高等教育研究センター 教授
委員	安部 有紀子	高等教育研究センター 准教授
委員	安田 淳一郎	高等教育研究センター 准教授 (2023年10月より)
委員	松本 みゆき	高等教育研究センター 特任准教授
委員	和嶋 雄一郎	高等教育研究センター 特任准教授

A.5.2 高等教育研究センター運営委員会開催状況

2023年 5月 22日 (月)	第1回運営委員会 (Web会議)
2023年 8月 7日 (月) ~ 8月 21日 (月)	第2回運営委員会 (メール会議)
2023年 10月 10日 (火) ~ 10月 16日 (月)	第3回運営委員会 (メール会議)
2023年 12月 12日 (火) ~ 12月 26日 (火)	第4回運営委員会 (メール会議)

A.5.3 高等教育研究センター会議開催状況

高等教育研究センター会議および高等教育システム開発部門ミーティングとして月1回の会合を開催している。本年度の開催状況は以下のとおり。

第1回	2023年 4月 14日 (金)	WEB会議
第2回	2023年 5月 12日 (金)	WEB会議
第3回	2023年 6月 9日 (金)	WEB会議
第4回	2023年 7月 14日 (金)	WEB会議

第5回	2023年9月8日(金)	WEB会議
第6回	2023年10月13日(金)	WEB会議
第7回	2023年11月10日(金)	WEB会議
第8回	2023年12月8日(金)	WEB会議
第9回	2024年1月19日(金)	WEB会議
第10回	2024年2月9日(金)	WEB会議
第11回	2024年3月8日(金)	WEB会議

A.6 令和5年度基盤的経費

■名古屋大学高等教育研究センター2023（令和5）年度予算配分額

（単位：千円四捨五入）

授業料	学外研究開発助成金等	拠点事業経費	小計
15,100	22,860	9,750	〈47,710〉
（うち学内競争的資金）	（うち間接経費）		
550	1,860		

注）学内競争的資金は「研究力強化事業ほか」を指す。

編集委員長 北 栄輔 センター長
編集委員 加藤 真紀 教授
同上 安部 有紀子 准教授
同上 安田 淳一郎 准教授
同上 齋藤 芳子 助教
同上 松本 みゆき 特任准教授
同上 和嶋 雄一郎 特任准教授
同上 竹永 啓悟 特任助教
編集幹事 東岡 達也 研究員

編集補助 岡田 久樹子 事務員
同上 谷口 千佳 事務員

名古屋大学高等教育研究センター
質保証を担う中核教職員能力開発拠点

2023 年度総合報告書

2024 年 3 月 31 日

発行 名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
電話 052-789-5696
FAX 052-789-5695
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp>